

とを書かれなどして、現在に及んで居らるゝあなた、そのあなたの在らるゝことが確かできへあれば結構なのです。そして、それは無論確かではありませんまいか。

奥さん。

筆があらぬ方に逸れやうとしてゐました。御めんなさい。

先日あなたの方へ参りましたT——君の直覺(彼の言葉そのまま)したところによりますと、程なくあなたにもお芽出度が御座いますさうで、それを聞いて私は眞實言ひ盡し難いよろこびを感じました。夙うから、折にふれてもあつてもいい頃だと思つてゐたものですから漸く望みを達した様に思ひました。男のお子ならば矢張り御良人に似てほしく、お嬢様なら當然あなたに似てほしいと思ひます。おせつかいにも私はもうそれ／＼の名前など考へておきました。萬一お許しが出ましたらば申し上げませう。折を見て御良人にも伺つてみて下さい。何しろ、いいことでした。九州の主都とは云へ、東京から四十幾時間も汽車に蓋られねばならぬ御地方では、特に御良人は別しても忙しいお身體だし、よし願敗的にならず絶望的にならぬまでも確かにお淋しかつたに相違ありません。そのお淋しさから今度は自然お逃れになるわけです。一日も早くうひ／＼しい阿母さんぶりを拜見したいものです。阿母さんぶり阿父さんぶりも人によりけりで御座います。斯うしてお手紙を認めてゐますツイ右手

に妻が赤ん坊を抱いて睡つてゐます。そのまた右手の床に大きな坊主頭が一つころがつてゐます。これは今まで私が抱いてやすんでゐました長男の方で、もう四歳になりました。申し上げてもお解りにならないやうな夜具の中に斯うした家族の憐れな休みざまを眺めてゐますと、流石のありのまゝ、主義者も何とも言へぬ不安を感じずには居られません。愛する者たちのために、まつたく私は何とかせねばなりません。また、決心ひとつで何とか爲し得る信念をも持つてゐるのです。

奥さん。

苦笑せずして下さい。たうとう斯うした世帯話などへ落ちて参りました。さぞ苦々しく思召すでせう。然し、私は斯ういふお話をすることを今は別に恥しく思はぬやうになりました。或はまた、あなたも斯うした話を却つて喜んでお聞き下さるかとも思ふのです。要するに(先刻から何だか頻りに要するに、といふ言葉を使ふやうですが)空想的な、徒らに感奮的な時間はもうお互ひ私たちの間から過ぎ去つたものと見ていいと思ひます。私よりずつとお若いあなたと一緒に申しますのは失禮のやうですが其處には男と女との差があります。また、貧富の相違も多少はありませうが、要するにそれは色あひの違ひ位のもので、一齊に押し寄せて來るこの一生の變移には變りは無いと存じます。それとも、さういふことは少しも知らないとおあなたがおつしやるならば、それは致しかたありません。お互ひの

隔りの益々遠くなつたのに今更ながら驚くの外はないのです。

奥さん。

筆は段々最初の思ひ立ちとはかけ離れた方へ逸れてのみ参ります。で、思ひ切つて此儘書くのを中止します。そして斯ういふ状態に在る私をほめて御承知下さればそれで満足することにしておきます。う。(十一月十七日夜)

或る歌の友に寄する手紙

君の方はどうだつたか、こちらはこの二三日ひどく時化^{しげ}た。今朝、からりと晴れたので久しぶりに濱へ出てみると、話には聞いてゐるだが、千石船の帆柱だけツイ目の前の海上に突き出てゐるのだ。風をよけて浦賀へ寄らうとあせりながらとうとう此處まで吹き流されて来て沈んだものださうだ。それでも人間だけは助かつたさうだ。そのくせ、今日などは春のやうに霞んでネ、鷗がまつたり鳶が啼いたり、まるで昨日一昨日のことは夢のやうだ。

一度家へ歸つて釣道具を用意してまたぶらぶら出かけた。例の川口の芦の中にしやがみ込んだ。芦はもうすっかり枯れて(さうだ、君の來てた時も枯れてゐたネ)どんな茂い中にもよく四邊^{あたり}が見えるのだ。初めあの深い竹藪をくぐつて川端へ出ようとしながら、實に久しぶりの感がした。東京に四ヶ月も行つてゐて、今度歸つて初めての釣なんだ。そして非常に嬉しい氣がした。眼の前の枯芦も竹の落葉も濁つた淀も、向う岸の砂山も、その上の松も、または左手に僅かに見ゆる白浪もみんな初めて見るものやうに鮮かだつた。自分の心臓まで新しくなつたやうに思つた。

二三日來の雨で水が増し過ぎてゐて、思つたほど釣れなかつた。それでもいつものやうに沙魚はぜばかりでなく、色々な奴が釣れたよ。浪が高かつたのと、川の水の増したためとでもあつたらう、いつもは居ない磯の小魚が上つて來てゐてネ、それが釣れるのだ。名も知らない種類だが、みな實に綺麗なのだ。鳶紅葉のやうに薄くつて廣くつて美しい斑のあるのが最も多くかつた。鷹の羽とか僕の國では呼んだと思ふ。山國の君なんか見たら正に雀躍ものだネ。そのほか鰻も居たし、蟹もかつた。何しろ久しぶりなので、みな非常に面白かつた。

が、例の癖で、少し釣れ始めるともういやになつて、釣竿を其處に置いたまま煙草を取り出した。そして敷いてある新聞紙の重ねたのをずつと廣げてその上に横になつた。その下には芦を折つて敷いてあるのだから、氣持のいいベッドが出来るのだ。天氣が直ると一緒に急に今日など温かで、さうしてゐると汗でも浸みさうなのだ。きら／＼光つてゐる淀の水も實に静かで、砂山を越えて來る浪の響が何ともいへぬ落ちついた寂しさを誘つて居る。僕はもうすつかり釣のことをば忘れて、其儘ぼんやり睡つたやうに眼を瞑つてゐたが、ふつと驚いて身を起した。何といふことなしに、急にうしろの竹藪から君の姿がやつて來たやうに感じたからなのだ。竹を分ける音までしたやうだつた。

無論一種の幻覺なのだ。東京でもさうだつたが、今度歸つて來て留守中に幾枚か溜つてゐた君の手紙や葉書を読んで、一層君のことが氣になつてゐたから、斯んなことになつたのだらう。ぞうつとす

るほど、氣味が悪かつた。それから家に歸つて來て、直ぐ手紙を書きかけたのだ。非常に昂奮してゐたものだから、恐しい勢で頭から君を嗚りつけたものだつた。が、それでも五六尺長さ書いてたらう)中途で筆が進まなくなつて、仕舞には頭まで痛み出して、とう／＼破つてしまつた。今夜どうしたはずみか、不圖眼がさめて睡られなくなつたので起き上つてまたこれを書き出した。晝間のと違つて、唯だ斯うした平常の消息、鯊釣のたよりも書くつもりで書き出したのだ。君もその氣で讀んでくれたまへ。

S——君、君はいまでもM——町に入りびたりになつてゐるのか。さうでないやうにも思ひ、さうのやうにも思はれるのだ。若しさうだつたら大概で考へなほして家に歸らないか。歸つて少し身體を安めないか。實はネ、僕が東京に行つた間もよく君の噂が出た。E——君やT——君と落ち合つて、酒でも出やうものなら必ず君の事が話題になつたのだ。そして笑ひ興じながら一緒に寄せ書きの手紙でも出さうといふことになつたのだが、僕はいつもそれを制止した。そんなものでも見やうものなら、あの男のことだ、屹度何を措いても飛び出して來るに相違ない、そしたら折角納りかけてゐる君の心持がまたさんざんになるだらうから、と僕は考へたのだ。その時までは、矢つ張りこの初夏の頃の手紙にあつたやうに、すつかり思想を取り代へて、平凡に且つ眞面目になつて稼いでゐることのみ君を信じてゐたのだ。

ところがどうだ。これら幾本の手紙、まるで狂人じみた、馬鹿けきつたざれ書きや愁訴や、斯んなものが留守中の僕の机の上には載つてゐたのだ。これらを見た時、僕は慄へて腹が立つた。口惜しくもあつた。そして、その中の

近頃はどこからも便りがないので淋しくてなりません。收穫で目が廻るやうです。然し、僕は關せず焉の方です。無茶苦茶の心持で四日も五日もM——町滞在といふやうな事ばかりやつたものですから、信用は地を拂うし、家では準禁治産者の待遇にされてゐます。對手がないので手紙などがしきりに待たれます。講談本を讀んだり眠つたり、どうかすると茸狩りなどに出てみる事もあります。死にさうな氣がしてなりません。

夕暮の空のはたてのみだれ雲みだれ亂れて行衛知らずも

及び

僕は淋しい、わけのわからぬ氣分になつてしまつた。アルコール中毒の神經病であらう。罪ない母や妹どもを毎日泣かせてゐる。悪いと思つて泣きながらだ。然しどうすることも出来ぬ。不思議に死といふことが平氣になつて來た。空想すら眞面目には出来ぬ。

といふ最近の葉書を見た時、僕はとう／＼泣き度いやうな氣持になつた。

僕は君を決して馬鹿だとは思つてゐない。くだらない男だとも思つてゐない。實に生一本な、濁り

のない感情を持つた、そして、聰明な頭を持つた人だと思つてゐる。働けば立派に世間に出て働き得る素質のある人だと思つてゐる。今でもそれには變りはない。初めて君がこの海岸まで、六七十里の山奥から遙々やつて來て會つた時——もう三年も前になつた——から直ぐさう思つて、そして妙に心を惹かれた。けれど、いま思へばその頃から君は年にも似合はず遊里の味なども知つてゐたやうだし、何處やらに投げやりな、つとめて「絶望」といふものを味ひたいやうな、裏に廻つてものを見ようと、するやうな心を持つてゐた人であつた。けれども此頃のやうに、かさにか、つてたはけを盡す種類の、程度の人だとは全く思ひがけなかつた。そして圖らず今夜しみ／＼と思ひ起されたのは、いつだつたかの手紙にあつた

私はいま何ものをも信ずることが出来なくなりました。人生が何でせう、神が何でせう、況して詩や歌が何でありませう。唯だ、斯うして舌の上に湛へてゐる酒の味のうまいのは確かです。斯うして若い女の髪を爪繰つてゐる指さきの快感だけは確かです。

と云ふ風の文句のことである。當時、何といふ氣障な、生意氣な事を言ふだらうと唾棄されたこの文句が何故今夜急に斯う親しく思ひ起されたのだらうと、一寸自分ながら不思議でもあつたが、それは要するにこの憐れむべき半可通よと思ひ込ませる導火であつたのだ。そして、やがて僕はわれ知らず、自分の頬の熱くなるのを感じた。一體S——君は何故さうなつたらうと直ぐ續けて思ひ廻したこ

とに由つてであつた。

歌などをやり始めたからではないか——、僕は直ぐ斯う思つたのだ。歌をやり始めた最初の君の態度といふものは實に眞剣であつた。従つて進歩も速かつた。僕もまた一々叮嚀に君の歌を見てあげたばかりでなく、年も行かぬ人を相手に後では可笑しいやうな氣焔もはき、自分で讀んで面白いと思つた書籍をば君へ廻したりした。想ふに、その頃からでは無かつたか、君の手紙に次第に右の様な怪しい文句がなくなり、次いで善からぬ噂を君の身について聞くやうになつたのは。

僕は花の師匠が花の活け様を教ふるが如く、流儀として、若しくは法則として君に歌のことを説かなかつた。先づ何を措いてもむきだしの自己を知れ、人生を識れ、と言つた。今でもさう信じて居るのであるが、一つは君の性格が、嗜好がさういふ方面に好んで立ち入るべき人であると見たからでもあつた。初めて會つた時から君はよくさうしたことを自身にも言つてゐた。或はさういふことを自ら言ひ、また聽かむとして僕の所へ君は寄つて來たのかも知れなかつた。同氣相求むる心地で僕は君に油をかけた。しかし、僕の想像する如く目下の君の不始末がそのためであるとすれば、餘りにその效能の著しいのに驚かざるを得ないのだ。而して更に僕は稻を蒔いて稗のみ實つた驚きをも感ぜざるを得ないのだ。そして、いづれにせよ蒔いたものは刈らねばならぬと、いまそれを悲しく見詰めてゐるのである。

S——君、君の聰明な頭腦は斯うした僕の愚痴を聞きながら、一體如何なる反應を呈しつつあるか。同感しつつあるか、意外としつつあるか、それとも冷笑しつつあるか。

S——君、歌に對する僕の信念は昨日も今日も少しも變りはない。三十一文字に組み立てる手法としては別としても、歌といふものを知るためにはその根本に人生といふものを置かずに考ふる事が僕には出來ない。人生といふものを感じ、味ひ、識つて初めて歌といふものが出て來ると信じてゐる。人生々々といふと大相らしく聞えるが、要するに自分の事である。自分の營んでゆく生活のことである。自分を明かに知ることによつて、初めて佳い歌確かな歌が出來るといふのである。若し僕が熱心な和歌宣傳者であつたならば、今少し露骨に仰山にこの人生説を振りかざして大道の眞中に立ち表れたかも知れない。が、僕は唯だ獨りわが道を信じ樂しむに止まる一種の隱栖者に過ぎない。その隱遁所の扉を敲いてやつて來た一人が君であつたのだ。そして、一體君は何を獲てその門扉を辭したか。

君は或は答ふるかも知れない。自分といふもの、汎く人生といふものに就いて一心になつて考へた、考へれば考ふるほど解らなくなつて來た、そして終に斯ういふ風になつて來た、自分の意志の弱いは面目ないが、また止むを得まい、と。若し君にさう答ふる勇氣があるならば次のやうな僕の臆斷をも聞く餘裕があるだらう。初めから酒色に耽り度かつた、けれど其處等どころがつてゐる肥料臭いノ

ラ息子と同一視されるのも香ばしくない、だから人生不可解といふハイカラ好みの化粧をして明暮に緑の黒髪を爪線つてゐるのだ、と。

S——君、矢張り僕はひとを説教するなどといふ柄ではない。初めは極く靜かに説いて行つて、情理兼ね盡した上に君にその非を悟つて貰ふつもりで筆を執つたのだ。が、半ばにも達せぬうちにもう先に進めなくなつた、何だか餘りに馬鹿々々しくなつて來たからだ。で、これでも攔く。唯だ僕が現在の君に對してどういふ風に考へてゐるか、少しでも解つて貰へればいいと思ふ。そしてそれが幾らかの暗示にでもなれば結構である。尙ほ、斯うした——現在の君に對して——僕の態度を表明することによつて、萬一君のその下らぬ放蕩に幾分なり僕といふものの影が與つてゐるとしても、その責任感から僕は自ら脱却したことを告げて置く。そしてよし今後いつまで君のその状態が續かうとも唯だ遠くから見物——もしないかも知れないが——してゐるに過ぎないことを承知しておいてくれたまへ。蒔いた種は刈らねばならぬ、とツイ口をすべらしたのは、あれはほんのお座なりのひと真似に過ぎなかつた。また、蒔きもしなかつたが、よし蒔いたとしても思ひもかけぬ怪しきものがぞく／＼周圍に生え出して來るのを見ては、びつくりして其處を立ち退くほかはないのだ。刈るどころの騒ぎか。

いつの間にかすつかり夜が明けて來た、もう明けるのかも知れない。非常に寒い。ではこれで失敬するよ。

S——君、

今日もいい風だ。鰯船のかけ聲が頻りに聞える、漁があるのかも知れない。

昨夜封までしておいたのであつたが、どうも氣になるのでいま開封して讀み返してみた。そしてまた破いてしまはうかと考へたが、兎に角送つてみることにする。

今朝、今少し書き足したくなつた。

S——君、

一度こちらへやつて來ないか。

この手紙が届いて直ぐでもいい。そして二三年前のやうに一緒に貝でも取つたり、鰯でも釣らうぢやないか。同じ場所に、同じやうな状態でのみ居るものだから、なか／＼そのいやな情性から逃れることが出來ぬのかも知れぬ。斯んな變つた場所にでも來てゐるうちにはひとりでは氣が變るかと思ふ。逢へばまたいろ／＼立ち入つて話も出來るだらうし、第一、久しぶりで逢ひたくもある。M——

町の酒ばかりがうまいわけでもあるまい。

そして、S——君、當分の間、歌や文學といふやうなものから全然離れて見ては如何だね。よしそれが主な原因で無かつたにせよ、斯うしたものはえて人の氣をあらぬ方へそつてゆくものだ。さうして妙に逸れ始めてゐる場合など、特にさうだ。自分で、自分の境遇や心持をイヤに悲壯がらせたり、深刻がらせ度がるものだ。一步其處から立ち退いて自分の姿を見給へ、かなり馬鹿けた景色を眺めることになるだらう。また昨夜の皮肉を持ち出すのではないが、詩だの歌だのといふものは、よくごまかしが利くから、ともすればその蔭に身を忍ばせて自他を瞞着しようとするものだ。その點から云つてもそんな便利物から離れてゐる必要がある。そして、身體一つ、野ざらしになつて此頃の寒風に吹かれて見給へ。大概眼が覺めるだらう。

そして、眞黒になつて働くのだ。新しい氣持、新しい身體になつてお百姓に歸るのだ。一體君は一時あれほど好きであつた土といふものに何故さう親しめなくなつたのだらう。勞働神聖論、就中農夫神聖論によつて随分あてられたものだつたが、同じことでもみどりの黒髪指頭感觸論であてられるよりどれだけいい氣持だつたかわからないよ。

兎に角、歌は御法度だ。何處であつたか田舎の中學校の校長から、昔は樂隠居が發句を作つたが、當世は不良少年が新派和歌を作る、と言はれて苦笑したことがあつたが、いま端なくそれを思ひ出し

てまた苦笑せられた。

然し、斯んなことの解らない君では決してないのだが、ほんとに如何したことだらうと不審でならない。

いろいろいひたいことも脛もとまで來てゐるのだが、言へばみんなそれがイヤな月並になつてしまひさうだ。却つて心にもないものになつて表はれさうだ。逢つて、顔と顔とをつき合せたら、或は正直にこの心が通じるかとも思ふ。そのつもりで待つてゐる。

阿母さんにもそのことを打ち明けて暫くひまを貰つてやつて來給へ。待つてゐる。

何だかたいへん種々雑多なことを書いたやうだが、白狀するとこれは一種の僕の虚勢なのかも知れない。さういふ所に落ちてゆくさういふ人の性格、さういふものが斯う書いてゐる間も眼の前に實に氣味の悪いほど親しく浮んで來てゐるのだ。

では、今度こそ筆を擱く。そして、待つてゐる。左様なら。

春の一日

『やア!』

と言ひながら、彼は呆氣にとられて、眼の前の襖をあけて來た友人の顔を見上げた。
『暫くでした、お變りも無く!』

と友人はわざとらしく丁寧に頭を下げながら其處へ坐つた。

彼はそれには返事もせずに向ほしけくとその顔や姿を見詰めながら、

『どうして解つた?』

『どうしてつて天眼通でさアね、いくら逃けても駄目ですよ。』

とよそ／＼しくいひながら、ツイ片手を延ばして其處の窓を引きあげた。

『なるほど!』

と初めて生氣のある生來の聲を出して、

『これア好い處だ!』

窓からは一面に墓場が見下された。照るとも曇るともない日光がしつとりとその上に流れて、中どころに植つてゐる大きな椿には花がいつぱい咲き枝垂れてゐる。

『好いとも、……、好いには好いが、だつてどうして解つた、……自宅で喋舌つたか?』

友人は意地悪くによく笑ひながら、向ほきよとくと其處らを見廻して、

『ホ、あんな大きな銀杏もある、秋だつたら素敵でせうねエ。』

彼も諦めて、一緒に窓から首をつき出して毎日見馴れてゐる荒れはてた墓地を見てゐるが、不圖氣がついて、

『一體けふは何曜日だね?』

『金曜!』

友人は素直に答へた。

『何か起つたのか、役所はどうした、細君でも病いのか?』

『イ、エ。』

と終に友人も本氣になつて、

『何でもないんですよ、此處の解つたのは、ソラ、信州の中村君から聞いたのです。』

『なるほど!』

と言ふと、兩人とも大きな聲を出して笑つた。

彼はどうしたものか、近來ひどく人に逢ふのが辛くなつてゐた。朝晩顔を合はさねば氣のすまなかつた親しい友人や門下生などとも言葉を交ふるのが苦しく、とう／＼斯うした部屋を借り込んで朝起きると自宅を飛び出して夜遅くまで此處に籠つてゐた。そして、誰にもこの部屋の所在をば知らせなかつたのであつた。

『信州になら知らしてやつても大丈夫と思つて手紙の表に書いたのだつたが、蟻の穴から壊れた形だネ。』

ともう一度聲を合せて笑ひながら、

『でも君、頼むから君だけにしておいて呉れたまへ、折角おとなしくなりかけてる所なんだから。』

『大丈夫です、誰にも言ひはしません。』

友人もいつか全く平常の眞面目な顔になつてゐた。

『あんまり淋しくなつたもんだから、……、實は今朝山の神と一悶著あつたものですからネ、むしやくしや腹で到頭役所もすつぽかしてしまつたのです、そしてふいと此處のことを想ひ出して、中村君の手紙を探して、やつて來たのです。どうもお邪魔してすみません。』

『い、や、それア却つてよかつたが……、僕も何だか淋しくて仕様が無かつたところなんだが……、』

もう君は細君と始めたのかい。』

『う、ん、矢つ張りこれが無いからです。』

と指を丸くしてみせた。

『だつて貧乏は百も承知の上で出て來たんぢやないか。』

『だつてあんまり酷いからなのでせう、見ると聞くとぢア大きな違ひですからねエ、先生郷里から出て來て二三ヶ月しかた、ないのに著物はぬがされる、借金の言ひわけはさせられるといふので、次第に自暴棄になつた形なんです、今日もふて寝なんかしてます！ 女なんて仕様のないもんだ！』

吐きすてる様に言つたが、また氣を變へる様に立ち上つて、今度は一方の他の窓をあけた。

『ホウ、咲きましたねエ、櫻が！』

『今氣がついたのかい、もう君二三日前から咲いてるよ。』

『でも此處のはまた別な様だ、オヤ、木蓮もある。』

『木蓮ぢアない辛夷だよ、木瓜も見える筈だ、……、他處の誰のものでも斯うして寝ころんで見られるのは悪い氣持ちぢアないよ。……どうだ、久しぶりだ一杯行かうか。』

『さうですねエ、ほんとに、久しぶりだ、奥さんにはよくお目にかゝりますが……、奥さんも氣の毒だ、あ、して留守番ばかりさせられてゐちア……』

『僕もさう思はんぢアないよ、可哀相だとは思ふんだが、……、だつて夜は每晚歸つてやるんだからいいぢアないか、ハ、ハ、ハ。』

『さうはいきません、……氣のせるか此頃お宅の空氣が非常に冷たい!』

『さうかねエ、困つたもんだ。君たちに逢ふのが辛いばかりでなく、女房や子供の顔を見てゐるのも苦痛なんだよ、身體の具合も少々病わづいやうだし、ひとつは氣候のせるがあるかも知れん!』

『さうですかねエ、ひとつはお齡とのせるもありませう、ハ、ハ、ハ。』

『まさか……兎に角一杯行かうよ、久しぶりだ。一寸僕は出て来るよ。』

『い、え、それなら私が行つて來ます、イ、エ、その位は持つてます。』

『それぢアこれで何か鐘詰でも買つて來てくれ給へ、蟹か何か。』

さう言ひながら、はや二階を降りやうとしてゐる友人に小さな財布を投げやつておいて彼は身を起した。そして、ツイ軒端に櫻の花の枝垂しだれのさきが届いてゐる窓際の七輪に石油臭いたきつけの屑を入れ始めた。(六、四、一二)

線路のそば

日向國宮崎町にて、H—君。

まだ通知もしなかつたが、この五月の九日にまた引越した。いはゆる東京の郊外で、小さな丘の中腹、疎らに立ち並んだ櫛の木立をさし挟んでツイ傍を山の手線の鐵道が通つてゐる。その反對の側には癡兵院の鬱蒼たる森が横つてゐる。

前から越したいとは思つてゐるが、斯んなどころへ來やうとは全く意外であつた。しかも突然のことであつた。八日の午前、久しぶりに妻や子供を連れて穂の出た麥畑でも見せてやらうと、ぶらぶら散歩にやつて來た。そして通りかかつたのがこの丘で、不圖見ると或る一軒の空家にいま引越して來たばかりの荷物の置いてあるのが眼についた。前から越さうと思つてゐたところではあつたし、特に眼が速かつたのかも知れない。すると、荷車や家具などが雜然として置きすて、ある板塀續きのその隣家の門に貸家札の張られてあるのが直ぐまた眼に入つた。妻を見返ると彼女もそれに氣がついてゐる

たらしい眼をして私を見返した。

『見て行かうか』

『エ、見て行きませうよ』

斯んな風で、直ぐ其場で借りることにきめてしまった。元來いまのやうに雑誌發行の仕事などやつてゐると、市内にゐないとどうしても不便で、越すにしても是非市内の、しかも郵便局の近くに越したいといふ希望で探してゐた、め不快でたまらぬ今までの金富町の家にもツイぐづくと腰を据ゑることになつてゐたのだ。市内で、郵便局の近くで、日當りがよくて、四間か五間で一寸した庭などあつて、それで家賃が九圓か十圓、たかゞ十二圓位のの所を見附けようといふのだからなかく無い。實はもうその、家さがしにうんざりしてゐたのだ。

初め堀から入つて見ると、裏に三坪ほどの庭があつて、部屋は六疊、四疊半、三疊、二疊で、六疊と三疊の兩部屋が庭に面して、南七分西三分位の見當で日を受けてゐる、家作もまた新しい。井戸は勝手のツイ前で、その日越して來てゐた家と二軒だけの専用となつてゐる。それに四邊が木深くて、極めて閑靜だといふ様なことから急にそんな邊鄙なところへ越して來ることにきめたのだらうが、自分ながらよく解らない。市内に絶望した結果、自暴氣味で斯うしたものと考へられぬでもない。また

市内に住むといふのは、仕事の上からの止むを得ぬ要求なので、内心では決してそれを欲してゐたのではない。實はそれに耐ふべく、餘りに僕は疲れてゐたのだ。それこれが一氣呵成的に、斯うした思ひがけない郊外中でも不便な、而して靜かな所へ移り住むことになつたのだらうと思ふ。兎に角、僕はいまそれで満足してゐる。

電車はそれほどでないが、汽車の通るたびに夥しい音響の襲つて來るのが引越して來た當座の最大苦痛であつた。知つてゐるだらうが、山手線を通る汽車といつたら現今は貨物ばかりで客車はない。その貨物もまた無闇と長く、時には三四町にもわたるかと思はれる位のすら走つて行く。それが前に言つた楯林一つを距て、走るのだから眞實夥しい音だ。音ばかりぢやない、土地が搖れるのだ。或る午後、庭いぢりをした泥足のま、縁側に腰かけてぼんやり煙草を吸つてゐると、例の貨車がやつて來た。恐しい煙だと先づ遠くから來るその煤煙を眺めてゐたら、やがてゆさくと縁が搖れ始めた。見るともなく見てゐると、庭のはづれにすつと植つてゐる薔薇の青葉がさかんに搖れてゐる。幾つも咲いてゐるなかの一つの花などは、折も折、その時こぼれ落ちてしまつた。

『あれですものねエ！』

といふ聲がしたので氣がつくと、妻も隣室の三疊でこの汽車を眺めてゐたのだ。

煤煙も折々室内にやつて来る。汽車ばかりでなく、丘の頂上には電燈の球を作る工場があり、麓の水田を埋めた所には護謨製造の工場があるので、それらの煙突からもやつて来るやうだ。靜かに讀み入つた書籍の上などへふうわりと舞つて来られると、まつたく意外のものを見る思ひがする。一寸見ると四邊は眞實樹木のみ茂つてゐるやうな所なのだからネ。

来る早々氣になつたのは、矢張りこの線路だ。ソラ、君のまだ東京にゐる頃は漸く這ふことの出来る位だつた子供がいまは五歳で、しかも竝はづれた大柄の子で、悪戯ざかりとなつてゐるのだ。これが線路に行かねばい、がと、そればかりを氣にして口を酸くして警めてゐた。所が二三日前のことだ。もう夕方で、僕はよそから歸つて来て疲れた身體を座敷に投げ出して新聞を讀んでゐた。するとツイ近くで二三度けた、ましい汽笛を鳴らして来た電車があつた。蟲が知らせるといふのか、その汽笛を聞いた時すら何やら胸騒ぎがしたのであつたが、やがて直ぐその電車ギーといふ音をして停つてしまつた。と思つた時は僕は玄關から飛び出してゐた。そしてその電車の方へ馳けつけやうとその檜林の側まで来ると、二人の車掌が紺飛白の筒袖を著た子供を逆さに抱へて線路から降りて来やうとしてゐるのが眼についた。てつきりもう、やられたことだと僕は思つた。血や手や足がまぼろしとなつて眼前に渦卷いた。小さな溝を一氣に跳び越えて檜林にとび込むと、それよりもや、荒い紺飛白を著た僕の子供は其處の一本の木の下に蒼くなつてすくんでゐた。車掌に抱かれたのはこの子の友

達でツイ近所の子供であつたのだ。いきなりそのすくんでゐるの、手を取つて僕は引き立てた。そのうちに今一人の子供は「驛に連れて行け」といふ一人の男の腹立聲と共に急に電車に連れ込まれてしまつた。息の切れるやうな泣聲が聞えてゐるが、電車は進行を始めた。僕はわれ知らず自分にすがりついてゐる子供の頭を力まかせに殴りつけた。二度三度と續けざまに子供を檜の根もとの笹の中に倒れるまで殴りつけた。この子が生れて初めてのことである。まつたく掌があとで少し痛かつた。

夏の初めになればやつて来る苗賣の聲を君は覚えてゐるだらう。今年僕は初めてあれを呼びとめてみた。常に貧しい惶しい生活をしてゐるので、その賣聲をば愛してゐながら、それを買つて植ゑて見やうなどと會つて考へてみたこともなかつた。今度の家には幸に庭がある。植つてゐたのをば前の人 が持つて行つたと見えて、掘り荒らされたまゝになつてゐるので是非其處に何か植ゑねばならぬとは思つてゐたのだ。

たうもろこし、なす、きうり、いんげん、ふぢまめ、しそ、たで、ゆふがほ、かなな、ほうせんくわ、てつせん、をみなへし、しをん、ちどりさうなどといふのを二三度にわたつて買ひ込んだ。それから金物屋に出かけて小さな鋤のやうなものを買つて来て跣足になつて硬い庭土を起し初めた。そしてそれを細かに採み碎いて、小さな畑のやうなものを三つも四つも作つて、みんなそれに植ゑ込んで

しまつた。枯れたものも二三あるけれど、大抵はついたやうだ。」
 朝夕尻端折でそれに水をかけてやつてゐる若山牧水の姿を想像することは、或は君の困難とするところだらうかと思ふ。

なまけ者の癖に朝早いのは前からのことだつたが、此處に来て一層早くなつた。大抵四時か四時半、五時には必ず起きてゐる。起きて用をするのではないが、太陽のまだ輝かぬ間の静けさとやはらかさとがいまの身には何よりうれしいからなのだ。自分で汲む井戸の水も、それを庭の畑にそゞぐのも、または煙草をくはへてひそかに門を出てゆくのも、みなうれしい。

例の楢林をぬけて線路に出ると、其處はかなり高い土堤になつてゐるので、人家と森と入り混つた武藏野がすうつと見渡される。この頃はそれがみな瑞々しい青葉となつてゐるので、一層いゝ。この邊に多い白鷺が、幾つもくゞ空を啼いて通る。あの眞白な、瘦せた姿は愛らしいものだ。霧が次第に晴れて來ると遠い地平線の方に低くくゞ山脈が見え出す。思ひも寄らぬ空に富士山が輝いてゐるので驚いたこともあつた。山は、夕晴の時にも見える。

癡兵院の森もいゝ。いゝといふより何やら不思議の森だといふ氣がする。此處ばかりはそれこそ日かな一日かすかな物音ひとつ起つたことがない。常にしいんとして終日其處の梢からは雫でも落ちて

ゐるやうに感ぜらるゝ。注意深く其處此處の籬根から奥を覗いてみると、深い木立の間に、いろ／＼な建物が立つてゐるやうだが、僅かに玻璃窓がらすまどが光つてゐるきりで、矢張り何の物音も、動いてゐる影もない。三萬坪からあるだらうが、まつたく此處だけ氷つたやうに周圍と境を異にしてゐる。晝は深山らしい種々の鳥、夜は梟が毎晩啼いてゐる。

噂だけかも知らないが、此處の奥には手も足もまるつきり無くて、僅かに獲のやうなもの、なかに入れられて生きてゐる人も居るといふ。

けだるさを叱り叱りて起きいづるしののめの

空に深き霧降れり

午前四時五時まだ過ぎずしののめの霧降れる

まのわれのたのしさ

203
 たのしさとは云ふものゝ、一日中の寂しいのもまたこの時である。僕のいのちが、僕のためしひがまつたくわれにかへつて靜かに瞳をひらいてゐるのは、多く唯その時のみなのだ。その靜かな、澄んだ瞳に映つて來るあらゆるもの、といふうちにも自分自身のこと、過去のこと……それがみな胸に沁み入るやうな悔恨や寂寥を伴はぬものはないのである。過去から延いては未來の影がよりどころのな

い不安を引いて頭の上つて来る。さうしたなかにある獨りぼつちの自分を描きながら、殆んど毎朝これら線路の傍や、林の中や、森のかけ、若しくは麥畑の畔を歩いてゐるのだ。が、それも暫しで、やがて空が光り輝いて、種々雑多な汽笛の音や人の聲などが其處等に満ちて来ると、忽ちまた萎びた機械人形の自分に返つて、惶しい、そして何もせぬ一日のくらしに入るのである。

書けば永くなりさうだ。此處で切つて置かう。

君は元氣か、この夏あたり、一寸でも出て来られないか。(六、五、三)

元旦記

うすく、門を叩く音に気がつきながらまだはつきり覺めずに居ると、やがて妻が出て行つて應待してゐる。程なく門はまた締つた。

『何だ』

『小荷物です、大阪の大島武男さんから……』

『ほう、何だ』

妻は隣室で手紙か何か讀んでゐるらしく、

『おさかなですつて、……味噌漬で、この元日から三日頃までがたべ頃なんださうです。』

この人からは昨年も恰度今日あたり妹さんの手料理だといふ蒲鉾を買つた事がある。

『細野さんのも、さうしてみると小包なんですネエ。』

『らしいネ。』

私も恰度その事を考へてゐたところであつた。上總の細野春翠君から自分の畑でとれた百合根と牛蒡とを送つたからといふ手紙を受取つたのはもう三日も前である。それでまだ荷物が届かない。その

手紙よりも一日前日向の越智溪水君から猪肉を送つたといふ便りを貰つて、毎日郵便局に注意し
 るのだがまだ配達して来ないでゐるのだ。此頃この土地の郵便局と來たら、實に無責任で特に小包
 などは三日四日必ず局に留めて置くものらしい。細野君のは近國だしするから必ず鐵道便だらうと思
 つてゐたのだが、斯う遅れるところを見れば矢張り小包と見える。

眼が全然覺めた。

『何時だ。』

『十二時半です。』

妻と姪とは隣室を掃除してゐる。

掃除も済んで、兩人ともこちらの室に來て床に入つた。ふと氣がつくと鐘が聞える。二ヶ所か三ヶ
 所で鳴つてゐる様だ。

『鳴つてゐる様だネ。』

『え、もう先刻から。』

興味深く聽いてゐたらしい妻の返事を聞きながら、私はツイ側に寢てゐる加藤東籬君を起した。こ
 の二十九日に突然彼は津輕から上京して來たのであつた。熟睡してゐたらしい彼は容易に返事をしな
 かつたが、私が『オイ、起きないか、除夜の鐘が鳴つてゐるよ。』

といふと、漸く『え、え、……』と蒲團の中から首を出した。氣の毒に、この珍客にも私の家では
 家族と雜魚寢をして貰つてゐるのだ。

『聞えるだらう、ソレ。』

『ア、聞えますナ。』

次ぎ、次ぎと、いかにも靜かに響いて來る。それぞれの記憶を思ひ浮べながらも私は久しぶりにこ
 の鐘を聽く様な氣がしてならなかつた。やがて、友も、妻も、姪も、みな睡つて行つた。

私は次第に心の冴えてゆくのを感じた。そして程なくその鐘の音も斷えてしまつた。『終つたナ』と
 思ふと自然に私は半身を起してゐた。そして左右に睡入つてゐる人たちを見廻しながら、靜かに起き
 上つた。先刻まで起きてゐた妻たちの埋めて行つた茶の間の火鉢の火をかき起してから私は顔を洗つ
 た。そして何といふ事なく机を電燈の眞下に持つて來て、その上に原稿紙を擴げた。が、やがてそれ
 はホンの一時の昂奮で、頭は昨日來の雜多な用事でひどく疲れてゐる事に氣がついた。と、思ふと私
 はまた机を舊の所にしまつて、今度は酒の用意を始めた。家中ありたけの火鉢(と云つても二つ)に火
 を山の様におこして双方に湯をしゆんく沸かした。食卓を出したり、座布團を配置したりして、先
 づ妻を起した。午前の二時である。一時間は彼女も睡つたわけだ。續いて姪が起きて來た。

『睡ければ俺たちの出かけたあとでまた寢直せ。』

『い、え、睡くはありません。』

寢惚聲ねぼけこゑで言つてゐる。

『頂いたのを早速開きませうか。』

『ア、い、ネ、恰度よかつた。』

正月らしい雑多な食物の擴けられた卓上に、まだ桶のまゝの先刻さきときの大島君からの贈物が持ち出された。その間に私は加藤君を起した。

酒の匂ひが室に流れる頃、その魚の焼けつく匂ひも起つて來た。

『元日だ、過したまへ。』

加藤君も何時になく盃を重ねてゐる。

『いま三時だ、あと二時間は飲んでいゝ。』

『フ、フ、そんなには飲めません。』

妻も盃に唇をつけてゐる。そして、

『斯んなお正月をしてゐると、今年は何だかい、年らしく思はれてなりませんね。』

などと言つてゐる。

何彼と云つてゐるうちに矢張り五時まで飲み續けた。急いで雑煮を喰つて、加藤君と共に家を出た。

戸外はまだ闇で、月が寒々と残つてゐる。大晦日といひ元日と云つても斯んな郊外の事で、犬が遠くで吠えてゐる位、昨夜といひ今朝といひ實に静かなものだ。兩人は酔つた身體を擦り寄せて津輕節を低聲こゝろに唱ひながら電車通りに出た。大手町までは空いてゐるが、其處で乗換へると電車は恐しいこみやうだ。みな深川の不動様への初詣りだ相だ。日本橋まで來ると終つひに私などは人と人との押し上げられて足は下を離れてしまつた。幸に結び立ての高島田が三人同じやうに身體の近くにもがいてゐるので僅かに眼と心とを慰める。永代橋の袂で降りる筈なのだがこの始末で身動きも出來ず、たうとう不動様の前の停留場まで持つて行かれてしまつた。

其處から駈足で永代橋まで戻り、大川に沿うて汽船發着所まで馳けつけると、何の事だ、けふは三崎行きは休航だ相だ。加藤君が津輕の真中に生れてまだ何處も他國を知らない人である事を知つてゐるので、今度の上京を幸ひ、少し暖い國の海岸の冬でも見せ度いと考へて、けふ元旦早々三崎行きを企てたのであつた。椿の咲いてゐるのも、梅の咲いてゐるのも(北國の梅は違ふさうだ)まだ見た事がないのみならず、こゝ三四ヶ月は全然雪まるくの中に埋つてゐなければならぬといふ人に三崎あたりの此頃の日光や、海のひかりや、椿や、水仙や、菜の花の咲き盛つてゐる所を見せたらどんなに驚くだらうと思はれたのである。

兩人はそれから東京停車場へ行つた。横須賀行の切符を買つて、陸路を三崎へ行かうといふのであ

る。汽車は出た。大きな市街の上を渡る汽車の窓から見る大正七年一月一日午前八時頃の日光は煙りながらも晴れてゐた。

途中鎌倉下車。鶴ヶ岡八幡、長谷の大佛、観音と見て歩く。観音堂の上から海がよく見えた。

『ア、咲いてる、咲いてる。』

といふので不圖振返ると一本の椿の老樹の下に立つて加藤君が口を開いて仰ぎ入つてゐるのである。これが四十二歳厄年の人で、十七歳とかの息子のある人と如何して思へやう。この静かな友の姿を見てゐると、私は漸く東京を離れて旅に出てゐる様な、しみじみした心地になつて來た。

『ネ、加藤君、もつと遠くへ行かうよ、これからのろくろくと三崎まで歩くのがいやになつた。いつそのことこのまま藤澤へ出て、それから汽車で沼津まで行かう、そこからなら富士もいいよ、そして明日海を渡つて伊豆の土肥とひへ行かう、伊豆はまた三崎とは一段だ、其處には温泉もあるし、それから……』
加藤君には三崎が何處か、土肥が何處か見當けんたうはつかないのだ。言下に行く事にきめる。さうするともう大塔宮の土牢だの江の島たのを見て廻るのが面倒臭く、直ぐ電車で藤澤に出た。其處から汽車、國府津あたりから案の如く富士が正面に晴れて來た。やがてその裾野を越えて沼津驛下車、街を突き切つて狩野川の川口の宿屋に著いた頃は程よい黄昏であつた。通された室の前の廣い入江には明日の朝土肥に渡るといふ汽船が靜かに浮んでゐる。

酒と小鳥

誰でもさうかも知れないが、わたしは酒を飲むのに、のみたくてのむ時と、習慣や行掛りでのむ時との二つの場合がある。この頃では前者の、のみたくてのむ領域が、大分狭められて行くやうなのを感じて、内心妙ならず悲しんでゐる。こののみたくてのむ場合にも亦自づから二つの別があるやうだ。一つは、自分の心が非常に熱して來て、心の渴きに堪へ兼ねてのむ時で、他は周圍の景物、例へば珍しい雪が降つたとか、或は如何にも靜かな夕暮であるとかいつたやうな時に、自然に誘はれてのみたくなる場合である。

尙附加へるならば、いま一つの場合がある。それは身體の工合で、固體を腹に入れる前に、それよりも軟かな尊い液體を、先づ身體に注射しておくことを、適當と感ずるやうな場合がある。

そこで第一の場合の、心の熱した時といふのは、多く歌を作つたり、物を書いたりする時に起つて來る。勿論これは唯一人で、机の上に置いてちびくとのむ。然も極く強烈なのをやるに於て、言ひ

難しい味がある。第二の場合には、相手があるもよし、ないもよい。一體わたしは獨酌を好むのだが、その場合非常に心の合つた人であるなら、對酌も亦悪くはない。

この二つの場合には、さかなといふやうなものはあまり問題にしない。殆んど酒ばかりで結構だ。けれども第三の場合の、いはゆる『一杯のみたくてのむ』といふ時には、その時によつて、さかなのあれこれとか、又は自分の身體の工合や氣持を氣にする事が多い。例へば『今夜は肉が食べたい』とか『豆腐が食つて見たい』とか、又は指先の汚れも氣になるやうで、是非お湯に入つて來てからでなくしてはと思つたり、もう少しお腹をすかして來てからといふ氣からそこらを一廻り散歩して來なければならなかつたりする。

多くの場合、わたしは淡白な酒を好む。たとへば伊丹の『白雪』のやうなものである。けれども宿醉の翌朝などは、今少しきつい『さくら』なども悪くはない。概していふと、多勢してのむやうな場合には、普通でさへあれば文句は言はないが、一人でのむ時などは、せい／＼いい酒のみ度いと思ふ。それから夜更けて机の上に置きたいやうなのは、矢張り強烈な洋酒に多いやうだが、總體洋酒はわたしはあまり好まない方だ。

要するに、わたしの自然にのみたくてのむ酒は、常に自分の心や身體を清淨にし、又は高潮せしめる。だからそんな場合にはわたしは、酒其物を靈魂あるもののやうにも、將又極めて親しい友達のやうにも思ひ做すことがある。

この頃、餘り澤山詰め込み過ぎた報ひで、どうも身體が思ふやうでない。従つて從來のみ友達なことから、『牧水も籬がゆるんだ』と罵倒される程、酒に耽る場合が尠なくなつた。又中には、わたしのかうした様子を見て、まじめに禁酒を忠告する人もある。けれどもわたしは、自分といふものに興味を持つてゐる間は、恐らくこの懐かしい友と別れることは出來ないであらう。

春になつて、櫻でも咲いたらば、「創作社」の野外宴會を開いて見たいと思つてゐる。そしてその時に久しく取つておきの、底を抜いて見ようと今から楽しんでゐる。

小鳥の音を聞く毎に、何といふことなく、わたしは自分の故郷を思ひ出す癖がある。これは郷里のそこそこで聞きたいろ／＼な小鳥の聲の記憶が、いつまでも耳に消えないでゐるせりでもあらうが、あの清らかな澄んだ聲音を聞くと共に、おのづと自分の純な少年時代や、その背景やが、胸に泛び出て來る爲であるかも知れない。

それからこれは、自分で飼つた經驗がないからでもあらうが、わたしには、籠の中の小鳥に對する

興味は割合に少い。或は又、さうした興味をあんまり持たなかつたから、今迄飼はうとしたこともないのだとも言へやう。時折籠の中で鳴く鶯や駒鳥の音を聞いて、思ひがけないところで鳴くものだと驚く位である。

小鳥と言つても直ぐわたしの頭に泛んで来るのは、この頃ならば、やがて青々とした麥畑の上に囀り出す雲雀の聲か、或はもう少し春が更けて、麥の色づく頃郊外などの通りすがりに、樹木の梢から落ちて来る頬白の聲である。

けれどもさう言つたからといつて、雲雀や頬白が特に好きだといふのではない。山だとか野だとか木だとか草だとかさう云ふ背景の中におかれた小鳥が好きなので、その場合々々によつて、わたしの小鳥に對する好悪は變つて来る。従つて、とりとめてどの小鳥が好きといふことは、わたしにはまづ無いといふより他はない。

おもひでの記

庭 梅

順序から云つて私は先づ自分の誕生の時の事から筆を起さねばならぬ様に思ふ。明治十八年八月廿四日、その日は陰曆では恰度お盆の十六日に當つてゐた相だ。その朝とりわけて氣分よかつた母を二人の姉は——私には姉ばかり三人ある、長姉はその頃もう二十歳位であつた筈だ、その姉と其次の姉と二人して朝の掃除をするために、その前から座敷に床をとつてゐた母を——母も既に若くはなかつた、その妊娠の事を他へ物語る彼女の話のなかに、初産の時よりよつほど恥しかつたといふ言葉が出て來たのを其後私は耳にした事がある——東の縁側へ連れ出して坐らせてゐた。漸う日の光が峰から射して來る頃だつた相だから、餘程早朝であつたのだらう。お盆の事ではあるし、掃除から朝飯の仕度と、姉ども、暫く母を忘れて勝手の方に行つてゐる時に、何の用意もなしに急に産氣ついて私は生れたのだ相である。その朝、祖父も父も留守で、もあつたのか、唯だ二人の若い姉たちが右往左

往して全部その場の處置を執つた様にのみ、私の記憶には物語られてゐる。

此處でお前はことごとく音をさせて生れたのだよ、と其後もう餘程生長してから度々姉どもは私をその縁側へ連れて来てはからかつた。田舎の家の事で、幅の廣い、頑丈な板縁で、眞東に向いてゐる。中學に出る様になつて暑中休暇で歸省してゐる時など、其處は家の中でも涼しい所なので私はよくその板縁に寝ころびながら、自分の生れた時の事などを想像して見たものだつた。縁のツイ向うは築山の様になつてゐて——程なく小さな野菜畑に變へられたが——ゆすら梅(郷里では庭梅と呼んでゐた)の大きな株が二つ並んで、小さな果實が夏ごとに累々となつてゐた。ゆすら梅の少し向うには柚の老木があり、これも毎年軒端に沿うてよく實をつけた。

牡丹櫻

その年、父は厄年の四十二歳であつた。その歳の子は育たぬといふ田舎の習俗から私は直ぐ路傍に棄てられた。路傍と云つても我が家の土塀の裏門の前で、棄てらるゝと共に村での舊家奈須といふ家の細君に拾はれたのである。その縁から私はこの細君を小學校の頃まで「番所の阿母」と呼んでゐた。番所といふのは舊幕時代にその家で何か役を勤めてゐた所から來た名であるらしい。

棄てられたといふ裏門の所には土地に珍しい大きな八重櫻の木が三本立つてゐた。お前はこの木の

根に棄てられたのぢやないか、そんなに泣くならまた棄てやうかと、背に負はれながらよく姉に嚇されたのを覚えてゐる。この八重櫻についてはもう一つ記憶がある。どうした調子であつたか、これは母が直接に私に語つたのであつたが、母の何歳(忘れたが、十六か七か、とにかく極めて若かつた)かの時その父の任地(母の父は延岡藩の代官を勤めて當時私の村よりもつと奥の神門といふ村に赴いてゐたのだ相だ)から何處とかの神詣りに行く途中、脚絆の紐が解けて、母だけ一人同伴者に遅れてこの八重櫻の根がたで結び直してゐた。それをこの裏門から見たのが私の祖父と祖母で、それから母の身許を探して遮二無二嫁に所望する事になつたのだ相である。恰度花の盛りで、紐を結びながらも思はずそれに見惚れてゐたといふ若かつた母の面影がこの木の花を見るごとに私の想像に上つたものであつた。私の地方には單瓣の山櫻ばかりで、牡丹櫻と呼ばれてゐる八重櫻は私の家のこの三本だけで、他では殆んど何處でも見ることが出来なかつた。恐らく他處者の祖父が何處か他處から持つて來て植ゑたのだらうと思ふ。

祖父の事

私は此處で祖父の事を少し書き足して置かうと思ふ。私の祖父は武藏川越在の農家の出で、幼時より江戸に出で兩國の生藥屋に奉公してゐた。そして當時肥前の平戸にシイボルトといふ和蘭の醫者が

來てゐるといふ事を聞き、生藥屋から自宅に歸り、更に身延山詣でと稱して自宅を出で、其儘肥前まで行つて其處でシイボルトに仕へて多年の間醫學を學んだ。當時蘭學または洋醫學を修めたと云へばかなり大したものであつたに相違ないが、それがどうして日向の様な田舎へ引き籠つたか不思議である。當人の言ふところによると江戸に歸る途中、難船して日向の地に吹き着けられたといふのであるが、これは無論嘘である。おもふに何かさうした人に知られぬ山の中へ隠れ度いか又は隠れねばならぬ必要があつて引込んだものに相違ない。彼は日向に居着いてからも一度も郷里へ歸らなかつたばかりでなく、音信すら爲さなかつた。が、西南の役の時、川越藩から出て來た官軍の一隊が恰度私の村へ來て泊る事になり、それで漸く郷里との消息が通ずる様になつたのださうである。西南の役と云へば私の生れる八年前で、祖父は餘程の老年であつた筈である。それまで音信を絶つてゐたと云へば、兎に角餘程の變人ではあつたらしいが、何か其間に深い事情のあつた事らしく思はれる。彼は初め細島美々津と云ふ海岸の港町に業を開かうとし、更にそれより山地に入り込んで私の故郷である坪谷村に來り、土地の舊家で酒造家をしてゐた奈須家の女を娶り、其處に居を定めた。彼は頗る殖産の道に長けてゐた。醫業のほか、出來るだけ廣大に山林や田畑を買ひ且つ墾き、來て幾年も經たぬうちに其處に於ける有數の財産家になりおほせた。そして一方では非常に文字を愛したらしい。幼い時の私の矜の一つであつたが、二階には十數個の大きな書籍箱が並び、それにはみな漢籍が満たされてゐる。

た。蘭語の書籍も混つてゐて、これなどは今でも保つてあるかと思ふが、その辭書などは厚さ二寸位の美濃紙の帳面に一杯に極めて細かく和筆で洋文字が筆寫されてゐる。これは彼の肥前時代の苦學の遺品なのである。この辭書が二冊續きになつてゐた。漢文は餘程好きであつたと見えて、一寸他出する時でも必ず一二冊のそれを携へてゐた相だ。そして晩年には村の氣の利いた青年たちを集めて自らその講義をしてゐた。

彼の亡くなつたのは私の三歳の時であつた相だ。私はその顔をも覚えてゐない。たゞ長い雪白の豊かな髻だけを記憶してゐる。私はよくその髻にぶら下りながら戯れたさうである。その一部が切つて保つてあつたが、優に尺餘に及ぶ白髻であつた。其後私は東京に來るやうになつて、何より先にその川越在の祖父の出た後といふを尋ねて行つた。其處には若山の姓を名乗る家が幾軒かあつて、中の一軒には故人の從弟だといふ老人が其頃まだ生きてゐた。そして祖父が身延詣でに行くと云つて一生の門出をした時に、まだ幼なかつた彼はその後を追つて泣いたものであつた相だ。その日は雨が降つてゐる若かつた祖父は簑笠をつけてゐた相だ。此處まで追つて來たのだが、土産を買つて來るからといふのでたうとう泣きながら追ひ返されたのであつたと、もう耳の遠くなつてゐる老人はわざ／＼私をその道の曲り角まで連れて行つて呉れたりした。四顧茫茫たる平野で、斯んな所から自分の祖父は生れたのかと思ふと、妙に遙かな思ひが湧いてならなかつた。極めて貧しいらしい農村で、その從弟だと

いふ老人の生きてゐる間は其後も二三度訪ねて行つたが——彼は私を見るのを少なからず喜んでゐた——その歿後はまたすつかり遠ざかつてしまつた。

坪谷村

私の生れた村、詳しく云へば日向國宮崎縣東臼杵郡東郷村大字坪谷村は山と山との間に挟まれた細長い峡谷である。ことに南には附近第一の高山である尾鈴山がけはしい斷崖面を露はして眼上に聳えてゐるので、一層峡谷らしい感じを與へて居る。村の長さは東西に延びて四五里もあるだらうが、戸数は僅か二百か三百足らずのものであると思ふ。私の家はその一番戸であつた。(今は三番地と呼ぶ事になつてゐる相だ) つまり村の東の入口に當つてゐる。此處に新たに家を建てた事に就いても私は祖父を並ならぬ人の一つに思はざるを得ぬのである。それはその場所が附近でも際立つて優れた好位置にあるからである。或は他に理由があつたか、若しくは偶然であつたかも知れぬが、私には矢張りそれが彼に山川を見る眼があつた故だとのみ思はれてならない。家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、真下に溪に臨んで居る。そして恰度その溪は其處まで長い瀧の様になつて落ちて來た長い瀧が、急に其處で屈折して居るために其處だけ豊かな淵となり、やがてまた瀨となつて下に走り、斜め右と左とに末遠くその上下の溪を展望する事が出来る地位にある。彼はその自家に名づけて省淵廬と呼ん

だ。膳椀入の箱などにまで省淵廬々々と書き散らしてある。そして村の眺望の基調を成してゐる尾鈴山をば殆んど正面に、而してまたや、斜めにその全體を眺め得る様な地位に當つて居る。晴れた日も悪くはないが、私の家の眺望は雨の日が特にいゝ。それは雲と山との配合が生きて來るからである。元來この尾鈴山はその南面の太平洋に臨んだ方は極めてなだらかな傾斜で高まつて來て四千尺近い頂上となり、急に北に面して削り落した様に岩骨を露はしながら峻しく切れてゐるのである。常に陰影の多いその山の北面には、晴れた日でもよく雲を宿してゐるが、一朝雨降るとなると山全體が、いやその峡谷全體が、眞白な雲で閉されてしまふ。そしてその雲の徂徠によつて到るところ巒の多いその峻山が恰も靈魂を帯びたかの様に躍動して見えるのである。

私はものごゝろのつく頃から痛くこの溪と山の雨とを愛した。で、歌の眞似などを始め出して雅號といふものを使ふ様になると先づ雨山と稱したものであつた。白雨とも云つた。現に使つてゐる牧水といふのも當時最も愛してゐたものゝ名二つを繋ぎ合せたものである。牧はまき、即ち母の名である。水はこの溪や雨やから來たものであつた。

溪は尾鈴山の裾に沿うて白々と流れてゐる。そして人家は大抵みなその溪に沿うて作られてゐる。其處に五戸、此處に十戸と、長さ四五里の間に三百足らずの家が散在してゐると言へばその寒村の面影は自ら彷彿するであらう。住民の多くはみな山の仕事に従つてゐる。米麥の如きは村自身の供給に

も不足する位にしか出来ない。材木と木炭と椎茸とが最も主要な産物となつて居る。それらは多く大阪に送り出される。大阪の街路に諸所日向炭と書いた看板を見る事は知つてゐるであらう。其處では泣く子を嚇すに日向の炭焼にやつてしまふと言つてゐる相である。その木炭の本場として最もこの附近は聞えてゐるのである。

この村に限らず日向といふ國はその天然の状態から一切周圍の文明に隔離してゐたのである。東南一帯は太平洋で、その洋岸は極めて硬直で更に港らしい港を持たず、西北には重疊した高山の一帯が連互して全く他との交通を斷つてゐた。自然遙かに離れた孤島の様な静寂を保たざるを得なかつたのである。それが大阪商船の航路が開くる様になつてから急に騒立つて來た。四國中國邊の山師共が宛然手近の北海道か臺灣の様な氣持でどや／＼這入り込んで來た。それ等が詐欺を教へ瞞着を教へた。やがて私の村にも縣道といふものが開かれる、工夫が入り込む、賭博が始り、姦通が行はれ、喧嘩が擴まつた。それが恰度私の物心のつく前後に起つた事である。子供心にも苦々しく思はれる事が後から後からと起つて來た。それらを見てゐた故か私の郷里に對する、と云はうか其處の人々に對する記憶は極めて氣拙いもの、みである。故郷、と云へば私の心には直ちに懐しい山や川の面影が浮ぶ。が、それ以上に立ち入つて其處の事を思ふのを私は好まない。これは強ち右言つた様な理由からのみでなく、多くは私の感情の我がま、からでもあるかも知れない。

名 づ け

話はまた前に戻る。

生れて程なく、私の命名なづけが行はる、日が來た。恰度その一二日前に祖父はどうしても遠方へ出ねばならぬ事があり、その日になつたら斯ういふ名をつけるよと言ひ置いて他出してしまつた。それは立た虎こといふ名であつた。第一に不服を稱へたのは二人の（一人の姉はまだ幼なかつた）姉である。ゲンコと云ふのは土地の魚屋などの使つてゐる數の符丁ふぢやうである。そんな馬鹿な名があるものでない、構はないから祖父おぢいさんの留守に變へてしまへといふので、二人して考へた末、繁といふ名にして役場にも届けました。彼の頑固な祖父が定めし怒つた事であらうと思ふが、取消されなかつた所を見ると或は唯だ笑つて済ましたのかも知れない。姉たちが斯ういふ名を考へつたのは當時の繪入郵便報知新聞（今の報知新聞の前身かと思ふ）の續きものに出て來る女傑に自ら男装してまで學問をした葉山繁といふ非常な勉強家があつたので、葉山と若山と似ても居り、それにあやかる様にと斯う名づけたのださうである。不幸にしてこの繁は稀有なる怠惰者なまけものとして生ひ育つことになつてしまつた。

三人の姉

第一の姉とは私は二十歳近くも歳が違つてゐる。彼女の嫁いだのは私の二つか三つの時で、その時向うの家から持つて来た鮮魚の、鯛や鯉などでもあつたか、紅い青いの、美しさに雀躍こぞどりして歡んだ事を覚えて居る。彼女の嫁つたときは、尾鈴山の向側の都農つとといふ海岸町の米穀や肥料などを商つてゐる家で、其處から私の家に來るには尾鈴連峰の一つである七曲峠といふを越して來るのが近かつた。或時、義兄あにがその峠を越えて來た。そして土産に氷砂糖を持つて來て、これはあの七曲峠に澤山落ちてゐる石であると言つた。私は悉くそれを信じてしまつて、行きさへすればあの山の上にはこの甘い石が無數に落ちてゐるものと信じ込んでしまつた。それから頻りにその峠を越えて來る義兄や姉が待たれて、彼等はまた來るごとにその白いあまい石を持つて來た。一二年も私はそれで釣られてゐたと思ふ。其位私の村では氷砂糖が珍しいものであつたのだ。姉の家は海岸に近かつたので山生れの私は其處に行くことをほんとにどんなに喜んだものであつたらう。行けばまた其處の一族が奪ひ合ふ様にして私を可愛がつて呉れた。其處には私の村にない西瓜が出來、甘蔗が無數に出來た。磯に行けば大きな海があり、魚が釣れ、海老がとれ、思ふまゝ、貝が拾はれた。姉の家は土地で相應に暮してゐる商家であるが、不幸にも子がない。私が中學に出る頃になると全く子の様にして愛して呉れた。いろいろ思ひ出して來るとこの姉にも随分私は反いて居る。

第二の姉は第一の姉と違つて誠に靜かな人である。第一の姉は快活で敏捷で、よし主人がゐらなくとも一人で立派に商賣のやつて行ける人であるが、この姉は極く控目勝のおとなしい人である。そして彼女は幼い時から非常に文字を愛した。學校（と云つても、寺小屋風の）ものは云ふまでもなく、家にある舊い稗史小説後には漢籍類まで取り出して讀んでゐた相だ。或る日のこと、私の寢てゐる上に蚊帳を吊りながらこの姉がその讀んでゐる何かの文句をい、口調で誦よみさんでゐるのをうとくとし

て聞きながら、子供心にも私は言ひ様なき哀愁を覺えた事がある。後に私が同じくさうして讀物類を好むやうになつたのも、その時の事などが非常に影響してゐる様に思はれてならぬ。性質から云つて私はまた最もこの姉を愛してゐた。或時はまた斯ういふ事もあつた。溪に釣りに行つて、歸つて來るなり何かの事に拗すね出して私は物置の様になつてゐる或る暗い縁の隅に寢轉つて半日あまりも起き様としなかつた。後では家人も怒つてしまつて誰一人手を付けやうとしなくなつた。その時こつそりと私に握飯むすびを持つて來て呉れたのがこの姉であつた。一番目の姉と違つて子供は多勢あるが、今も極めて貧しく暮してゐる筈である。彼女の主人は私の村よりも更に山奥の小學校の校長をしてゐる。

最も不幸な、氣の毒なのが第三の私の直ぐ上の姉である。彼女の二つか三つの頃、彼女を背負つたまゝ、その子守が敷居の所で仆れて、彼女の双方の脚を折つてしまつた。そしてたうとう癒る事なしに今日に及んで居るのである。尙ほその上にその時打つた爲か或は生來うまれつきか、頭腦あたまも兩人の姉などより餘程鈍く、そして單純ではあるが不具者に伴ふ惡癖をも少なからず持つて居る。公然と他に嫁ぐ事もな

らず、日蔭者同様に一生を私の家で送る事になつて居る。私はこの姉とは中學を出る頃まで實によく争つて、朝晩殆んど喧嘩の絶間が無かつた。この姉に對するその頃の私の態度はまったく無智そのもの様であつた。昨今では三人の姉のうち當時の氣の毒さを思ふためか否か、私は最もこの姉に親しみを感じてゐる。

遊 戯 (その一)

そんな山中であるため、幼少年時代の私等の遊戯は殆んど天然を對手としたものであつた。風あけ、根つ木、鬼ごっこ、かくれんぼ、さうしたのも爲ないではなかつたが、先づ極めて稀であつた。私の村にゴム毬といふものを持ち込んだのは私であつた。その程度だから新しい遊戯など、いふものは絶無であつた。

夏は溪に集るが、四季を通じて我等は山や林に親しんだ。何といふ事なく、殆んど常に山の中に入り込んでゐた様に思ふ。冬から春にかけてはいろいろな係蹄をかけて鳥や獸を捕る。蕨、ぜんまいを摘む。椎茸を拾ふ。拾ふといふのは、椎茸山の舊くなつたのをばもう持主の方で構はぬので誰でも自由に入り込んで取ることが出来た。勿論新しい木仕掛の山の様には取れぬが、それでも澤から澤の古山をあさつて行くとかなり澤山取ることが出来た。椎茸は秋にもとるけれどこれは人造で、自然に

出るのは春である。或時、椎茸拾ひ(私の方では茸類を總じてナバと呼ぶ、そして椎茸が殆んどナバの總稱の様になつて居る)に出かけて十疋あまりの猿の群に逢ひ大いに驚いた事などあつた。猿は椎茸を食ふのでもないらしいが、木に生えてゐるのを、好んで両手で振ぎ取る癖がある。で、大きな山では茸の發生する頃には毎晩その番に行かなくてはならなかつた。椎茸山は一體に濕潤な、水のある所でなくてはならぬので必ず澤の谷合に設けられ、番小屋もその側に建てられた。夜が更けて闇が深く其處らに猿の鳴き聲が聞え出す頃になると、鐵砲を打つのである。多くは空砲だが、月明の夜など稀に彈をこむることもあつた。今は次第に山が淺くなつて、容易に猿を見る事も少なからうと思ふ。それから節松掘り、これなども今は殆んど斷えたであらうが私共の頃には盛んであつた。山の深い所の朽葉や土を掘つて、其處に埋つてゐる倒松の朽ちたのからその節の所を切り取つて來るのである。これは燈明用に用ゐられた。焚火の大きな爐の隅の所に二尺ほどの柄のついた網目の臺が立てられて、その臺の上でこの節松の細く割つたものを燃すのである。謂はゞ室内篝だ。この怪しい燈明の下で私どもは暫く本を讀んだものである。其後ランプといふものを用ゐる始めたのは私の家などが先づ最初であつた。筍も隨所の藪に入つて取る事が出来た。

秋は山の最もうれしい時である。椎拾ひ、栗拾ひ、通草とり、山柿とり、から始つてやがて茸取りとなる。秋の山には實に種々の茸が出た。今は名も忘れたがしめじ、かぶたけ、こうたけ、ねずたけ

など、いふのもあつた。松茸は山深く行かねば取れぬので子供には手が及ばなかつた。それから私の最も好んで爲たのは山芋掘りであつた。これは山にある自然薯を見出して掘るのであるが、この蔓は秋になれば枯れて節ごとにばらばらに切れ落つるのでその根の所在を發見するのがなかくの難事であつた。身を動かせば動かすほどばらばらに散つてしまふので、なるたけ静かにしてゐながら枝から枝の切蔓を追うて眼を移すのである。秋の山の朗らかな日光のなかに蹲踞しゃがんでこれを爲るのが何とも云へず楽しみであつた。それだけに上手で、いつも大人を負してゐた。荒い土を掘つて白いその根の次第に太く表れて來るのも嬉しかつた。

遊 戯 (その二)

寒中にも鰻起しと稱へて溪中の岩を起し、其したに潜んでゐる鰻を追ひ出し、寒さに凍えて運動の自由ならぬに乗じて突いて捕へる遊びもあつたが、山櫻の花が漸う咲き初めやうといふ時に溪に上つて來る魚にふしいだといふのがあつた。いだといふのは東京附近でいふまるたに似てゐるが、このふしいだは特に色が綺麗であつた。赤に青紫を混ぜた様な何とも云へぬ鮮麗な魚である。このふしいだの上つて來る頃から溪の遊びは始まるのだ。

ふしいだの時季が過ぐればやがて鮎となる。鮎も實によく捕れた。多くは共釣りで、釣るといふより圓の尻尾につないだ針に引つかけてとるのであるが、われわれ子供ですら半日數十尾を釣ることが出來た。溪の瀬の岩から岩へ飛び渡つて釣つて歩く面白さはいま考へても身體がむす痒くなる。

が、私の特に好んだのは斯うして飛び歩いて釣るのよりも、樹のかけか岩陰にしやがんで、油の様な淵の上に浮いた浮標に見入る釣であつた。そして、友達と一緒に釣るよりも獨りぼつちで釣るのを愛した。そのため、他の人の行かぬ様な場所を選んで釣りに行つた。わざ／＼握飯ひすびをこさへて貰つて山奥の溪へ入り込む事が多かつた。よそりがにといふ箕位ひしの甲を持つてゐる蟹の主が棲んでゐるといふ鳥の巢ねといふ、または大蛇の居るといふ冷た淵、さういふ場所は大人ですらよう行かぬ位の物凄いとこであるが、他に逢はぬのが嬉しいばかりに恐ろしいのを我慢して親達にもかくれながら私を出かけて行つた。鳥の巢といふといふ淵は三方切り削いだ様な岩壁で、岩から直ぐ底の知れぬ深淵となつて居り、その一面に瀧が懸つてゐた。謂はゞ瀧壺の様な、また薄暗い岩窟の淵の中の様なところであつた。恐る／＼その岩の壁を這ひながら、それこそ心には神を念じつ、ひつそりと絲を垂れた事を思ふと、今さらながら自分の少年の日がなつかしい。

やがて少しづつ、文字を知る様になると、少年雑誌や姉たちの讀み古したものなどを假名を辿つて讀む様になると、一層その癖が烈しくなつた。今までは知らず／＼仲間を避けてゐたのが、いつの間にか意識して他を避くる様になつた。さうなつて愈々親しくなつて來たのは山であつた。また溪であつ

た。多くは獨りで山に登り、溪に降りて行つたが、稀に一人の友があつた。それは私の母であつた。

母の事

私は五歳位から齒を病んだ。右も左も齧齒だらけで、痛み始めると果してどの齒が痛むのだから解らなくなり、まるで顔から頭全體が痛むかの様に痛んで來た。そんな場合、おい／＼泣きわめいてる私を抱いて一緒に涙を流してゐるのは必ず母であつた。私は母の涙を見ると一層に悲しくなり、尙さらに泣き上げたが、いつ知らずそれで痛みを忘れて、泣き勞れながら眠ることが多かつた。私の家から十丁ほど川上の方に柿の木淵といふ深い淵があつた。此處も何やらの主が居ると呼ばれた大きな淵で、一方は高い岩の斷崖となつて居り、その上の密林中に水神の社があつた。母は私だけをひそかに起して背負ひながら幾日とか日をきめて其處へ丑の時詣りといふことをした。眞夜中にこつそりと家を出て、田圃路からやがて淵の頭の淺瀬を選んで徒渡り、どう／＼といふ水音をきながらその林の中へ入り込む時には私はもう泣くにも聲が出なかつた。さうして小さな祠の前で初めて火を點じて燈明をあけ、落葉の積つた土の上に私をもひざまづかせ、彼女もさうして共に／＼齒の痛まぬ様にと祈願を籠めたのであつた。

或時はまた聲も枯れ果て、たゞしく／＼と頬を抑へて泣いてゐると、母は爲かけた仕事を捨て、おいて私を背に負ひながら釣竿を提げて溪へ降りて行つた。さうして何か彼か斷えず私に話しかけながら岩から岩を傳つて小さな魚を釣つて呉れた。いま思へばその頃の母は四十前後であつたらうが、どうしたものか私には二十歳前後の人と想像せられてならない。母といふより姉の氣がした。更に親しいをんなの友達であつた様にも思はれてならないのである。

私は前に斷えず山に入り込んで遊んでゐたと書いた。この癖を私に植ゑたのはまさしく私の母であつた。彼女は實はさうして山に入つて蕨を摘み筍をもぎ、栗を拾ふことを喜んだ。蕨汁や栗飯を焚くといふ以外に摘むこと拾ふことが面白かつたのである。父と言ひ合ひをした後など、彼女は必ず籠を提げて山へ入つて行つた。そしてその時必ず私はそのあとを追つたのである。さわり、さわりと微かな音を立てながら深い藪の中で前かゝみになつて筍を探して行く彼女の姿を、私は今でもあり／＼と眼の前に描くことが出来る。

半日も山の中に居やうといふ時など、彼女は念入りに辨當をこさへて、そして小さな壘に酒を詰め籠の中へ入れて行つた。そして私を相手に見晴しのい、山の上や溪ばたで辨當を使ふのを常とした。父もさういふ事は好きであつたが、阿父さんのは大仰だから嫌ひだと母はいつも言つてゐた。私の國では殆んど男女の別なく酒を嗜むが、母はことに好きの様であつた。

海

私の村から海岸に出るには近いところでは僅か五里しかないのであるが、四邊を包む山嶽の形から宛然二十里も三十里も離れた、山深い所の様に思はれてならなかつた。で、母に連れられてなど、附近でもや、高い山の頂上へ行つて、あれが海だ、と指ざされると、實に異常のものを見る様に、胸がときめいた。僅かに白く煙つたり光つたりして見えるだけで、海といふものが果してどんなものであるか殆んど想像することも出来なかつたが、兎に角、この方角に海がある、といふ事を知り得るだけで非常な満足であつた。そして、それを種に種々雑多な空想を描いたものである。

私の家から半道ほどのところに何とかいふ草山がある。其處の頂上から海が見えた。その山の澤に非常に澤山な茶莢があるので、それをとりに行つて或日偶然にも海を發見したのであつたが、それからわざ／＼それを見るために這ひ登つた。いま見れば小さな山だが、その頃の身には其處に登るといふことは實に大變な冒険の思ひがしてゐたのである。見たさ一心に攀ぢ登つて、頂上に切り残されてある二三本の松の蔭に立つて遙か東の方に雲がくれに見える細島(細島は地名)を眺めながら、わけもない昂奮を子供心に起してゐたことをおもふと、常にその上に鳴つてゐた松の風さへ新たに思ひ起されて来る。

七歳か八歳の時であつた、母に連れられて一番上の姉の行つてゐる都農町に初めて出かけて行つた。七曲峠を越ゆれば近いのだが、子供づれには無理であつた。で、私の村から二里ほど歩き、山陰といふ村から舟に乗つて耳川といふのを三里下れば美々津といふ小さな港に出られる。都農は其處から海岸沿ひに三里であつた。膽を冷させられる急湍が幾つか續いて、漸く水の流れも緩く、川幅も廣くなつた頃に人家の群がつかつた所が見え出した。其處が美々津で、船頭も母もそろ／＼何かと用意を始めてゐた。舟は次第に下つて、川は愈々廣くなる、と見ると丁度自分等の前方に長い砂の丘が横はり、その丘を越えて向うにをり／＼白く煙りながら打ち上がつてゐるものがある。何氣なく母に訊くと、其處はもう海で、あの白いのは浪だと答へた。海！浪！私は思はず知らず舟の上に立ち上つた。舟が着くか着かぬに飛び上つて母の留めるのもきかず、その砂丘に走つて其處に初めて私は廣大無邊の海洋と相對したのであつた。今まで瀧や溪にのみつながらつてゐた水に對する私の情はその時から更に海を加ふる事になつて來た。

濡草鞋

「濡草鞋を脱ぐ」といふ言葉が私の地方にある。他國者が其處に來た初めに或家を頼つて行く、それを誰は誰の家で濡草鞋をぬいだといふのである。その濡草鞋をぬいだ群が私の家には極めて多かつ

私の家自身が極く新しい昔に於て濡草鞋黨の一人であつたのだ。それがあらぬか、私の村附近に入り込む者は殆んど悉く先づ私の家を頼つて来た。祖父は（その頃の事は話にしか知らないが）極めてのやかまし屋であつたところから、その時代には餘りさうでもなかつた様だが、私の父はその反對に極く開けつ放しの、賑か好きの、客を好む質であつたので、来るものをば黑白選ばず歓迎した。それに丁度航路が開け、道路が開けるといふ時代であつたので私のものごころのつく七歳八歳の頃は（或はもう少し前から）最もこの遠來の客が多かつた。山師、流浪者、出稼者、多くは餘り香しからぬ人たちが入り替り立ち替りやつて来た。好んで迎へ好んで送り、父はいさ、かも倦む様子は無かつたが母は始終それを嘆いてゐた。彼等の來り、且つ去るや、必ず先づよき土産をば置いて行かなかつた。後には流石の父すらも懲りた／＼と言ひながら、尙ほその習癖をばやめなかつた。そして、多くはそれらの徒のために無用の事を起しなどして、祖父の作つた財産をその歿後幾何も經たないうちに失くし盡してしまふまでそれが續いてゐた。程なく無一物の彼となると、もうその濡草鞋の徒も寄つては來なくなつた。そして、終には父自身が自分の村を飛び出さう／＼と試むる様になつた。

母の朝夕の嘆きを眼の前に見てゐるので、理も非もなく彼等をよくない人たちだとは思ひながら、私は知らず／＼彼等他國者に馴附いてゐた。彼等はまた方便として私を可愛がつて呉れたのであらう。

が、兎に角に私は自分の村の誰彼よりもさうした人たちをみな偉く、且つなつかしく思つてゐた。鑛山師の高橋さんといふ四國の人、私の村に興行に來て病氣になり、其儘永い間私の家に留つてゐた何とか丸といふ旅役者、他人の女房を盗んで逃げて來たといふ綱さん、自分で放つた屁の臭ひを惶て、嗅ぐことを喜んだ何齋さんとか云つた旅醫者、ゆでたての團子のさむるのを待ち兼ねていつも水に投げ込んで冷して食つた性忽の高造爺、思ひ出して來るとみなとり／＼になつかしい。いま思へば彼等はみないはゆる敗殘の人々であつたのだ。そして私は彼等の語る世間話と、いつとなく讀みつゝいてゐた小説類とで、歳にはませて早くも世間といふものを空想することを覚えてゐた。ちやうどそれはをりをり山の頂上から遙かに光つてゐるものを望んで、海といふものを空想してゐたと同じ様であつたらう。

父の事

母が私を愛してゐた事は並ならぬものであつたが、それは私が唯一人の男の子であり季つ子であつたばかりでなく、私といふものが生れてからは、からりと父の身持が直つたといふ一事が餘程影響してゐた様に思ふ。それはをり／＼母が涙を流して私に語り、他に語るのを聞いてゐた事である。

父は祖父ほどの人では無かつたらうが、また凡庸の徒ではなかつた。熊本や大阪で修行して、若く

から醫者となつてゐた。その道の技能は村ばかりでなく、近郷の者を心服せしむるに充分であつた。一點の邪氣を持たぬ、情に厚い人であつたが、惜しいかな意志が極めて弱かつた。そして常に何かを空想する事を止めぬ小さな野心家であつた。平常は極めて寡言、謹嚴な人であつたが、一度酒に酔ふと思ひのほかの亂暴を働いた。母などは幾度も彼から白刃しほを突きつけられたものださうである。そして醫を業としてゐながら、多くは自宅に落ち着かず、何か彼か、事業といふ様なことを空想して飛び歩いてゐた。その周圍には必ずまた右に言つた濡草鞋の徒が食つ着いてゐたのである。

然し、私が生れる時から全然態度が變つたと言はるゝほどで、私の物心のつく頃にはもう殆んど彼は唯だ一個の好々爺となり終つてゐた様である。またその頃には祖父の残した山も林も田畑も失くなくなつてゐた。

こればかりは確かだぞ、と言ひながら彼が日參をしてゐた五平田山ごへいだしやまのことを私は僅かに覚えて居る。五平田とは石炭のことである。その石炭が出るといふので、私の村のすつと奥の山に數人の坑夫を入れてゐた事があつた。そして毎日酒肴の辨當を作つて、父は其處へ出かけてゐた。私も折々連れて行かれた。斷崖になつた岩山に穴をうがつて、とんちん／＼といふ槌の音が斷えず響いてゐる。それを父は四國辯の高橋さんと共に谷を距てたこちらの山の木蔭の小屋から酒を酌みながらいかにも樂しげに眺めてゐるのだ。とんちん／＼の槌の音の間には折々轟然たる音を立て、その岩山の壞れ落つ

る事もあつた。それはダイナマイトといふもので、折々はまたそのダイナマイトを淵に投げて魚をとる事もあつた。わけは解らず、たゞ母の歎くのが心にあるのでその岩を掘る槌の音や、またはダイナマイトの音そのものがいかにも悪いもので、もある様に思はれて、私は其處に行くのが恐しかつた。そして、もう止せ／＼と幾度も父にせがんで、はては自分を可愛がつて呉れる高橋さんにまで頼み込んだ。その時、酒に酔つてゐた高橋さんは、うふ、といふ様な、あらはにそれと解る泣笑ひの聲を立て、矢庭に私を抱き上げたことなどあつた。私は折々この高橋さんの事を今でも夢に見る。程なく彼はこの五平田山の事で父と喧嘩をして私の村を出て行つてしまつた。

五本松峠

私の六歳むっの時であつたと思ふ、どういふ理由からであつたか、多分種々の事で村が面白くなかつたりまたは齡としが齡で幾らか焦り氣味も起つて來たのであらう。父は全家を擧げて隣村の田代といふへ移つて行つた。移り切りに移るといふではなく、謂はゞ出稼ぎの様な形であつた。隣村と云つてもその間に五本松峠といふ大きな山が横はつてゐるので、それを越えて行かねばならなかつた。その日、私は母と二人、五六人の見送りや出迎への人たちと一緒にその峠を越ゆる事になり、私だけは祖父の代から使つて來た古めかしい駕籠に乗せられた。

殆んどその峠の頂上に着かうといふ頃であつた。私はふつと『こま』の事を考へ出した。『こま』は自宅に飼つてあつた三毛猫で、私と大仲好しであつた。「こまを連れて来たか」と訊くと、「否え」といふ。さア私の肝癪玉は破裂した。あらん限りの聲を出して泣きわめいてたうとう駕籠からころけ出してしまつた。そして、其處の路傍にふんぞり反つて如何しても動かない。どうしても『こま』を連れて来いといふのださうである。手をつくして嚇しつ賺しつしてみたがどうしても諾かない。たうとう一緒にゐた一人が連れに行く事になつて、そのまゝ我々だけ先へ行かうとすると、また泣き立てた。『こま』を連れて来るまでどうしても此處で待つてゐるといふのだ相である。其處はもう私の家から二里ほど離れた山の中である。幾ら急いでも往復には相當の時間がかかる。それに都合よく猫を捕へることが出来ればいゝ、がそれも怪しい。途方に暮れた母や一行の人たちは呆れ驚きながら更に手強く嚇しもし賺しもししたが、耳にも入れない。まるで死ぬ様に騒ぎ立て、果しが無い。終には母まで半ばは泣きながら一行の人達に詫びを言つて其處で猫の來るのを待つことになつた。

何時間であつたか、高い山の上での徒然な時間が過ぎて漸く下の方から心細けに鳴く猫の鳴聲が聞えて来た。いちはやくその聲を聞きつけた時、私は今までに知らぬきまりの悪い様な、悲しい様な、言ひ様のない思ひをしたのを覺えて居る。山が下り坂になつた時、この強情な兒を虐めてやれと思つたか、駕籠を擔いでゐた二人の若者は脚に任せて走り出した。駕籠の中には六歳になつた私と大きな

猫の入れられた魚籠とがごろ／＼と轉け合つてその痛さ苦しさと云つたら無かつた。でも私は我慢に我慢を重ねて終に一聲も泣かなかつた。

この話で思ひ出す、幼い頃私には斯うした強情な我儘な性質が多量にあつた。矢張りその歳かその翌歳かの事であつた。田代村に移つて幾らもた、ない頃の事で、丑藏と云ふ村でも有志の中に數へられる一人の男が私の凧を上げて遊んでゐる所へ通りか、つて會釋の積りであつたか一緒になつてその凧を上げて呉れた。ところが、彼の手で上げられてゐた凧が急に蜻蛉返りを打つと共に水田の中へざんぶりと落ち込んだ。それを見ると同時に私はこのよくも見知らぬ男に向つて必死になつて飛びついた。そして全身の力を舉げて泣き喚きながらその男の手と云はず、脚といはず、當るところを引き掻き、噛みついた。新しいのを直ぐ買つて來るからと狼狽して騒いで宥めか、つたが聽かばこそ、この小さな子供一人をほと／＼に持て餘してゐるところへ漸く母が馳けつけて來た。そして、漸く聲を収めた私をつく／＼と見守りながらその男が母に言つた相である。この子供が若し偉くなるとすれば大したものだ、間違つてまた悪くなるとしたらそれも普通では濟まない、と。母も實は自宅の縁から呆れながらこの騒ぎを見てゐたのださうである。そしてその男の言つたこの批評をひどく心にかけて其後も折々この話を持ち出した。その丑藏はその後私を非常に可愛がつて閑さへあれば山や谷に連れて行つて呉れた。田代村には三年程もゐたかと思ふが、彼はその間に於ける私の唯一の遊び仲間で、後に

はよく彼の家へ連れられて泊りに行つた。私たちがその村を去つて舊の村へ歸つてからも彼は折々私を見るために五本松峠を越えてやつて來た。その頃はまだ四十には間のある齡であつたが、人の嫌ふ病氣が身にあつたとかで、仕舞にはたうとう自分からずつと山奥の炭焼小屋に引き籠つて其處で死んで了つた相である。丑といふ名のよく似合ふ大きな、人の善い男であつた。休暇などに歸つて五本松峠を見る毎にこの男の事をよく思ひ出した。

その村での三年間は私にとつて誠に寂しい時間であつた。私の舊の村より更に邊鄙な山奥で、附近の子供達にも一人として遊び仲間になる様な者がなかつた。聽て小學校に行かねばならぬ齡になつたがどうしても出るのが嫌で、幾ら叱られても出席しなかつた。よく／＼の思ひで自宅を出ても、途中の谷で獨りで終日を遊び暮して——夕方ぼんやりと歸つて來た。斯んな肝の強い子を餘り叱るのもよくあるまいといふ譯で、後にはたうとう學校を休む事を許されてその代り自宅で何かを習ふ事になつた。

その間、私の最も多くの時間を費したのは谷間の釣りであつた。坪谷村の谷よりも小さかつたが、家の前を同じく一つの谷が流れてゐて、狭いまゝに浅い瀬といふものがなく、巖から巖を傳うて瀧と淵との連絡した様な木深い蔭の流れであつた。其處に一心になつて釣つてゐると、後から探して來た例の丑藏がよく斯んな處へ獨りで來られると言ひながら一緒になつて釣つて呉れたりした。

三人の叔父

田代村を引き上げて舊の坪谷村に歸つて來た時、たしか私が九歳であつた。前に言ふ通り、それまで私は學校に出るなかつたので、その補ひをつけるため鈴木叔父の家へ毎日勉強にやらせられた。

鈴木叔父といふのは血縁は無いが母の義理の弟に當つて居り、もとは延岡藩で相當の地位を占めてゐた家であつた。が、この叔父の代になつては悉く零落して、矢張り母の縁から私の家を頼つて來た、矢張り濡草鞋の群の一人であつたと思ふ。能樂、ことに鼓に堪能で武藝にも達してゐた。或時、二人の他國者が土地の酒屋で亂暴をして、巡查を始め大勢がその取押へに向つたが却つて二人の爲めに打ち据ゑられ困り果て、ゐた所へこの叔父が通りか、つた。そしてその譯を聞くと直ぐ單身その二人を捉へようとした。二人のうち、一人は五十位、一人は二十歳位で、年寄つた一人は矢張り柔術の心得のある者だつた相である。忽ち三人の間に烈しい格闘が行はれたが叔父の働きは目覺しいもので、後には刃物まで取り出した二人を苦もなく投げ飛ばしてたうとう擲めてしまつた。その頃もう初老に近い齡であつたらうが、このために叔父は非常に村の者に重んぜられ、私もどれだけ鼻が高かつたか知れない。初め村の小學校教員となり尋いで郵便局長となつた。私の通つたのはその局長時代

の事で、叔父から讀書算術を習つた。叔父は非常に私を可愛がつて、私にものを教へ始めるとどんな差し迫つた用事をも忘れるのが常であつた。貧しい中から何や彼や買ひ求めておいて、事ある毎に私に褒美に呉れてゐた。

この叔父と私の父とは一面に於てよく似た性質を持つてゐた。夢想家で、その血のうちに年老いても尙ほ消耗せぬ一種の流浪性を持つてゐた。たゞ父のはそれがやゝ上品で小さく、叔父のは大柄で粗野であつた。行くところまで行かねば承知出来ぬ性であつた。二人はよく協同して何か彼か計畫してゐたがその頃父は既にその種の事に疲れ始めて、甚しく臆病になつてゐた。それが叔父には甚だ喰足りなかつたらしいが、それでも何處には銀の脈があるとか銅が出るとか云つてよく兩人づれで山や谷をあさつてゐた。二人共揃つた大酒飲みで、飲み始めるといつ迄も果が無かつた。叔父が酔つて謠ひ出す謠曲や、長い漢詩などを私はどれだけ憧憬の眼を以て眺めたものか、この叔父を何故あゝ母などは悪く言ふのであらうと不審でならぬ事もあつた。後にはたうとう彼はこの村にも落ちついて居られず、六十近い身で臺灣に渡つた。初め甘酒屋をやり、それで當つたので濁酒を作り始め、それも成功しかけたのであつた相だが、その頃から腦がわるくなつて私の村に歸つて來た時はもう普通の人では無かつた。それから數年間を廢人同様で暮して、遂に狂死した。私はこの人に接したのが丁度ものごころのつくころであつた故か、少なからずこの人の感化を受けた様である。叔父も非常に私に希望を

かけて、早く偉くなれ〜と言つてゐたが、偉くはとにかく、この老人と盃のやりとりもせずして別れてしまつた事が残念でならない。この人の息子に信さんといふ人がゐた。小さい時から親とは仲悪で、臺灣に呼び寄せられた頃大喧嘩をして其後殆んど行衛不明、音信不通となつてしまつてゐた。私はこの人から『幼年雜誌』『小國民』など、いふ雜誌といふ物のある事を始めて教はつて、それからそれに嚙りついて讀む事を知つたのであつた。

いま一人の叔父は村の寺の住職であつた。母の妹が其處に縁づいてゐた、めで、矢張り血縁の叔父では無かつた。この人は毒にもならず藥にもならぬ好人物一方優しい一方の人であつたが、たいへん讀物の好きな人で、新しいものを見附けては必ず先づ私の家へ持つて來て母へ讀んで聞かせてゐた。いま思へば膝栗毛や弓張月であつたが、挿繪の多い小型の綴本を手持つて、焚火の圍爐裡に、前に云つた燭臺の松明をさしく〜この頭の圓い聲のい、叔父が母や姉を相手にして夜深くまで讀み入つてゐた光景はいま思ひ出してはなつかしい。私が生れて初めて小説といふものを讀んだのはいつもこの叔父の持つて來る繪入郵便報知新聞に載つてゐた村井弦齋作『朝日櫻』といふものであつた。振假名を拾つて駒雄靜子(?)の戀物語に胸を躍らせて讀み耽つたのが最初であつた。この叔父も既う夙うに世を去つた。

いま一人叔父があつた。父のすぐの弟で、隣村の山陰村で同じく醫者をしてゐた。最も近い血族な

のこの叔父の印象は幼い頃の私には餘り無い。無いといふより母を信じ切つてゐた私には母と仲悪のこの叔父が甚しく善く見えなかつたものである。極く平凡な人であつたが、唯だその兄弟仲のよかつたことは異常であつた。若山の兄弟を出會はせたら病人は上つたりだと村で評判せられてゐた通り、この二人が逢ふと一日でも二日でも離れやうとしなかつた。別に話があるでもないのだが、二人ともちびくゝと酒を嘗めながら、誰が何と云つても座を立たなかつた。弟はよく兄を敬ひ、兄はまた極めて弟を愛して全くお話の様であつた。二里程離れて住んでゐるが、二三ヶ月も逢ふ機會が無いとどちらか飄然と訪ねて行つて一日か二日かを泊つて來るのを常とした。この叔父も亦父と同じく酒のために數年前命を終つた。この叔父の子なる私の従兄は私に深い交渉があるが、それは今少し長じて私の中學時代から始まる。

正月、お盆、祭禮

さうした山村の少年にとつて一年中の樂しみはお正月であり、お盆であり、お祭であつた。正月には別に變つたことは無かつた、唯だ百姓や柚人たちが業を休んで酒に酔つてゐる位のものであつたが、お盆の印象は餘程深い。これらの行事はすべて陰暦で行ふのだが、そのお盆が來るとなると先づ出來るだけ綺麗にお墓の掃除をして十三日の來るのを待つ。そしてその日の夕方から三日間、お墓と

各自の家の門口とに出來るだけ盛んに焚火をするのである。たゞ地上に焚くばかりで満足せず、青竹の大きなを用意して置いてその先に松明を結びつけ、そして中天に焰を上ぐるのを見て喜んだ。その火の高さ大きさが各戸の間に自然と競争となつて、いやが上に長い竹大きな質のよき松明を這むことになつてゐるのである。村を圍んだ峰から峰へかけての空に白々と銀河が流れて、その下の溪ぞひにこの篝火が炎々と燃え立つてゐる光景は幼い瞳にどれだけ鮮かに映つたものか。やがて夜が更くるにつれて一つ二つとその火が消えて、ア、何處のが消えた、誰の所も落ちたと數へながら次第に疎らになつてゆく火光を見守つてゐる身には何とも知れぬ哀愁のしみじみと浸み込むのを覺えたものである。十六日の朝には佛壇に供へて置いた供物をすべて青廣い芭蕉の葉に包んで下の溪に持つて行つて流した。そしてその供物に乗つてお精靈さまは今朝信濃の善光寺へお歸りになるのだといふ傳説をいかにも眞實の様に信じ込んで、言ひ難い敬虔の念をもつて淵に浮び瀬に隠る、その影を目送したものである。お盆が過ぐればもう秋になつたと子供心にも深く感ぜられた。その頃、盆蜻蛉と呼ぶ赤い小さい蜻蛉がいつぱいに空に群れてゐるのが常であつた。

鎮守の祭は霜月の末、もうかなり寒い頃であつた。鎮守の社と順番に當つた或る一部落とに祭禮所が設けられてその二ヶ所で神樂があつた。祭禮は三日續くのだが、その第一日の前夜をおよどと稱へてその夜は夜通し賑つた。さうした場所を廻つて歩く見世物や行商人等がめいめい華かに店を張つ

て、平常見たこともない玩具や菓子が並べられた。ことによく覚えて居るのはカルメラ焼で、その匂いと煙とは異常な好奇心と食欲とを唆つたものである。もう夜もほの／＼と明けやうといふ頃、尙ほ夢中になつて踊つてゐる神樂の若者達が振り廻す白刃の光も神々しく眼に映つた。晝はまた神樂のほかに白太鼓といふ舞踊が演ぜられた。これは太古に於ける神様たちの凱旋の踊りだといふ事で、村の若者達各自山で獵つて來た鹿の角や山鳥雉子などの綺麗な羽根で身を装ひ一人の音頭取（これは家柄で世襲であつたと思ふ）の唄や音頭につれて大きな丸い環を作り乍ら、各自前に結ひつけた太鼓を叩いて踊り出すのである。

いま一つ、鎮守の祭のほかにひきの神さまの祭といふのがあつた。ひきは比企と書いたかとも思ふがよく覚えぬ。ずつと離れた二十里ほど遠い兒湯郡のひきといふ所から出て各所を巡りながらその途中私の村をも過ぐるので、その折に祭禮が行はれる。なんでもこの神様は女神で、その巡つて歩くさき／＼は戦ひ負けて逃げ廻つたあとであるのだ相だ。私の村附近では先づおろし／＼といふ部落で一夜祭禮がある。其處はその女神が子供をおろした所ださうだ。その次がうぶのといふのにある。此處でそのおろした子（死な、かつたものと見える）の生毛を剃つた跡ださうで、その次がこあらひ、此處で初めてその子を洗はれたのださうである。何處でもたゞ一夜づゝの、いかにも敗戦の女將が嬰兒を抱へて逃げて歩く様な惶しい祭禮だが、矢張り相當に賑つた。この祭には百姓たちはみな各自の

田畑に出來た作物を供へて、その出來榮を競ふ様な風がある。師走も既うおし迫つた頃の、随分寒い祭であるがおろし／＼、うぶの、と私たちは附近で催されるその祭のあとを追ふ事を怠らなかつた。（この「思ひ出の記」をばいつかまた書き繼ぎたいと思ふ）

秋草の原

私の生れた家は東と北とに山を負ひ、前に溪を控へた坪谷村字石原一番戸といふのであつた。溪を距てた向側はまた魏城に臨る險山となつて居る。その部落と、東隣の部落との間には少しの間人家が断えてゐて、和田越といふ小さな峠を越して來ると先づ私の家が取つ着きとなり、そのまゝ、疎らに溪に沿うて西へ細長く總戸數二十二戸からかある石原村となるのであつた。西の方から白々と瀧のやうな長い瀬になつて流れて來たその溪は、丁度私の家の眞下で大きく彎曲して其處だけ深い淵となつてゐた。二階からはその大きな淵が一面に見下されて、月の夜など殊に好かつた。

家の背戸口から直ぐまた他の小徑がついてゐて背後の小山を越す様になつてゐた。それを越すと、其處にはまた別の溪が流れてゐて、それからそれと幾つとなく折り重つてゐる小さな山脈の間にその溪谷だけの流域ともいふべき比較的平らかな一區劃が出来てゐた。元來が極めて平地に乏しい山地のことであるその溪の兩側などかなり克明に手を着けて小さい田なり畑なりに開墾せられてあつたが、それでもまだ山ともつかず森ともつかぬ灌木林風の荒れた平野が澤山残つてゐた。不思議な事に

はこの溪ぞひには人家といふものが一軒もなかつた。私の物心のつく頃になつて四國者だといふ夫婦が來て始めて一軒の小屋を建て、瓦焼きを始めたのであつたが、今でも續いてゐるかどうかと思ふ。

この溪ぞひの灌木林に秋になればよく栗が落ちた。他の雜木は少し大きくなれば悉く木炭に焼いてしまふが栗の木だけは駄目なのださうな。その栗を拾ひに私たちはよく出かけた。點々として立つてゐるこの栗の木の周圍が、今考へれば殆んど萩だつたらしく思ひ出さるゝ。ほんとに深い萩の原であつた。萩ばかりでは無からうが、到る所の雜木に、灌木に、このこまかな木の混つてゐない所は無かつた。身を屈めて落葉の間に落ちてゐる木の實を拾ひながら、時々腰を伸して見廻せば必ずの様に見つけた。身を屈めて落葉の間に落ちてゐるこの薄紅の花びらが眼についた。萩と云つてもなか／＼大きい。枝垂れて咲く處等に咲き枝垂れてゐるこの薄紅の花びらが眼についた。萩と云つてもなか／＼大きい。枝垂れて咲いてゐるのですら子供の私たちより遙かに丈が高かつた。よく熟してゐない栗に出逢ふとその木に登つて枝を揺り動かしながらまだ青い様な實を落して取つたものだ。梢から下を見ると萩が茂つてゐる其處に待ち受けてゐる友達の姿など見えはせぬ。「い、か、落すぞ！」と呼びながら力一杯枝を揺るとその茂みの中へばら／＼と音を立て、青い毬が落ちて行つた。

この原には茸もよく生えた。大抵栗の落ちるとあとさきで、栗を詰めた手籠の上に見ごとなしめじやねず茸を載せて持つて歸つたものだ。茸のあるところは栗より範圍が廣いので、探すのに骨は折れたがそれだけ楽しみであつた。それに私は友達大勢と斯ういふことをするのが嫌ひで、大抵は自分

一人か、乃至は母と一緒に居るであつたので、いつもひつそりとその廣い雑木の原を屈みながら探して歩いた。萩のほかには女郎花が最も多かつた。林が伐り開かれて明るくなつてゐる草原などにはこの花が高々と茂つて咲いてゐた。白い花の男郎花といふのも混つてゐた。

尙ほ私の忘れられないのはこの原のあちこちに流れてゐる小流れで魚を釣ることであつた。それは溪とも云へない位小さな流れで、大抵一尺か二尺の幅で流れてゐて、それが其處此處で小深い淀みを作つてゐる、その淀に棲む魚を釣るのである。勿論流れの上には藪が掩ひかゝつてゐるので、竿とても二尺か三尺の長さのものしか使へなかつた。人といふものを知らぬ魚どもなのでなく、よく釣れた。種類はきまつてゐて鮠かあぶらめといふ小魚、どうかすると蟹や鰻などの出てゐることもあつた。いつといふことも無かつたらうが、この釣の記憶も必ず秋の季節に係つてゐる。岩から岩を濡れながら這ひ歩いて釣つてゐると、思ひがけぬ見ごとな栗がその淀みのなかに落ち溜つてゐる事などもあつた。折々眼を上げるとその流れの上には例の萩の花がしつとりと咲き垂れて居る。ほがらかな秋の日は背に流れて、どうかするとその溪間の空にはほの白い晝の月の懸つてゐるのを見ることもあつた。水でも飲みに来てゐるか、野兎の子の聰い眸が不思議さうに岩の蔭からこちらを向いてゐたこともあつた。

私は十歳の時限り、殆んど離れ切りにこの故郷を離れたと言つてもいい。その後、稀に歸る事があれば必ずこの原に出かけて行つたが、その時ごとに幼い頃の記憶とは似もつかぬ狭苦しい原であるのに驚かされた。見廻せばいかにも萩が茂つてはゐるが、心のなかの記憶の原は行けども行けどもはてしのない廣い原で、到る所に萩が咲き、栗が稔り、水が流れ、有明月が懸つてゐる、さうした原であらねばならぬ。不思議とまたさうした原の實在が信ぜられてならぬのである。さうして、夏も末、萩の花のほころびかける頃になると私は必ずの様はこの原のまぼろしを心に新たにするのである。

或る日曜の朝

私の住んでゐる近所の錢湯屋では此頃「時勢に鑑み……」何とやらで朝湯と流しとを廢してしまつた。たゞ日曜祭日に朔日十五日だけは從來通りといふのである。

眼が覺めると頭が重い、昨夜の無理な酒のためだ。一つ二つ寢返りをしてゐるうちに今日は日曜だと氣がついた。我慢して起き上りながら、縁へ出て見るとどうやら珍しく晴れさうだ。癡病院の森から四邊の窪地に霧が深く降りて居る。便所から出ると直ぐ手拭をさけて湯屋へ行つた。

漸く戸をあけたばかりのところ客は私ひとり、湯も澄んでゐる。熱いのを我慢しながら浸つてゐると、皮膚から溶けてゆく酒の膏が眼に見える様だ。ながしに出てぼんやりと窓の方を見てゐると、霧は先刻より一層深くなつて庭の木立の間を流れてゐる。たしかに今日は晴れるらしい。久しぶりに日の目が見られると楽しい氣持になつてゐるところへぼつ／＼と客が入つて來た。

湯屋を出ると、昨夜の酔が急にまた身體に出て來た様である。悪い習慣だと知りながら、食事の時にまた少しばかりの酒を飲んだ。それで幾らか頭もはつきりして、落ちついた氣になつた。新聞を持

つて縁側へ出てゐると、薄いながらに日がさして來た。褪せ／＼と咲いてゐる鶏頭や萩の花には露がいつぱいにきらめいてゐる。蝕みはてた青梧桐の葉のみじめさが今朝は目立つて著しい。庭にも随分落ちてゐる。

郵便を出すのを口實に私はぶらりと門を出た。急ぎの用事が幾つも溜つてゐるのだが、久しぶりの日光を見てゐると、どうしても室内に籠つて居られない。足音を盗む様な、靜かな楽しい氣持で私は何處といふあてもなく歩き出した。ひどい路だが、一步々選つて歩く高い足駄のつま先きにもうす茜の日のひかりは浴く流れ渡つて居る。路傍の木も草も家も、工場の煙突も、行き違ふ男女も、みなこの久しぶりの日光のために新しくせられてゐる様に見ゆる。

巢鴨の通りを横切つて、とある小さな路次へ折れ込んだ。其處は小さな貧民窟の様になつてゐて、押しつぶされた様な古長屋が幾棟か並んでゐる。長屋のそれ／＼の家の前は何處もみな溝同然で、その中で女房達が言ひ合せた様に洗濯をやつて居る。洗つてゐるものもまた言ひ合せた様に大抵みな襪には子供の影すら見えぬ。腐つた様な疊に靜かに日がさして居る。長屋のはづれに一軒の鍛冶屋がある。私はどうしたものか以前からこの鍛冶屋といふものが好きで、槌の響、鞆の音、逆る火の花、その中で眞黒になりながら働いてゐる男たちまで、みな親しいものに眺められてならなかつた。今朝も

遠くからその槌の音は聞えてゐた。トン、カーン、トン、カーン、と思ひなしか平常より今朝は冴えて聞ゆる。いつもの様に私はその前に永い間立ち止つて彼等の仕事を眺めてゐた。青い焰を擧げて居る火の中から赤熱せられた一個の鐵片が一人の男の手によつて取り出されて滑かに輝いた臺の上に置かれると、立ちはだかつて待ち構へた他の一人はいかにも手答へのありさうな大きな槌を眞向に振り下す。その大槌が凜とした響を残して再び振り上げられると、初め火中から鐵片を取り出した一人は坐りながら手槌を以てや、小刻みに己自らの持つたその赤色の鐵を打つ。トン、カーン、トン、カーン、と互ひ違ひに冴えた音の起つて居る間、火花は斷間なくその臺の上から四邊に飛び散つて居るのである。

この鍛冶屋の軒にはツイ先日まで二三本の大きな向日葵が咲いてゐたが、暫く見ない間にすっかり枯れてゐた。枯れたまゝ、木の様に枝を張つて立つて居る。とり分けても大きく育つてゐたこの花の種を欲しいものだと思つて枝の先に黒くついてゐるその大きな實を眺めながら、流石に露骨に言ひ出し兼ねて、その前を立ち去つた。釣竿を提げた人が二人、足ばやに私の側を通り過ぎた。今日の日曜を荒川あたりで釣るのであらう。枯れた芦や、芦を浸して湛へてゐる濁つた水などが寒いやうに可憐しく私の心をかすめた。

路を折れて私は染井の墓地の方へ曲つた。曲つて幾らも行かない時、私の丈より二尺からも高い傍へ

の石垣から恰度私の眞前にどたりと飛び降りた人がある。驚きながら見詰むるとまだ若い、二十四五歳の若者で半纏に腹掛、立派な職人である。飛び降りて一寸前のめりに手をついたと見ると、直ぐ立ち上つて一散に馳け出した。石垣の上は墓地で、その奥に寺がある。寺の方で騒ぎ立て、ゐる人の聲が聞えて來た。どん／＼と馳けてゐる若者の後姿を改めて見送りながら、この人聲を聞いて私は直ぐ「病人!」と思つた。この二月あまり、自分の家に病人のあつた私には自づとさう直覺せられたのである。と、直ぐ背後の寺の門から二三の人が走り出て來た。その中の一人は前と同じ年頃の若者で、これは下駄を履いたまゝ、すた／＼と私の側まで馳けて來たが、

「いま此處を半纏を着た男が通りはしませんでしたか。」

と口早やに訊ねる。

「え……?」

と答へながら、先刻の男の走つてゐた方を指ささうとして振り返ると、眞直ぐな道路の何處にももうその男の影は無かつた。

「畜生、曲りやがつたな。」

と言ふなり、また馳け出さうとしたが、何かまた思ひ出して立ち止つた。

「早く行かないか、早く。」

寺の門の前では一人の老婆が枯れた聲をあげて叫んでゐる。

「駄目だよもう、墓地の中に曲り込んだんぢア解りつこはありアしない。」

「だつて行つてみるだけ行つてみなよ、他に頼んで捉へて貰へばい、ぢアないか、早く行かないか、早くサ。」

老婆は叫びくよたくとこちらへやつて来る。

「どうしたんです。」

私は側の男に訊ねた。

「泥棒ですよ。」

と、言つたま、彼は諦めたやうに寺の方へ引返して行つた。

不意な出来事に少なからず私は胸をときめかせながらぼんやりと尙ほ歩み続けた。寺の方では何かまだ聲高な話聲が続いてゐる。斯んな朝のうちから、そしてまた立派な服装をしてゐるが、などと考へながら私は豫定してゐた様に道路からその若者の入つたらしい同じ方角の墓地の中へ入つて行つた。

木犀が急に匂つて来た。なつかしい匂ひである。靜かに澄んだこの花を嗅ぐと、いかにも『秋』そのものに觸れる様で、おのづから心まで澄んで来る。見廻せばなるほど六七間さきにかなり大きなそ

の木が一本、こまかな葉の茂みに、同じくこまかな黄色の花をつけて立つて居る。金木犀といふのらしい。久しい雨で花は幾らか褪せてはゐるが匂ひは實に強い。近づいてみると、苔の延びた地面にも一面に散つて居る。

墓地には矢張り日和を喜ぶらしい人たちが其處此處に出てゐて、墓に水をかけたり、櫛を代へたりして靜かに動いてゐる。空は次第に晴れて来て、いまは雲の影さへいかにも高々と定つて居る。數日前の暴風雨にいためられたためか、四邊で目立つ櫛の木は悉くもう黄葉して、高い梢からははらりとその枯れた葉を落してゐる。見上げてゐると、その梢から梢にかけて百舌鳥が鋭く鳴き交しながら飛んでゐる。

讀むともなく墓石の表に刻まれた文字などを讀みながら、廣い墓地の木蔭から木蔭を歩いてゐるとある椎の木の蔭から突然飛び出した男がある。

「泥棒!」

と思ふと同時に胸は烈しく波立つたが、よく見ると違つて居る。歳も先刻のより若く着物も筒袖ではあるが、半纏ではない。

馳け出した向うには竹の棒が突き立てられ、一羽の百舌鳥がその頂上にとまらせられてゐる。その囀を目かけていま一羽の百舌鳥が飛んで来て、危くその棒にしかけてある鳥籠に觸らうとして危く離

れ去つたところであつた。いつの間にか墓地のはづれに來てゐた。そのまゝ、墓地を外れて駒込の停車場の方へ行かうと歩きかけたが、どうもまだ歸るのが惜しい。今少し歩いてゐたい。またぶらぶらと墓地の中へ入り込んだ。私は元來墓地が好きで、その静かな、雑木の多い中に入り込んでゐると、何とも知れぬ心安さを覺ゆるのが癖である。とりわけてもこの染井と雜司ヶ谷の墓地とは氣持がよい。

あちらへ行き、こちらへ廻りしてゐるうちに、今度は先刻とは反対な方角の外れへ出た。前はやゝ廣くうち開けた田圃で、その向うは西ヶ原から飛鳥山の臺になつてゐる。この田圃に降りればどうしても飛鳥山あたりまで行かねば氣が済むまじく、さうすれば正午すぎても歸られないことになりさうだが、など、考へながら矢張り田圃の方へ降りて行つた。穂をば刈られて幹だけが竝んで立つて居る黍の畑の側を通つてゐると、また先刻の百舌鳥とりの青年の躰踏んでゐるのに出會つた。

見れば囀の棒は陸稻の刈られたあとの畑に立て、あり、その上の電信線に一羽の百舌鳥が來てとまつてゐる所である。われ知らず私も呼吸を呑んでひそんでゐるその青年の側に躰踏んでしまつた。幾度か飛び降りやうとして躊躇してゐた電信線の百舌鳥は終に羽風を切つて飛び降りた。そして、眼を縫はれて棒の先にとまらせられてゐる囀の方へ一直線に飛んで行つたが一度か二度烈しくその囀を蹴つて置いてその下の棒へとまつた。と見ると私の側の青年は墓地にそれへ向つて馳け出した。きいきいと鋭く鳴く鳥の聲を聞いて私も思はず微笑した。見事に今度はその鳥鷄にかつたのである。

「とれましたネ。」

「え、お蔭さまで。」

晴やかに笑ひながら手には新しい獲物を掴んで立つて居る。

「今日は天氣がい、から捕れませうよ。」

「え、夕方までには二十羽位は捕るつもりです。」

と言ひながらいま捕つた百舌鳥をば直ぐ締め殺して腰に提げた袋に投げ込んだ。

「ほう、彼處にも居ます、あれも屹度やつて來ますよ。」

と言ひながら彼は袂から竹の皮包みを取り出した。ブンといやな臭ひがしたと思ふと、それには細かに刻んだ牛か豚かの肉片が包んであつた。それを囀の嘴へ一片持つて行つて啄ませながら、惶しくまた舊の黍の蔭に引き返した。私もまた彼について來て躰踏んだ。

なるほど、煙つた様に日の照つてゐる向うの木立の中にきい／＼と啼き立つる同じ鳥の聲が、あとから／＼と聞えて來た。

櫻 咲 く こ ろ

三月××日

朝、漸う爲事に手を着けやうとしてゐるところへ、K——君がやつて来た。

『けふは、お休み?』

と訊くと、

『い、え。』

と言つたまゝ、人一倍背の高い身體につんつるてんの着流しで、坐りもせず私の机の側に立つてゐる。髪が延びて、顔色が極めてよくない。氣分でも悪いのだらうと、私も椅子のまゝで暫く煙草をふかす。

『いやな天氣ですね。』

『たまりませんね、頭が痛くて爲様がない、それに……』

と言ひながら右の眼の上を指で押へて、

『二三日前から此處が痛んで爲様がないのです、ソラ、少し脹れてませう。』

『神経衰弱でせう、僕もどうもいけない、氣候のせるですね。』

障子をあげ放つて火鉢の中に坐つたが、いつもの雑談が一向に逸ま^{はず}ない。

『散歩しませんか。』

『い、ですね、だつて、お忙しいんでせう。』

『い、え、忙しいには忙しい筈なんだが、斯んな日には何も出来はしません。』

連れ立つて門を出ると、

『一寸煙草を取つて來ます。』

と言つて坂の下の自宅に降りて行つた。そして金口の美味^{おい}しい煙草を持つて來た。天氣が斯んなだけに一層味が落着いてゐる。空は赤黒いと言ひ度い様ないろに曇つてむし〜と暖い。然し、部屋の中に居るよりよほど氣持がいい。

廢兵院の門を過ぎて巢鴨の通りを横切り、染井墓地に入る。彼岸が過ぎたばかりのところなので、どの墓もきれいに掃除がしてある。いつも行き馴れた無縁墓地の所に行き、枯芝の上に腰を下す。四^{かた}邊には「四十五歳位男」だの「六十歳位女」だのと書いた小さな一寸角ほどの木標がずらりと並んでゐる。大抵行倒人らしい。

墓地の下には狭い水田があつたのだが、半分は埋め立てられ、半分は沼の様になつて何やら水草が生えてゐる。その向うに森見たいに古木の茂つてゐた大きな宅地は昨年あたりから幾つかに分割されて、其あとに新しい家が十數軒も建てられてゐる。僅か伐り残された喬い木の枝には今日しきりに椋鳥が群れて騒いでゐる。水草の青い湿地からは折々鶉が飛び立つた。

やがて立ち上つて廣い墓地をあちこちと歩く。幹の朽ちかけた老木なども立ち込んでゐるので、その間を名も知らぬ小鳥がほがらかに囀り交してゐる。私は一體に墓地が好きだが、その中でもこの染井は静かでいゝ。沈丁花が到る所に咲いてゐて、強い匂ひが濕つた地に浸む様に流れ渡つてゐる。もう少しすると櫻が咲く。此處の櫻は他の雑多な木と混つてゐるだけに、そして騒ぎ立つる人も入り込まぬだけに、私は好きだ。

骨になつてまで小さな甕のなかに閉ぢこめらるゝのはいかにも窮屈だ、僕などは死んだら何處か山の中あたりに埋めつ放しにして欲しいものだ、それが一番速く自然に歸る道ではないか、など此處に來るとよく出る雑談が出たりして、やがて墓地を出外れて西ヶ原の高臺に向いた田圃に出た。この廣い、靜かな田圃にも小さな工場が大分建てられて來た。

二時間ほど歩いて宅に歸る。お蔭で頭が軽くなつた、これから爲事に出かけやうと言つてK——君は歸つて行つた。別れて二階に上ると、Y——君が待つてゐた。そして今日は是非とも短冊を書いて

欲しいといふ。この人の短冊を預りつ放しにして書かすにおいたこと既に二年近くになるのださうだ。いや／＼ながら二三枚書く。字の下手なせるか、私はこれを書くことに何の興味も持たぬ。ことに此頃それがひどくて、強ひて書かされると頭が痛くなる。で、一種の副業として幾らかの金にでもなるなら爲かたがないが、でないことには一切書かぬ事にきめてあるのだが、さうもゆかぬ場合が多い。けふも、僕はたゞでは書かないよ、と云つて君から金をとるのも變だから近いうちに酒の二三升も持つて來給へと言つて酒の歌を書いて渡す。

曇りはます／＼ひどくなつた。漸く獨りになつて机の側の窓をあけると、驚いたことに桃の枝が紅くなつてゐる。昨日あたりからの暖氣で急に斯う咲きかけたものらしい。その木はかなり大きな木で隣家の二階屋根の蔭に枝を張つて居る。重い空のもとだけに、その稚い紅るが一層私の眼を驚かした。

部屋にゐてくるしきけふのくもり日を窓に見

てをる桃の木の花

かき曇りぬくときけふを桃の木の蕾ふふみて

紅る深し

三月××日

けふは晴れて風がいくらか寒い。それだけにい、氣持で、朝から机に向つてゐた。午後三時頃、
『若山さん、湯に行きませんか。』

といふK——君の聲が表の通りから聞えて來た。一緒に湯にゆく。何だ彼だ忙しくて湯に入るのも全く久しぶりである。幸ひにすいてゐる湯槽に浸りながら、行つて見度い其處此處の温泉場の話などが出た。春さきの山あひの温泉のことなど、考へるだけでも心が躍る。

湯の歸りをK——君に誘はれて同君宅に行き、湯豆腐で一杯飲むことにする。同君の二階からは眞向うに某華族の邸つゞきの林が見え、其處にいま梅が澤山咲いてゐる。殆んど同君宅の庭つゞきの如くにして咲き續いてゐる。一杯の筈がツイ永くなり、今夜の晩酌のために晝間から料理させておいた田螺を自宅から取り寄せたりなどしてゆつくりと飲む。K——君は或る印刷術の雑誌を編輯發行してゐる傍ら、あれこれの會社に關係してゐて非常に忙しい人なのだか、矢張り私と同じでこの櫻の咲く頃になると頭が重く、兎角なまげがちになる側の人である。正宗白鳥の愛讀者である事も亦た同じで、けふもその作の話が出る。

『白鳥の作のことを話してゐるとこつちの氣持まで靜かになるだけでも難有いではありませんか。』
など、兩名は酔つた眼をあけて言つた。

飲みながら一二首私は歌が出來た。恐らくこれが今年の梅の歌の最後だらうとおもふとさびしい氣がした。

夕寒うかけりきたれば庭杉の木かけの梅の花
の眞しろさ

湯豆腐の熱きをすすりゆふまぐれ靜けくぞ見
る庭の梅の花を

溪のながれ木

立川驛での乗換は意外な時間を待たねばならなかつた。で、二人して近所の多摩川の岸まで出て見る。

廣い岡の様になつて打ち開けた桑畑の中に中學校が建つてゐる。その側を通つて四五町ほど行くとすぐ川に出た。連日の雨で、水が大分増してゐる。我等の立つてゐる岸の田圃の水も青草の畦を越してそちこちに音を立てながら溢れてゐる。

『螢がゐるさうですね。』

『今度屹度澤山見られますよ。』

やがて漸く其處を出た小さな汽車は暮れかけて來た野原を次第に山の根に近づいて行つた。雜木林と桑畑とのつき合ひになつてゐる附近の野原では麥の刈られたあとの黒い畠が鮮かに眺められた。林には栗の花が咲いてゐた。原の向う、溪を越したあたりの低い山脈の巒から巒には眞白な雲がこまかに流れわたつて、まだ充分に雨氣を含んだ夕空の微光のもとに靜かな眺めを成して居る。

青梅驛で大抵の乗客はおりて行つた。貨物もまた大部分おろされた。その次の日向和田驛で我等はおりた。そして舊い記憶にある杉木立の間から多摩の瀬の見下さる、宿屋を探しながら溪ぞひに歩き始めた。

『何處でもい、から洋燈でも點つてるやうな部屋で一晩ゆつくり話しませうか。』

斯ういふことを言ひながら今日の晝すぎ、ひよつこり我等は出かけて來たのであつた。この年若い友人は繪の勉強に京都へ行つてゐるのだから、今度阿父さんが外國に行くために暫く東京に歸つて來てゐた。そしてお父さんをも見送つて二三日うちにまた京都に行く筈になつてゐる。けふはそのお別れの意味もあつた。ふり續く梅雨に、二人とも足駄ばきに傘を提げてゐた。

日向和田驛をおりると直ぐであつたと記憶するその藁葺の宿屋はなか／＼見當らなかつた。道々訊いてみると、一軒あるにはあつたが今は休業してゐる、多分それらしいといふのだ。そのほかに一軒二里ほど川上に行つた所に某屋といふのがあるといふので、止むなく其處まで行くことにした。汽車をおりた頃から暮れかけてゐたので、歩いてゐるうちに暗くなつた。道下の溪ばかりが唯だ靜かに白く輝いて、迫り合つた兩岸の山には雲がとつぷりとおりて來た。空には星もない。折々螢を追つてゐる子供の群に出會つたり、道ばたに積んである刈麥の匂ひに氣がついたりして、靜かではあるが幾らか心細いおもひもした頃の一つの吊橋を渡つた。橋の上にも螢を追ふ子供がゐるが螢は見えなかつ

た。それを渡りあがるとツイその桑畑の中に二三軒の灯影が見えて、その中に尋ねる宿屋があつた。溪の見える部屋は、と訊いてみたが無かつた。そして通された部屋の窓際には何やらの樹木が青々と茂つて、頼りに慕らしいものが鳴いてゐた。竹藪らしい闇をとほして溪のひゞきはその窓から牙えいやくと響いて來た。洋燈の蔭で、との希望も空であつた。煤び果てた天井からは電燈が吊されて、赤いやうな濁つた光を放つてゐた。

『これは困つた、これぢやアなか／＼酔ひませんよ。』

と言つて笑つた。薄い酒の徳利が六七本も並んだ頃は、二人とも言葉尻が怪しくなつてゐた。そしていつか十二時に近かつた。

翌朝も深い曇ではあつたが、ふつてはるなかつた。このまゝ引返すのも惜しいし、恰度その登山口にも當つてゐるので、急に豫定をかへて二人は草鞋ばきになりながら霧の深く罩めてゐる御嶽山に登つて行つた。

山上の神社までゆくと、その邊は霧のなかに荒い雨がふつてゐた。立ち並んだ杉の大木の幹から幹にかけて消えつ浮びつ輪を作つて動いてゐる霧のなかにはらく／＼はらく／＼と條を引いてふつてゐるのだ。そんな日でも社殿の中には人聲がしてゐた。當番の神官が詰めてゐるのだらう。

半道ほどくだると霧の中を離れた。更に半道あまりおりて來るといよ／＼明るくなつた眼界に遙か

に多摩の流を見下すことが出來た。この邊の多摩は兩岸が岩である。白く露はれた岩床の間に瀬となつて流れてゐる。そしてそれをさし挟んだ山腹には稚木の杉があを／＼と伸び茂つてゐるのだ。

溪には折柄の出水を幸に流し出したらしい杉丸太が勢ひよく流れてゐた。眞白な瀬より瀬へ横になり縦になり、後から後から飛沫をあげて流れてゐる。

一息に雨の山みちを上下して來たのでかなり疲れた二人は道ばたの岩に腰をおろして、見るともなくこの流水を眺めてゐたが、ふと何か思ひ出したらしい友人は、

『なんださうですね、ヴァイオリンなんか造るに、同じ木を使つても、斯うして荒い溪から溪を流し出して來た木とさうでないのでは、出來上つてからの音いろに非常な相違があるさうですね。』

と言ひ出した。

『へえ、さうですか、そんな微妙な事がありますかね。』

唯だぼんやりと水の流るゝのに見入つてゐた私はその突然な話になんか興味を覺えた。

『それにはいろいろ理由があるでせうが、兎に角機械なんかの力で何卒かしてその溪から出たものと同じ木質にしようと苦心してもどうしても駄目ださうです。』

と言ひながら彼は立ち上つた。二人並んで歩きながら見下す溪には尙ほ頼りにその細長い材木が人影とても見えぬ溪奥から相連つて流れ出して來るのがみえた。

溪をおもふ

疲れはてしころのそこに時ありてさやかに
 うかぶ溪のおもかけ
 いづくとはさやかにわかねわがころさびし
 きときし溪川の見ゆ
 獨りゐてみまほしきものは山かけの巖が根ゆ
 ける細溪の水
 巖が根につくばひをりて聽かまほしおのづか
 らなるその溪の音

二三年前の、矢張り夏の真中であつたかとおもふ。私は斯ういふ歌を詠んでゐたのを思ひ出す。その頃より一層、この疲れを覚えてゐる昨今、溪はいよ／＼なつかしいものとなつて居る。ぼんやり

と机に凭つてをる時、傍見をするのもいやで汗を拭き／＼街中を歩いて居る時、まぼろしのやうに私は山深い奥に流れてをるちひさい溪のすがたを瞳の底に、心の底に描き出して何とも云へぬ苦痛を覺ゆるのが一つの癖となつて居る。

蒼空を限るやうな山と山との大きな傾斜が——それをおもひ起すことすら既に私には一つの寂寥である——相迫つて、其處に深い木立を爲す、木立の蔭にわづかに巖があらはれて、苔のあるやうな、無いやうなそのかけをかすかに音を立てながら流れてをる水、ちひसान流、それをおもひ出すことに私は自分の心も共に痛々しく鳴り出づるを感ぜざるを得ないのである。

溪のことを書かうとして心を澄ませてをると、さまざまの記憶がさまざまの背景を負うて浮んで來る。福島驛を離れた汽車が岩代から羽前へ越えようとして大きな峠へかゝる。板谷峠と云つたかとおもふ。汽關車のうめきが次第に烈しくなつて、前部の車室と後部の車室との乗客が殆んど正面に向き合ふ位る曲り曲つて汽車の進む頃、深く切れ込れだ峽間の底に、車窓の左手に、白々として一つの溪が流れて居るのをみる。汽車は既によほどの高處を走つて居るらしくその白い瀬は草木の茂つた山腹を越えて遙かに下に瞰下されるのである。私の其處を通つた時斜めに白い脚をひいて驟雨がその峽にかゝつてゐた。

汽車から見た溪が次ぎぐと思ひ出さるる。越後から信濃へ越えようとする時にみた溪、その日は雨近い風が山腹を吹き靡けて、深い茂みの葛の葉が亂れに亂れてゐた。肥後から大隅の國境へかゝらうとする時、その時は冬の真中で、枯木立のまばらな傾斜の蔭に氷つたやうに流れてゐた。大きな岩のみ多い溪であつたとおもふ。

おしなべて汽車のうちさへしめやかになりゆ

くものか溪見えそめぬ

たけながく引きてしらじら降る雨の峽の片山

に汽車はかかれり

いづかたへ流るる瀬々かしらじらと見えるて

とほき峽の細溪

秋の、よく晴れた日であつた。好ましくない用事を抱へて私は朝早くから街の方へ出て行つた。幸ひに訪ぬる先の主人が留守であつた。ほつかりした氣になつたその歸り路、池袋停車場へ廻つて其處から出る武蔵野線の汽車に乗つてしまつた。廣々した野原へ出て、おもふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、其處等の野原を少し歩いてゐるうちに

野末に近くみえてをる低い山の姿をみると是非その麓まで行き度くなり、次の汽車を待つてその線路の終點驛飯能まで行つた。着いた時はもう日暮で、引き返すとすると非常に惶しい氣持でその日の終列車に乗らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてもゐたので、餘り氣持のよくない乾き切つたやうな宿場町の其處にたうとう泊つてしまつた。運悪くその宿屋に繭買ともみゆる下等な商人共が泊り合せてゐて折角い、氣持で出かけて來た靜かな心をさんぐに荒らされてしまつた。不愉快な氣持で翌朝早く起きて飯の前を散歩に出た。漸く人の起き出た町をそのはづれまで歩いて行つて私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。飯能と云へば野原のはての、低い丘の蔭にある宿場だとのみ考へてゐたので、其處にさうした見事な溪が流れてゐるやうなどは夢にも思はなかつたのである。少なからず驚いた私はあわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂、洗はれた巖、その間を澄み徹つた水が深く深く流れてゐる。昨夜來の不快をも悉く忘れ果て、急いで宿屋へ歸つて朝飯をしまふなり私はまたすぐ引き返して、すつかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。溪をはさんだ山には黄葉も深く、諸所に植ゑ込んだ大きな杉の林もあつた。細長い筏を流す人たちにも出會つた。ゆる／＼と歩いてその日は原市場で泊り、翌日は名栗までその翌日長い峠にかゝると共にその溪は愈々細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと其處にはまた新たな溪が流れ出してゐた。

朝山の日を負ひたれば溪の音冴えこもりつつ
霧たちわたる

石越ゆる水のまろみをながめつつこころかな
しも秋の溪間に

うらら日のひなたの岩にかたよりて流るる淵
に魚あそぶみゆ

早溪の出水のあとの瀬のそこの岩あをじろみ
秋晴れにけり

鶴じしたま来てもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩
かけの淵に

おどろおどろとどろく音のなかにゐて眞むか
ひにみる岩かけの瀧

浅瀬石川あせいしがはといふのは津輕の平野を越えて日本海の十三瀨に注ぐ岩木川の上流の一つである。其處きりで鱒の上るのが止るといふ荒い瀬のつく邊に板留といふ小さな温泉場がある。温泉は川の右岸に

當る斷崖の中腹に二個所とその根がたの川原に接した所に一個所と、一二丁づゝの間隔を置いて湧いて居る。私の好んで入つたのはその斷崖の根の温泉で、入口には蓆が垂らしてあるばかり、板の壁はあらかた破れて湯に入りながら溪の瀬がみえてゐた。或る日の午後ぼんやりと獨りで浸つてゐると次第に湯がぬるんで來た。氣がつくと板壁の根の方から溪の水がひそかに流れ込んで來てゐるのである。四月の廿日前後であつたが、その日あたりから急に雪が解け始めたらしく、溪の水の濁つて來るのは解つてゐるが斯う急に増さうとは思はなかつた。呆氣にとられて裸體のまま、小屋の外に出てみると、赤黒く濁つた水がほんの僅かの間に全く川原を浸して流れて居る。丁度其處の對岸の木立のなかに——そのあたりに水が流れ及んでゐた——網を提げた男が一人、あちこちと歩いてゐる。雪解を待つて鱒は上つて來るといふ事を聞いてゐるが、彼はいまそれを狙つてゐるのらしい。やがて、また一人あらはれた。

雪が解けそめたとは云へ、四邊よたひの山は勿論ツイその川岸からまだ眞白に積み渡してをるのである。その雪と、濁つた激しい溪と、珍しく青めいたその日の日光とのなかに黙々として動いてゐるこの鱒とりの人たちがいかにも寂しいものに私の眼には映つた。遙かな溪を思ふごとに私の心にはいつもそれら寂しい人たちの影が浮んで來る。

雪解水岸ゆきげみづべにあふれてする霞む浅瀬石川あせいしがはの鱒と

りの群

むら山の峽より見ゆるしらゆきの岩木が峰に
霞たなびく

相模三浦半島のさびしい漁村に二年ほど移り住んでゐた事があつた。小さな半島に相應した丘陵の間々に小さな溪が流れてをる。一哩も流れて来れば直ぐ汐のさしひきする川口となるといふやうな溪だ。それでも私はその溪と親しむことを喜んだ。川に棲むとも海に棲むともつかぬやうな小さな魚を釣る事も出来た。

わがこころ寂しき時しいつはなく出でて見に

來るうづみ葉の溪

わが行けば落葉鳴り立ち細溪を見むといそけ
るこころ騒ぐも

溪ぞひに獨り歩いて黄葉見つうす暗き家にま
たも歸るか

冬晴の芝山を越えそのかけに魚釣ると來れば

落葉散り墮けり

芝山のあひのほそ溪ほそほとおち葉つもり
て釣るよしもなき

こころ斯く静まりかねつなにかも冬溪の魚
をよう釣るものぞ

みなかみへ、みなかみへと急ぐころ、われとわが寂しさを噛みしむるやうな心に引かれて私はあの利根川のすつと上流、わづか一足で飛び渡る事の出来る様に細まつた所まで分け上つたことがある。狭い兩岸にはもうほの白く雪が來てゐた。斷崖の陰の落葉を敷いて、ちよろく、ちよろくと流れてゆくその氷の様になめらかな水を見、斑らな新しい雪を眺めた時、何とも言へぬころに私は身じろぎすら出来なかつた事を覚えてをる。いま思ひ出しても神の前にひざまづく様な、ありがたい尊い心になる。水のまぼろし、溪のおもかけ、それは實に私の心が正しくある時、靜かに澄んだ時、必ずの様心に心の底にあらはれて私に孤獨と寂寥のよろこびを與へて呉れる。

溪の事はまだ澤山書き度い。別しても自分の生れた家のすぐ前を流れてゐる故郷の溪の事など。更にまたこれからわけ入つて見たいと思ふ其處此處の河の上流のことなど。

秋草の原

T——君とふたり、初めて降り立つた信州輕井澤の停車場の光景はかなり珍しいものであつた。恰度八月の初めて其處の賑ふさかりであつたが、我等と同じ汽車から降りた人は日本人より西洋人の方が多かつた。迎ふる者、迎へらるゝ者、すべて如何にも避暑地らしい放恣な態度で、ことに輕やかな服装をした女子供たちの仰山な身ぶりや言葉づかひがひどく我等を驚かした。

兩人は一杯に書物を詰め込んだ重い手提をそれ／＼に提げて好奇と不安とに胸をときめかせながら暫く其處に佇んでゐるが、それらの外人連が賑かに立ち去つた後、兎に角手紙で知つて居るM——君の宿の方へ驛前の大通りを歩き始めた。M——君は暑中休暇になると直ぐこの土地に来て二三の外人に日本語を教へながら自炊生活をやつてゐた。そして、たいへんに面白いからと私を招いて呉れた。私は早速その頃最も親しくしてゐた友人のT——君をも誘つて出懸けて來たのであつた。T——君と私とはその夏に早稻田大學の文科を卒業して、本來ならば職業問題などで忙しかるべき時期であつたのだが、兩人ともさういふ事にはまるでもまだ無頓着な子供であつた。却つて當時同じ學校の商科の一

年生か二年生かであつたM——君の方が遙かに世間に明るかつた。

驛前に一かたまりになつてゐる町家ちやうかを通り過ぎると廣い道路は眞直ぐに向うの山の麓に向つて原の中を突き切つてゐた。原の其處此處、または原の三方を圍んでゐた圓味を帯びた草山の麓から山腹にかけて白、緑、紅殻色、其他とりどりに塗られた洋風の建築が幾つとなく散らばつてゐるのが眺められた。廣々として平らかな原には青草がいちめんめんに生えて、そのなかに月見草、撫子、女郎花など、さきからさきに限りなく咲き續いてゐるのも西洋の景色らしくて珍しかつた。いかにも思ひがけぬ所に來た様な氣持で、餘りお喋舌もせず、肩を並べて歩いてゐると、向うから來る三四人連の外人に出會つた。そしてその中から飛び出して來たのは意外にもM——君であつた。

彼は知合の西洋人たちとこれから散歩に出かけるところであつた。そして私たち兩人にもこのまゝ、一緒に行く様にといふのだ。兩人とも躊躇したが、氣早のM——君は先に行く外人たちを呼びとめて聲高に私達を紹介してしまつた。爲方なしに引返して唯だの黙禮に似た挨拶をして、その仲間に入つてしまつた。驛前まで來るとM——君は私たちの荷物を其處の洗濯屋に預けて呉れた。然うして身輕になると何となく私たちも氣が浮々して、思はずT——君と顔を見合せて微笑したのであつた。八月のきら／＼した日光の四邊あたに輝いてゐるのすら興味深く感ぜらるゝ氣がして來た。

其處の一帶の高原は淺間の裾野の一部に當つてゐるので振り仰げばツイ其處に白い煙を噴いてゐる

活火山が眺められた。高原の四方をば樹木の乏しい寂しい山が垣の様に取圍んで、夏のさかりの沈黙と眩暈とを押し包んだ純白の雲が其山垣の峰から峰に低い浪を打つてゐた。M——君の英語の達者なのは豫てから知つてゐたが、一人の老人と二人の青年とを——三人とも亞米利加人である事をあとで聞いた——相手に絶えず何か話し散らしてゐるその會話のうまさには今更の様に驚いた。T——君と私とは唯だ啞の様に彼等のあとに従つてゐるに過ぎなかつたが、それでも顔をくづして笑ひ出す様な事が折々耳についた。そして私たちにもその談笑の仲間入をする様に度々彼等から爲向けらるるのだが、終にその勇氣が無かつた。何處まで行つても涯のない平らな草原には見れば見るほど種々の花が咲いてゐた。葛、す、き、われもかう、藤袴など其他名も知らぬ無数の花が田畑一つ無くて火山灰から成り立つた様な荒れた地面に實にこま／＼と咲いてゐるのである。いつかT——君と兩人はM——君の一團から離れてそれら珍しい花を探し探し草むらの中に入つて行く様な事が多かつた。

斯うして一行は二里あまりを歩いて沓掛くかけの宿しゆくまで行き、其處から汽車で引返した。沓掛は中仙道の舊い宿場で、屋根に石を置いたあばら家續きの荒れ果てた一筋町であつた。

輕井澤は沓掛など、同じく中仙道の宿場の一つで、江戸から來て碓氷峠を降りついた所にあつた。その昔からの宿場のあとを今は舊宿と云ひ、新たに停車場附近に出來た部落を新宿と呼んで居る。舊

宿にはまだ昔ながらの舊い建物など残つてゐるが、軒の低い檜皮葺の屋根の上などには思ひもかけぬ金ぴかの歐文看板が掲げてあつたりする。M——君の部屋を借りてゐる家は舊宿の裏手に當る原の中にあつた。玄關の二疊、座敷の六疊の二室を彼は借りてゐた。六疊に隣つた茶の間風の四疊半をば帝大の理科生が借りてゐた。二階の一室にはその頃世間に一寸聞えてゐた某音楽家の家族がゐた。主人は一週間に一度位ゐる東京から來るのみで、平常は三十近いその細君と赤ん坊だけであつた。

私たち三人の共同生活の始められた六疊の間の前は、幅三四尺の狭い庭を置いて直ぐ畑になつてゐた。畑と云つても名ばかりの様な粗末な荒れたもので、疎らに葱が並んでゐた。そのはづれに小さな流がながれて、其向うにこれも極めて粗末な風呂屋があつた。物置かとも思はる、風呂屋で、中には四五人も入れば満員になる浴槽があり、屋根には土管製の低い煙突が立つて、晝過ぎになると黒い煙をあけ始めた。その煙の上るあたりに私たちの縁側から眞正面に淺間山が仰がれた。風呂屋と鍵形に曲つた家には東京の芝の女學校の生徒だといふ一團が十四五人同じく自炊をしてゐた。私たちもその女學生たちも食器を洗ふにはその中間に流れてゐる小ながれを使ふのだが、T——君や私はどうかして彼等と一緒に出會はぬ様にと心をつかひ、M——君の當番の時にはわざ／＼と出かけて茶碗箸を洗つてゐるT——君に眞正面からかかひかけて來たりした。その小流の水の冷たさは又格別であつた。野原を

二時間も散歩して歸つて來てその小流に入りながら頭や顔を洗ふのが常であつたが、どうしてもその流の中で顔を洗ひ終るのが苦しかつた。餘りに水が冷たいので、水に浸つた足が痛み出すのである。その流に散歩の出がけに麥酒を沈めて置くのも癖となつてゐるが、その麥酒の沈め場所が折々途方もない所に變つてゐた。例のお跳はさんたちの所業に相違なかつた。

その高原には毎日定つて雷雨が來た。しかも極めて激しいのが多く、大抵附近一二個所づつ、落雷した。昨日は大隈さんの別荘の樅に落ちた、今日は三井の別荘の井戸に落ちたといふ風の噂が斷えず言ひ交された。私もT——君もその裂ける様な音響と電光とを愛したのであつたがM——君の雷嫌ひは寧ろ病的であつた。元來このM——君は極めて亂暴な、粗野な性質を持つてゐた。人によるとまるで獸の様に言つて人なみに交はる事をすら恥ぢてゐるが、私はその粗野の裡に美しい自然さを見る事が屢々で、永い間友人として親しく交際して來てゐるのであつた。彼自身口癖にして自分一代で三井三菱を凌いで見せると言ひ張つてゐるだけに學生でありながら金錢問題などには随分露骨であつたし、喧嘩沙汰は平氣でやるし、ことに性慾の事になるとそれこそ野放しの獸同様のところがあつた。それでゐる彼には我等の眞似がたい大きな素直さと自然さがあつた。あら削りの大きな樹木か、轉がし出された岩石を見る様な所があつて私はこの人が好きであつた。その獸の様だと噂せらるゝ、M——君

が雷にかけては全く一たまりもなかつた。怪しい雲が空に現はれると何處にゐても彼は飛んで歸つて來た。そして六疊の眞中に七輪を持ち出して——若しその時その中に火が熾つてゐたらば何は兎もあれそれを庭さきに放り出して置いて——その小さな四角な角かどの上に蹲しゃがむ様にして載つてしまふのである。彼は斯うして電氣から絶縁されたと信じてゐるのであつた。或日、例の如くその七輪の上に小さくなつて蹲しゃがんでゐる所へ、びしよ濡れになつて同宿の理科生が歸つて來た。彼はその日も附近の岩質などを調べて歩いて來たらしく、金槌や鑿の入つた大きな袋を擔いで來て、それを先づ庭先の私たちの部屋の縁側に置いて其儘其處へ腰かけた。それを見るや否やM——君は突然七輪の上から飛び降りて來てその袋を兩手して持ちあげさま畑向うの小流の中に投げ込んでしまつた。そしてまた鼠の様に身をかへして七輪の上に飛び乗つた。理科生も少し變人で、極めて黙り屋で短氣で、豫ねてからM——君とは仲が悪かつた。それを見るや忽ち立ち上つてM——君を睨み据ゑたが、何か大事なものでも入つてゐたのであらう、惶て、先づ瀧の様な雨の中へ飛び出して流の中から袋を引き出して來た。さうして置いていきなり縁側に飛び上らうとして……嗚呼、私はどうしてその時の彼の顔を形容して、かを知らぬ、髪から瞼毛からぼとく、雫を垂らし乍ら血走つた眼でM——君を睨み据ゑて、無論直ぐにも飛び懸るわけだつたのだが、その氣勢きせきに壓されて私たちも思はず身構へしたほどだつたのだが、縁側に足をかくるかかけぬかにその表情が俄に急變してしまつた。恐しい憤怒から急に變つ

て泣くとも笑ふともつかぬ、一種呻く様な不思議な表情に移つて行つたのである。思はずM——君を振返つて見て、私は吹き出した。これはまた何といふ姿であらう、一尺四方もない七輪の上に筋張つた手足四つを集めて脊をすつと高めながら——宛ら猫がものを狙ふ様に——上目づかひになつて理科生の襲撃に備へてゐるのである。平常の赤ら顔は土氣色に變つて、眼はまことに殺氣を帯びてゐる。併し、これは決して喧嘩のためではなく、雷の來た時、七輪の上に載る時には必ず斯うなるのであつた。なるほど是では理科生の出端の挫けるのも無理はなかつた。それを見これを見、T——君と私とは、彼等二人の間に在つて脊骨の折れるほどに笑ひ轉けたが、どうしても笑ひ足りなかつた。M——君が最初金屬入の袋を投げたのはその持主に對する感情などは寸毫もなく、唯だそれが電氣良導體であるによつてのみであつた。

秋草の小包 (「秋草の原」つづき)

T——君と私とはよく散歩した。午前と午後、大抵日に二度づ、は出懸けて行つた。何處といふあてはないが、出懸けて行きさへすれば氣が濟んだ。八月の中旬とはいへ、その高原ではまるで既う秋で、到るところに秋草の花が咲き亂れてゐた。ほんとに、此處の様な花のおほい高原をば兩人とも今

までに見たことがなかつた。西洋の詩などにはよく斯うした花の原の歌はれてあるのを讀むが、それも大抵は繪そらごと、しか思つてゐるなかつた。つまり、想像にすら斯んな花の多い原野を描いた事はなかつたのだ。

山の窪の平地には月見草が主で、そのほか薄・刈萱、女郎花、藤袴、葛、露草、吾亦紅など、普通いふ秋草のたぐひが多く、すこし山地に登つてゆけば鈴蘭や釣鐘草など咲いてゐた。落葉松林の下草に茂つてゐる釣鐘草には随分丈高く伸びてゐるものもあつた。或日、それらの林をわさりとあてもなく歩いてゆくと思ひもかけぬ小さな窪地に一軒だけかけ離れて建てられた西洋人の別荘の庭に降りて行つた。遊んでゐた幼い子供が兩人の姿に驚いて母親を呼び立てる、出て來た母親は束にして花を摘みためて汗をかいてゐる我等を見て何やら子供に言ひながら、我等に親しく微笑みかけたこともあつた。

T——君も私も一生文學をやつて行かうといふ決心であつた。そして恰度その夏、その専門の學校を卒業した時であつたので、これからさき一生の樂しみやら恐れやらが、一かたまりになつて胸にかへてゐた。散歩する時、または枕を並べて夜やすむ時、兩人の話し合ふ話題は大抵それに係つてゐた。思想の傾向といひ、恰度その頃兩人ともに出遇つてゐた戀愛事件といひ、兩人の一致は實に前後にない深みを持つてゐた。

そのT——君が私にも言はず、無論M——君には隠して毎日小包郵便を送り出してゐた。知らぬふりはしてゐたが、私はちやんとそれを知つてゐた。散歩さきから摘んで来た秋草の花を彼は毎日東京の戀人の許に送つてゐるのであつた。餘りにセンチメンタルな爲業をきまりわづらつて、それだけは私にも告げずに毎日こつそりとやつてゐた。

無論、東京からも彼の許に手ごたへのある重みの手紙が毎日届いてゐた。

或る夜の事であつた。

T——君と兩人、洋燈だけ消して雨戸をばあけながら床に入つて寢話をしてゐると、其處へ非常な勢ひでM——君が歸つて来た。そして突つ立つたまゝ、吃りながら言つた。

『ほんに濟まんけどが、いま俺の情人が……、ソラ、例の牛乳屋のあれよ……あれが此處へ來るけ、君達は一寸次室へ引込んで、吳んさい、頼む、頼む……』

私達は驚いた。起きるには起きたが、兩人とも顔を見合せてぼんやりしてゐると、M——君はもう私達の寢床を、

『ナニ一寸の間ぢアけ、一人分でもよからうがの。』

と言ひながら一人分だけ次の二疊の間へ押し込んで、サテまご／＼してると君達自身をも押し込む

ぞといった顔をして突立つてゐる。

兩人は呆氣にとられながら次の間に引き込んだが、馬鹿々々しくて、寢られはしない。布団の上に暫く坐つてゐたが、其處の小さな高窓をあけると冷たい月の光が射し込んで来た。T——君も私も暫く無言でその青やかな月光に對してゐた。

其處へ次の室には女がやつて来た。なほそれでも私達は途方に暮れたまゝ、茫然と坐つてゐた。すると、T——君が私の肱を掴んで引つ張る。戸外に出ようといふのだが、その疊の部屋は玄關には當つてゐるけれど、其處には一足の下駄も無いのを私は知つてゐた。みな座敷の縁側から直接に上り下りしてゐたのである。

併し、たうとう私達は跣足のまゝ、戸外に出かけて行つた。こつそりと音のせぬ様に雨戸をあけて、忍び足をして逃げ出した。まつたく逃げ出したといふが適つてゐた。

戸外に出ると急にT——君は跳ぶ様にして駈け出した。私もそれに續いた。

其處の平地を小さな川が流れてゐた。その砂地まで行くとT——君は足をとめた。そして砂の上に腰をおろした。

『まるで獣だね、』

T——君は唾を吐く様な口調で初めて口を切つた。

まったく秋草の花を小包にして送つてゐるT——君の前にはM——君は一個の動物であつた、彼には愛も戀も、情趣も道徳も無かつた。唯だ「女」でさへあればよかつたのだ。

月は實によく冴えてゐた。身近くの草むらから砂や小石、浅いながらに小廣い瀬をなして流れてゐる水、みなそれらが月を受けて光つてゐた。氣がついて振り仰いでみると淺間の山は麓にのみ白い密雲を宿してくつきりと高く全身を表はしてその高原の空に聳えてゐた。噴煙は暫くの間眞直ぐに昇つて、やがて傘を開いた様に平らかにぱつと散つてゐた。眼に入る限りの別荘の屋根から屋根にも露を含んだ様な月の光が散つてゐた。

『寒いねエ。』

私は肩をせばめながら言つた。瀬のひゞきと數限りない蟲の聲とは一層この夜涼を深めてゐるのだ。

『寒い。』

T——君も噛み締める様な聲で言つた。

M——君の出入してゐる或る阿米利加の宣教師の許に三人とも茶チャイに招かれて行つた事があつた。席は室内でなく、庭さきの大きな樅の木蔭に設けられてあつた。宣教師夫婦に三人の子供、それに

同じく招待された様な二三人の外人と我等とであつた。持ち出された椅子はほんの三四脚で、他は樅の根にでも腰掛けるといふ簡素な席で、一脚の卓子テーブルに茶や砂糖の道具が運ばれたが、それには樅の葉が断えず散つて來るといふ涼しい午後であつた。

私はM——君に無理強に強ひられて自作の歌を二三首朗吟した。すべて其頃詠んでゐた戀の歌であつた。M——君はそれを傍から一々英語に翻譯して行つた。聞いてゐると随分出鱈目な譯で、すべて戀の對手を呼びかくる「君」といふ風のもの、彼は「神」に變へて行つた。これは其場の主人公が宣教師であるために、わざとあゝして行つたのだと彼はあとで私に私語ささやいた。例へば、

身じろがでわが手に眠れあめつちに何事もな

しなんの事なし

といふ歌の主人公を彼は平氣で「神」ゴッドであるとして神から我等すべてに言ひかくる言葉である、といふ風にやつて行つたのだ。

獨唱の上手であると聞いてゐた宣教師夫人は遂にその日唱はなかつた。私の銅鑼聲に驚いたものであらうと、ひそかに私は汗をかいた。

T——君の毎日の「小包」はさほどでなかつた。が、東京から彼の手に毎日やつて來る厚味のある手紙は私には並ならず羨しいものであつた。私もT——君に劣らず、せつせと東京の方に手紙を書い

た。けれどそれに應ずる返事といふものは一つも無かつた。T——君たちの二人は許された戀仲であり、私どものは固く禁ぜられたそれであつたのだ。私はわざとにも公然と自分の人にあて、手紙を書いた。彼女の母なり兄なりの手にそれが入つて、そのためにこちらの心持を幾分なり了解して貰へれば幸であると思つたからであつた。が、それも要するに空頼みであつた。私はたゞ毎日空しく書き空しく待つた。

その事が樂しかるべき私の輕井澤の日を却つて毎日憂鬱なものにして行つた。そんな風で二十日近くも滞在してゐるうちに私はとてもぢつとしてゐられない様な焦燥を感じて來た。その上になほ私の心を暗くするものは職業問題であつた。

T——君はその點でも自由であつた。彼は實家を東京に持つて相當に富んでゐた。で、學校を出たからと云つて周章へて職を探す必要はなかつた。學資すら幾分は自分で稼いでゐた様な私は全然その反對の位置に在つた。もつとも、學校を出ると直ぐにも或る職業に就き得る様には或る人の世話でなつてゐた。が、それがあまり望ましい種類のものではなかつた。出来るならもう少し自分の希望に近いものを選び度いといふ我儘から、實は輕井澤の方にも出かけて來て、氣をまぎらしてゐたのであつた。

それこれの事が朝晩に私の心を苦しめた。とても安閑とそのまゝ、其處に遊んでゐる氣はないし、それかと云つて東京に行くのも恐かつた。東京に行つた所で直ぐ自分の人に逢へるでなく、近くに居ると思へば思ふだけ心はいらだつに過ぎぬといふ事をよく知つてゐた。職業問題でもさうで、自分の好むものを見付からぬうちに東京に歸つたのでは義理からもその我儘を捨て、眼前に用意せられた職業に就かねばならなかつた。居つ立ちつの思案を重ねた末、さうした種々の苦しさを紛らすためにも此處から東京まで汽車によらずに歩いて行かうと私は思ひ立つた。ことに或る朝、皺くちやになつた鉛筆の走りがきの葉書を彼女から受取つて、一層その風變りな決心を強くした。わたしはいま兄の危篤の看護に従つてゐる、その騒ぎの中で一本だけお手紙を手に入れた、たとへどうでもお互ひが遠く離れてゐるのはつらいから出来るなら東京に歸つてゐて呉れ、といふ意味がその葉書には認めてあつた。そして、急にその日の午後から二人の友人に別れて私は輕井澤を立つ事にした。

二人とも驚きながら、草鞋ばきに尻端折の私を送つて來た。宿はづれの松原を通りながら、此處で此頃よく出逢ふ美人があるが、どうかしてあれを手に入れたものだ、など、相變らずM——君は言つてゐた。宿を出外れると道は坂になつた。碓氷峠にかかつたのである。その中腹ごろまで二人は送つて來た。そして左様ならくと帽子を振り合ひながら別れた。

291 峠の茶屋に着くころ、その邊はすつかり雲にとざされてゐた。朝から雨模様であつたのがいよく降り出しさうになつて來た。茶屋の床几から見ると四方はまつたく雲の海であつた。風は信州路の方

から吹いて、そちらはもう明るかつた。そして走り迷ふ雲の間に幾つかの山の嶺が見えたり隠れたりした。それらを眺めながら私は静かに床几にかけてゐる事が出来なかつた。立上つて、洋傘を杖つきながら、ぢつとしてその雲の海や、とびくりに立つ山の嶺を見てゐると、何といふ事ない涙が熱い臉から滲み出て来て、どうしても止らなかつた。

茶屋の者に留められたのを斷つて峠から歩き出すと、もう全く自分の身體は密雲の中に在つた。鼻をつま、れても解らぬ様な深い中に在つた。初めは洋傘のさきで道を探し、歩いたが、しまひにはたうとう私は洋傘を腰にさして、両手兩足で這ひながら草深い古い道を降りて行つた。

子供の入學

東京にてW——君。

けふから漸く旅人が小學校に通ひ始めた。夙うからこの子の學校の事が氣になつてゐながら何々手續といふ風の事を病的に億劫がる私の癖で、九月といふ聲を聞くまで打ち捨て、置いたのだつたが、その朔日となつて惶て、周章へ始めた。それも自分一人ではどう事を運んでい、か解らず、この土地に移住を企てた最初から家を探したり借りたりその他一切の面倒を見て貰つてゐる或る年老いたお醫者さまの許へ出かけて行つて相談したのであつた。それには先づ寄留手續を爲なくてはなるまい、これから一緒に役場と學校とに行つて村長にも御紹介申ませう、とわざわざその老醫は私を連れて暑いなかを村役場から小學校へと廻つて寄留と入學との手續を果し乍ら、それらこの村での重立つた人々を引合はせて呉れた。さういふ場合に會つてみると、いよゝゝ自分にも此村の生活が始まつて來てゐるのだといふ靜かな意識が上つて來ずにはゐなかつた。それが一昨日で、昨日は私だけで子供を連れて學校へ行つた。そしてまた校長に逢つて教室や教科書の事を訊き、受持の先生にも紹介して貰

つて来た。いよ／＼今日から普通の登校となつたのだが、御存じの通りあの子は柄はないはにかみやで臆病なのだ。それに學校まで少し遠い。大人の足でゆつくり三十分はかゝる。しかも山の根の砂畠の中を曲りくねつた道なので私が送つて行つた。

『あれなアに、あんなに鳴いてゐるのは？』

『あれかい、あれは蟋蟀サ。』

『何處にゐるの、向うの山んなかで鳴いてるの？』

『う、ん、この畑の中にあるのだよ、葱の根つこだの、薯の葉の蔭だのに。』

『ふ、ん、するぶん澤山ゐるんだナ。』

斯んな事を言ひながら私のしてみせた通りに薯畑の葉の上を踏んで例の黒い小さな蟲を追ひ出してゐる。まだ前の學校の徽章のついたまゝの帽子を冠つて、鞆をかけて袴をはいた小さな姿を見てゐると、前から心にあつた可哀相な氣持が急にまた強くなつて来た。謂はゞ自分の我儘から斯んな所に移つて来て、斯んな小さな者に時はづれの入學をさせたりなどみじめな思ひをさせる事がいかにも氣の毒でならなかつたのだ。この春小石川の學校に出したばかりで、其處には漸く友達なども出来かけてゐたのを引離してまた新たに此處に入學させるわけなのだ。それに風俗や氣風の變つたこの海岸村の子供たちとこの臆病者がよく合つて呉れるかどうかともよほど考へさせられた。現にけふも兩人で急い

でゐると、矢張り登校途中の眞黒な連中が急に兩人の側を駆け抜けて行つて向ふからこの子の顔をしやしげと眺めたりするのが居るのだからネ。が、學校に着いてみると案外に聞き分けがよくて、昨日教はつといた教室の前に獨りですん／＼と歩いて行つて軒下に立つて居る。私はわざと今朝は學校の庭には入らなかつた。籬根の所に立つて暫くそれを見てゐたが、却つて永くゐてはよくなからうと子供に見える様に帽子を振つておいて歸つて来た。先刻の畑中の道をぶら／＼と歩いて來ると、富士が眞上に仰がれた。前景の愛鷹山には細長い白雲が棚引いて、その奥に富士は却つてくつきりと晴れて聳えてゐた。富士から左にかけては駿遠に互る連山が低く遠く垣を作り、富士と同じく濃い紺の色を湛へて靜まつてゐる。道ばたの黍の穂のそよぎといひ、如何にも身に浸む秋の氣持である。

宅には妻が私以上に心配して待つてゐた。そして様子を聞いて大喜びで、ようしたもんですねエと言ひながら茶を入れかけてゐる所へ、たつた今送り届けて置いて來たばかりの者がのつそりと音もしないで勝手口から上つて來た。そして驚いて見詰めた兩親の顔を恐々眺めながら、

『だつていくら待つても僕の先生だけ出て來ないんだもの、もう鐘が鳴つて他の組はすっかり先生が揃つただけんど……』

『嘘をつけ！』

私は自分にも驚く程の大きな息ごんだ聲を出した。そして帶から時計を引き出した。

『ソラ見ろ、今漸く鐘が鳴らうといふ時ぢアないか、サ、早く馳け出して行きな、行かないとひどいよ！』

斯う私が口を切るや否や泣き出した彼の聲も随分ひどかつた。私はますます怒る、妻はうろたへるといふ騒ぎのなかに土地生れの女中が飛んで来た。そして両手を取つて、今度はわたしが送つてあげますから、私なら先生もよく知つてゐますからと説き勧めるのだが、なか／＼うんと言はない。私が恐ろしい顔をして立ち上ると、母親と女中との間に挟まれてまた勝手の方に泣きながら出て行つた。そしてたうとう女中に手を引かれて行く姿が籬の向側の胡麻畠の中に見えた。

W——君。

斯んな騒ぎをやつて豫てから移住後の一事業だと考へてゐた長男人學的一幕は済んだ。第一日が済めばあとはやりよいと思ふ。何だか彼が流浪の第一歩を見る様で氣の毒だが、こらへて貰はねばならぬ。

越して来て半月過ぎた。ひどくぼんやりしてまだ何事も手につかないが、永い疲勞が出て来たのかも知れない。来た時殆んど眞青だつた門前の稻田が半ば穂を揃へた。廣い田の上を群れて渡る雀の聲が日に／＼繁くなつてゆく。田の畦に細々續いてゐる木槿の花の紫は毎朝眼が覺める様だ。田圃の端

れに一列長い竹藪が連り、その蔭に狩野川が流れ、其向う、川を越して沼津の町の美しい側面が見ゆる。

書齋にゐても見ゆるが、門の前に立つと全く眞上に富士が聳えてゐる。此頃毎日空模様が変わるので多くは雲の中だが、晴れると深い紫紺の色が冴えて仰がる。これから此山に雪の深くなるのが時々家内での話題になると思ふ。

とりあへず以上第一便の筆をとつた。(九月三日)

香貫山

こちらに着いた晩、八月十五日であつた、まだ夜具が届いて居ないので取敢へず沼津の町向う、狩野川の縁にある小さな宿屋に泊つた。一家して他處に泊るなどといふ事は生れて初めての経験なので三人の子供たちは不思議やら珍しいやらで、おどおどしながらも二階一ぱいになつて騒ぎ廻つた。恰度その晩は宿屋が空いてゐて、二階には我等の家族だけの様であつた。

その翌朝、小隼雨が降つて居た。慌しく手提の中や風呂敷に押し込んで来た、停車場や汽車の中の饞別などを取り出して調べて居る私たちの側には小さな腰窓がついてゐた。

『たいへん近くに山があるのですネ、何といふ山でせうか。』

疲れ切つてぼんやりした様な妻が雨の中を見ながら言つた。

『あれが香貫山サ、あの麓に今度借りた家があるんだよ。』

『さうですか、あれが香貫山ですか。』

さう言ひながら妻は更に身體を曲けて窓の方に顔を近づけた。

この前、家を借りるために私だけがこちらに来た時、私も初めてこの山とその名を知つたのであつた。歸つてその話をする、妻は先づその山の名に心を動かされた。そして名から推していろいろにその山の姿を想像してゐたらしかつた。

『どうだネ。』

『いい山ですことねエ、ほんとに名のとほりの山だわ。』

さう言はると私にも初めて見た時よりは一層圓みと青みとを帯びて——四條派の古い繪などに見る——山の様な氣がしてその日のこまかな雨のなかに眺められたのであつた。

その香貫山は我等の借りた佗住居の古びた家の縁側からやや眉を擧げ加減にしてツイ眞向うに見渡される。長火鉢を置いた茶の間からも、茶を飲みながら、飯を喰ひながら、その稚松ばかり生え並んだ山腹を眺むることが出来る。二つか三つ重なり立つた様になつてゐるそれぞれの峰も、峰から峰にわたつた巖も、すべて圓やかに伸びてゐて、其處に生えてゐるのはまつたく愛らしい小松ばかりである。

移つて来た當座は夏であつたが、その頃から考へてゐた様に此頃次第に秋の更けてゆくと共に、縁側からこの山を見るのが日にましくなつて来た。ほかほかと足裏のぬくとい南向きの縁に立つて、

おなじく一ぱいに日影を受けてゐるこの穩かな山を見て居ると、何ともいへぬ静けさと温かさを覺ゆるのである。それにいま眼に見えて松の下草が黄いろくなつて來た。

登つたのはツイ近頃のことであつた。惜しいものに手を觸るる様な躊躇を覺えてゐたのであつたが、或る日一番上の子供にせがまれて登つて行つた。

少し登りかけて先づ私の眼をよろこばしたものは麓に沿うて大きな弧を描きながら海に入つてゐる狩野川の眺めであつた。そしてその川に沿うて建ち並んでゐる沼津の町の美しさであつた。駿河には一體に大きな川が多い。富士、天龍、大井、安部川などあるが、水量の豊かな事から云つたらこの狩野川に上越すものはない様に私には思はれる。水源は近い天城山から出てゐるので、富士川などと比較にはならぬ様に思はるのだが、見たところではまことに深い廣い豊かな姿をもつて流れて居る。地圖で見れば伊豆と駿河の直角をなした隅のところに小さく描かれて居り、私もツイ近年までその名さへ知らない川であつた。沼津町は大正三年に丸焼けになつて、殆んど町全體が新築された様な状態にあるので、意外にハイカラな美しい町である。ことにこの山に登つて見てそれを感じた。

なほ少し登ると松の間を開墾して薩摩芋や大根などの作られた小さな畑があつた。一面に蟋蟀が鳴いて、其處からは廣く海が見渡された。畑のめぐりの松は私の家の縁側から仰いで考へてゐたより遙

かに大きな松で、二間三間の高さに茂つてゐた。その松の間に露出して二三の大きな岩の並んでゐる所があつた。私は子供と共に一つの岩に登つて、海を見ることにした。この八歳になる東京育ちの子供は生れて初めて山登りといふことをするのであつた。で、息をはずませながら、あれを見、これを見、くるくる身體を廻すやうにして登つてゐたのだ。

白く晒された岩の上から見ると、ツイ眼下の麓に我等の住む小さな部落が明らかに見えてゐた。彼處其處と辿つて、自分の家を探して居た子供は、やがて大きな聲を出した。

『ア、見える見える、二階の窓が開いてらア、お母さんはいま何をしてゐるでせう、呼んで見ませうか。』

といふなり、更に聲を張り上げて、

『かアさん、みいちやアん、まアちやアん……』

と母や妹たちを呼び出した。それは實に大きな聲であつた。これならまことに聞えるかも知れぬと私にも思はれた。縁側に居ると折々斯うして呼ぶ子供の聲が山から聞えたからである。が、私にはその開いてゐるといふ窓すらはつきりと見えぬのであつた。寧ろ木立に圍まれたその家の縁側に躊躇^{しやが}んでゐる自分自身のまぼろしなどが見えたりした。

頂上は其處から近かつた。同じやうな圓つこい峰の頂きが二つ三つ並んでゐるので、それにも行き

これにも登つたが、とある一つの峰が一番高いことが解つた。その頂上は殆んど平地にちかい圓みを帯びて、芝草が生えて居た。そのあたり、女郎花、吾木香など秋草の咲いてゐる間に新聞紙の朽ちたのや籾詰の殻が散らばつてゐた。

『沼津案内記』によるとこの山の高さは海拔六百五十尺あるといふ。然し海岸の平地に殆んど孤立したやうな姿で立つてゐるので、頂上からの眺望は意外に遠くまで及んでゐる。左手一帯に遠く見渡さるる伊豆の國も、地圖から得た概念では唯だ一つの天城山脈を持つた大きな半島にしか考へられぬが斯うして見てゐるとその半島のうちにかなり複雑した、そして海から直ぐ峻しい高さを以て聳えて行つた山の背が幾つともなく入り組んでゐるのを見るのだ。その長い伊豆の根と、西はずつと霞の奥までも伸びてゐる御前崎との間に駿河灣が圓やかなふくらみを帯びて湛へてゐる。日光などの加減もあるであらうが、二三度私が香貫山から眺めたこの海はいかにも大きな池のやうにのみ思はれた。その廣やかに輝いた池の奥のつまりが即ちこの山の左手寄りに見下さるる江の浦である。其處は一種の寂びを帯びても見ゆる見るからに悲しいやうな靜かな入江である。入江から沖にかけて、蟻の様な漁舟が散り浮んで居る。同じく蟻の様に小さい伊豆通ひの汽船がその輝いた海の中に折々煙の輪を上ぐるのも可憐である。伊豆側を除いた池の周圍は靜浦の御用邸附近からかけて沼津の千本松原、田子の浦三保の松原と、數里にわたつて打ち續いた深い松原となつて居る。

海の光に疲れた眼を北に移すと、其處には鈍い黄色を帯びた富士の大きな裾野が小波の様にうねりながら次第高になつて擴がつて行つてゐるのを見る。ことに足柄の方の連山と富士との間に挟まれて向うせばまりにゆるやかに登つて行つてゐるあたりに、淺間や八ヶ岳などに見られぬ裾野の景色を見ることが出来る。東海道線の汽車は即ちその大きな澤の低處を三島から御殿場まで登つて行つてゐるのである。眼下に見る沼津の停車場からは殆んど二三分おきはこの裾野に向つて百足のやうな汽車を送り出したり迎へ入れたりして居る。沼津驛から西に行くのはいま豊かな稔りに垂り靜まつて居る稻田の中を海岸の松原に沿うて微かな煙を這はせながら眞直ぐに段々小さく走つてゆく。

眼前の裾野の大部分に根を下して黒く聳えてゐるのは愛鷹山である。三千四百尺の山らしい。御料林だといふことで、樹木が深いか殆んどいつでも黒々と見えてゐる。その山の眞上、常に多少の雲の影を纏はせながら空の眞中にのそりとして富士山が立つて居る。芝草の生えた香貫山の頂上から見れば、まるで頭上に臨んで何か物でも言ひかけてゐるやうに見ゆる事がある。そんな時にはこちらからも手を振つて何か言ひ度い心を起させらるる。が、おほかたは矢張り冷たく澄んで、彼女獨りの魂を守つてゐるやうに見ゆる場合が多い。

富士から左にかけては何といふ山々だか、甲斐から信濃遠江にかけて山脈が遠い低い垣を作つて連つて居る。

この圓い小松山には四方から登られるやうに道がついてゐる。二三日前、私が獨りで登つて頂上の芝生に寝ころんでゐると、其處へ沼津の女學校のまだ一二年生らしい娘たちがほゞ二百人近くも登つて來た。なかには田舎らしくもない美しい子なども混つてゐて、私はこそこそと其處を立ちのいたが、やがてこの赤い袴をはいた雀たちは八方に散らばつて松の根がたをあさり始めた。もうぼつぼつ初茸が出るさうである。

初めて子供を連れて登つた日、頂上で飲んだウキスキイが利いて私は其處から幾らも降りぬ松原の中でころんで下駄の緒を切つてしまつた。手布を裂いてそれをすけてゐると近くに躡躡しやがんで待つてゐた子供は、やがてそんな山の上まで這ひ登つてゐる赤い辨慶蟹を見つけた。

『ホウ、斯んな赤い蟹がある、東京だとこんな奴は一錢はするネ、父さん。』
暫らくそれを追つてゐたが、

『ヤ、此奴は大きいや、此奴なら二錢だネ、父さん。』

二疋とも彼はよう捕へなかつた。そしてまた私の側に來て躡躡みながら、

『足の裏を蚊に刺されると、何處が痒いんだか解らないネ、父さん。』

酔つ拂つた父はそんな話を涙ぐましく聞きながら、感謝した。我等父子の遊び場所には持つて來いの山である。(十月七日)

村住居の秋

小さな流

この沼津の地に移住を企て、初めて私がこの家を見に來た時、その時は村の舊家でいま村醫などを勤めてゐる或る老人と、その息子さんと、この家の差配をしてゐる年寄の百姓との四人連で、その老醫の息子さんが私たちの結んでゐる歌の社中の一人であるところから斯んな借家の世話などを頼むことになつたのであつたが、先づ私の眼のついたのは門の前を流れてゐる小さな流であつた。附近を流るる狩野川から引いた灌漑用の堀らしいものではあるが、それでも水量はかなり豊かで、うす濁りに濁りながら瀬をなして流れてゐた。

『今日は雨の後で濁つてますが、平常はよく澄んでるのですよ。』

と、早稲田の文科の生徒でその頃暑中休暇で村に歸つてゐたその息子さんは、同じくその流に見入りながら私に言つた。

いよゝゝ家族を連れて東京から移つて來て見ると家が古いだけにあちこちと諸所造作を直さねばな

らぬところがあつた。井戸の唧筒などもその一つであつた。完全に直すとする十八圓ばかり出さねばならなかつた。その時その餘裕が私に無く、差配一人でも出し盡つた。そしてほんの當座の修繕をしておく事にして、差配は私と妻とを連れて勝手口から小さな島の畔を通りながら櫻や柳の植ゑ込である一ならびの木立の下まで来て、

『なアに、これがありますからあちらはほんの飲み水だけで澤山ですよ、何や彼やの洗物はみな此處でなさいまし。』

と言つた。

其處には特に目にたつ大きな枝垂柳が一本あつて、その蔭の石段をとろ／＼と降りて例の流に臨んだ洗場がこさへてあつた。

其處は石段が壊れてゐて足場がわるく、向側の道路からあらはに見下されたりするので妻などはよくの時でなくては出掛けて行かなかつたが、埃っぽい眞夏の道を歩いて来た時など下駄のまゝ、其處から流の中に歩み入つてゆくのは心地よかつた。八歳になる長男などは泳ぎも知らぬ癖に私の其處に行くのを見付けては飛んで来て眞裸體になりながら一緒に飛び込んだ。水の深さは恰度彼の乳あたりに及ぶのが常であつた。後にはその妹も兄や父に手を取られながらその中へ入つてゆくやうになつた。そして其處に泳いでゐる小さな魚の影を見たと言つては大騒ぎをして父子して町に出て釣

道具などを買つて來たりした。

その年の八月が過ぎ、九月も半ば頃になるといつとなく子供たちは其處に近づかなくなり、水量も幾らか減つて次第に流が澄んで來た。そして思ひがけなくもその柳の蔭の物洗場に一面に曼珠沙華が咲き出した。まつたく思ひがけないことで、附近の田圃の畦などに眞赤なその花を一つか二つ見付けてひどく珍しがつた頃まで、まだ氣がつかかなかつたのであつた。オヤ／＼と思ふうちに、咲きも咲いたり、まつたく其處の土堤を埋めて燃えひろがる様に咲いて行つた。

盛りの短い花で、やがてまた火の消えた様にいつとなくひつそりと草隠れに莖まで朽ちてしまふと、今度は野菊が咲き出した。ぼつり、ぼつり、とそれこそ一つ二つの花が光の中に浮くやうに靜かに徐ろに草むらのなかに咲いて來た。附近の田圃も其處此處と刈られ始めて今は全く灌漑の用はなく、唯だ斯うした家ごとの洗場や野菜洗のために流れてゐるらしい水はいよくこのごろ瘦せて澄んで來た。柳や櫻の葉も次第に散つて手足を洗ひに日に一度位るづゝ私の出てゆくその洗場の石段などはおほかたその落葉のために埋れてしまつた。

土 橋

道路から小さな流の上にかけられた厚ぼつたい土橋があり、それを渡ると花崗石の門が立つてゐる。

その門から一二間の廣さでゆるやかに曲りながら十四五間ほど小砂利が敷かれて、其處にまた葛のからんだ古びた冠木門がある。私の好きなのはその石の門と土橋との間にある二坪あまりの所から富士を仰ぎ、遠く沼津の町の方面を見ることである。土橋の上も無論よい。移つてからもう三月ちかく、よほどの雨の日でもなくば私は先づ毎朝此處に来て眼を覺すのを楽しみとしてゐる。

この家はもとどんな人が建てたのだか、元來は矢張り百姓家らしいが、それから何代かの間を経てあちらに繼ぎ足しこちらを造作して今日に及んでゐるらしい。が、とにかくその入口の土橋はまさに正しく富士の嶺に向つて架けられてある。

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣な

せる愛鷹あまがの山

愛鷹の眞黒き峰にまき立てる天雲あまぐもの奥に富士

は籠りつ

先づ愛鷹の山が見える。この愛鷹山は見やうによつては富士の裾野の一部が瘤起したものとも思はる、ほどの位置と形とを持つて居る。やはらかに四方になだれた裾野の、海に向つた一端に其處だけ不意に隆起したやうな、三千尺ほどの高さを持つた山である。そして沼津あたりの海岸から見ればこの山の麓がまた直ちに富士の裾野と調子を合はせて西南東の三方にゆるやかに擴がつてゐる。山の五

合目近くまで、即ち富士の裾野と同じ様なゆるやかな傾斜を持つた部分までは大抵いま開墾されてゐるやうで、それから上が急に峻しくなり、そのあたりから御料林だといふことで墨色をした木深い峰となつてゐる。その峰の眞上の空に富士山は靜かに高く聳えてゐるのである。

移つて來た頃からツイこの十日ほど前まで、この富士山もまだ眞黒な色をしてゐた。木深いためではなく、露はに見ゆる山の肌が黒いので、愛鷹の峰とちがつて何となく寂しく寒く眺められてゐた。

この山は矢張り遠くから見るべき山だ、近くでは駄目だ、と毎日思つてゐたものであつた。

が、いつであつたか、もう二十日も前のこと、或朝非常によく晴れて寒い朝があつた。附近の野菜畑の間を歩いてゐると畑中にゐる女房たちが、寒い筈だ、今朝は初めて山に雪が見えたと挨拶してゐる聲を聞いた。よく見ればいかにも鮮かな朝日を受けた頂上のあたりに、微かに白く降つてゐるのが見えた。それは晝になつてはもう影もなくなつたが、それから折々さうした日が續いた。そして一昨日の夜のことであつた、かなりに烈しい雨が降つて、朝かけてからりと晴れた。何氣なく私はいつものやうにその朝早く門前の土橋の上まで來て思はず息を呑んで立ち止つた。眞青な空に浮き出た山全體が、それこそ毛ほどの隙もなく唯だどつしりと眞白くなつてゐたのである。驚いて家に飛び込んで、まだ睡つてゐた妻子や、信州から來て滞在してゐた友人やを引き起して、土橋の上まで連れ出してそれを仰がしめたのであつた。そして恐らくこれが今年この山の根雪となるものと思はれたのであつ

た。斯うなるとまたこの山の姿は一段と美しく見えて来る。もう遠近をいふ必要がなくなつて来るのを感じるのだ。寧ろ近いだけい、かも知れない。

沼津の町はこの大正三年に全焼したのであつた。狩野川の川口に在る漁師町らしい場末などが多少残つただけで殆んど全部焼けてしまつた。で、今の町は建て直されてからまだ間のない町なのだ。和風洋風と半々に混つた町の建築がいづれもみな新しく、且土地の氣風から殆んど東京化してゐる様所なのでその建てぶりもなかく、に氣が利いてゐる。そのうら若い町の横顔が私の門前の土橋の上から實にくつきりと見渡さる、。

土橋を道路に出ると、道路の下からずつと左右東西に打ち開けた水田で、田の向側には一列に青い竹藪が連つてゐる。その竹藪の向うの蔭をば極めて水のゆたかな狩野川が流れてゐるが、その四五丁下流に當つた向岸に町の半面は見えてゐるのである。

その邊は町の中でも目貫の場所で、會社銀行料理店などから普通の商家まですべて大きい、みが並んでゐる。それをすばりと切斷した様な河岸の軒並がはつきりと水田の末に眺めらる、のだ。十四五丁距てた距離から云つても、東南の日光を受くる方角から云つても、次第に刈られて冬の姿を表はしてゆく昨日今日の田圃の前景から云つても、いよくこの町の遠望は私に楽しいものとなつてゆく様である。(十月三十日朝)

土を愛する村

家族を連れてこの土地へ引越して來た最初の夜、鐵道便で出した夜具の都合から一晩だけ狩野川にか、つてゐる御成橋の袂の小さな宿屋に泊つた。

翌朝、こまかな村雨がふつてゐた。思ひがけなかつたこの夏の朝の雨は移住騒ぎのごたくに勞れ切つてゐた私ども夫婦の心を非常に靜かにして呉れた。宿屋の二階の窓際に寄つて茶を飲みながらツイ眼の前に濡れてゐる橋や川や川向ひの沼津町の家並などを見てゐると土地不似合に見事なその鐵橋の上を——あとで解つた、御用邸への道筋なので特に斯うした橋を架け名もそれから來たものであつた——幾人となぐ引續いた女の野菜賣が番傘をさして町の方へ渡つて行つた。一人二人ならば眼にもつかなくつたであらうが、後から後と續いて渡つて行つた。

『きれいな葱ですことねエ。』

妻もそれを見てゐたものと見えて側から言ひ出した。常から葱好きの私のことが心に浮んでゐたらしい。東京あたりの葱の様に白根ばかりでなく、白いところが三四寸、その先の青いところが一尺餘

りもある細身のそれを誠に見ごとに束ねて籠に入れてゐるのだ。蕪や夏大根なども籠の中に混つてゐた。葱に限らず、一體に野菜食ひの私はそれを見ながら思ひがけぬ一要件を果した様な安心を覺えざるを得なかつた。

雨のあがるのを待つて豫ねてから借りて置いた家の方へ移つた。鐵道便の家具や書籍などが届き、そちこちと家内の建具を直したりして五六日は解もなく經つて行つた。どうやら一片附片附いて普通の夕食をとる様になつて氣がついたのだが、かなりに廣い庭さきの籬根ごしに強い臭氣が襲つて來るのだ。それも定つて夕方、座敷を掃き出し障子をあげ放つて樂しみの晩酌を始めるとやつて來るのだ。例の下肥料をまく匂ひである。

『これぢやア困りますね。』

『どうも然し、これは田舎暮しには付きものだからね。』

と強ひて諦めながら暑いのを忍んで障子をしめたり、妻が祕藏の鴉居堂からとり寄せてゐた香を焚いたりして、その場をしのいだ。付きものとは言ひながら精々月に一二度の事だらうと思つてゐると、なか／＼どうして、殆んど毎日か隔日若しくは三日置き位に遠く近く匂つて來るのだ。籬根のツイ向側の畑などからは臭氣どころかその音まで聞えて來る事がある。鳩居堂の香はいつの間にかたゞの醬油に代り、やがてはその醬油を焚くことすら勿體ないと思ふやうになつて來た。

東京生活の永年の疲勞が出て來たとしてもいふ風に、越して來てから一月あまりといふもの、私はただ何をするともなく不馴な廣い家の内をぶら／＼と歩き廻つたり寝ころんだりしてゐて、先住者の荒らしつくした庭の手入をするでもなく、家のめぐり一つ歩いて見るでもなかつた。九月が半ば過ぎ、朝晩幾らか秋氣づいて來た頃になつて漸く其處等に出歩いて短い散歩などする氣になつた。出て見ればなるほど驚くべき野菜畑である。

野菜と云つても別に種類が豊かなわけではなく、珍しいものが出來るといふのでない。ありふれた葱、大根、蕪、人參、芋、牛蒡、薩摩薯といふ風のものなのだが、その手入の行き届いてゐること、あまり廣くない地面を細かに幾つかに仕切つて次から次へと寸時も土地を遊ばしておかないで何か彼が植ゑつけ取りあげしてゆく敏速なこと、右に舉げたもの、ほかに蕎麥、胡麻、粟といふやうなものから特に時季を急ぐいろ／＼な菜や瓜に茄子などの畑がぎつしりと相つまつて竝んでゐる美しさには私は幾度となく驚きの眼を見張つたのである。昨日此處を通る時にはまだ胡麻がいつぱいだつたのにいま見ればもう何處からか杓子菜の幼いのが移植されてゐる、蕎麥のあとに葱が分根されて來てゐる、と二三人して土をならしてゐると思ふと一二日すると何の芽だか解らないのがうす青く萌えてゐる、と云つた風である。元來私の住んでゐる楊原村は上香貫、下香貫、我入道他一二の大きな部落に分れ、我入道は狩野川の川口に當つて専ら漁業に従事して居り、上下香貫のうち香貫山の南麓に添うた一部

分が主としてこの野菜を作つてゐるのである。そして私の借りてゐる家は恰もその畑の一端に當つてゐるのだ。若松ばかりがきれいに茂つて形のまろやかな小さな山の香貫は茶の間の縁側から三四丁の東に當つて眺めらるゝ。

『沼津案内』には、

狩野川を距て、沼津の東に近接せるは楊原村香貫である。此地は氣候暖く地味肥沃にして蔬菜及び果實に富み、年々蔬菜の促成栽培をなし、逸速く京濱地方へ夥多の蔬菜を搬出し好評を博して居るが、これらの蔬菜果實はまた香貫女によりて沼津の町々へ賣捌かれてゐる。新しい野菜や瑞々しい果物を満載した籠を擔いだ數十人の香貫女が町の隅々まで呼び歩く聲と姿の優しさは心のどかな平和郷を思はせるが、云々

と書いてある。その狩野川は香貫山の裏、北東の所を流れてやがて沼津の町に添うて海に入つてゐる。

沼津といふ名から推してもこの附近はもと沼澤地であつたらしく、地味の肥えてゐるのもそんな關係からだらうが、土地の人のその畑を大切にすることは全く見てゐて可笑しい程である。その邊を歩いて見受くる菜畑にせよ葱畑にせよ、それこそ雑草一本生やしては置かない。そして一つの畑が空くとすると一日とは遊ばせないで直ぐ次の栽培に移る。私どもが毎日々と肥料攻めにあつた理由も其

處から來てゐたのであつた。第一、畑に出て仕事をしてゐる男女の働きぶりからして違つてゐる。今まで畑仕事など、云へば何となく長閑な動作をのみ心に描いてゐたのだが、此處のはまるで何か一つの餌を探し出した蟻のやうに執拗で敏捷である。幾度となく繰返していふ私の口癖だが、

『まつたく土を嘗めてるやうだね。』

といふ氣がするのである。或る年寄の百姓の言ふ所によれば、この土地の畑では毎年一反から二百四五十圓の収入が上るといふ。或る時遊びに來てゐた和泉の堺の在の地主の息子である友人にその話をすると、

『なんぼなんでもそれは嘘でせう、私どもの方では一等地、水田からでも百五十圓はむづかしいとしてあるのですから。』

と本當にしなかつた。その後、信州から來た同じく百姓である友人にそれらの話をする時、

『それは上るかも知れませんが、卸賣ばかりなら困難かも知れないが、あゝして毎朝自身で擔いで小賣に出懸くるのですからね。』

と言ひながら、つくづく感心して路ばたの葱に見入つてゐた。その時、恰度來合せて同じく私の家に泊つてゐた畫家のT——君はさうした話の續きに、

『どうも此奴が描きにくいんでネ、この葱の奴が！』

と、鬚だらけの顔をしかめて同じくその美しい畑を眺めてゐた。そのやうに相當以上の収入のある癖に土地に金持がない、これは土地の若者が遊びすぎであるからだとその老百姓はこぼした。ツイ隣の伊豆に入れば大小の温泉が並んでゐるし、第一川の向うに見えてゐる沼津の町は小さな割には遊ぶのに極めて便利に出来てゐる町らしいのだ。さう聞けば畑に出てゐる娘たちの身なりの派手なものも際立つて眼につくのである。

斯う書きかけておいて私はいま庭さきの籬根ぞひには何が作られてあるかを見に出て来た。籬の曲つた角の北の所にほうれん草、南側には杓子菜と豌豆とほうれん草のまぜ植、人參と小さな三いろの畑があり、その向側には聖護院と葱との大きな長い畑があつて、北側のほうれん草の向うには芋畑があつた。けふは暖い雨がかりで、富士は真白な綿雲に包まれてゐて見えなかつた。これらの畑の間の小さな徑を——實に狭い、つまり土の吝嗇から來てゐるのだ——歩くと到る所からこの山が仰がる、のである。

芋の葉のやぶれ静けき霜月の香貫が原ゆ富士
のよく見ゆ

夕づける寒き日に透き畝高の葱のはたけのさ
みどりぞ濃き

刈株の蕎麥の根赤き霜月の香貫が原に雲雀の
て啼く

山の根の淵

移住當時、ぐつたりと疲れてまだろく／＼近所の散歩をもようせずゐた頃、はる／＼と千葉縣の方から友人が訪ねて來た。或る朝、二人とも早く起きて飯の出る前を門前の小流の端に立つて眞向ひの富士を見てゐた。そしてふとした事から話し始めた歌の話が次第に面白くなつて、誰からともなく歩き出した歩みがなかく／＼に盡きず、門前の道を香貫山の北側に沿うて二三十分間も奥の方へ歩いて行つた。そして小松の茂つたその山の根と狩野川の流とが相接した所に思ひもかけぬ大きな見ごとな淵のあるのを見出した。

其處には二つの川が落ち合つて渦を巻くやうな大きな淀みを作つてゐた。その落ち合つた場所よりその道、山の根の道に沿うて少し上手に行く崖下の淵の見事さはなほ一層であつた。幅が百間か百二十間、長さは道に沿うた處だけが三丁ほどで道と離れて曲つた向うは更に五六丁の間同じやうな深い淵をなして續いてゐるのが見ゆる。流るゝとも見えぬ水面には水泡一つ浮いてゐず、そのあたりひどく急峻になつた香貫山の崖の根を横に通じてゐる道の眞下から直ぐ底の見えぬ深さとなつてゐるので

ある。對岸は赤松の林から雑木林が續き、その向側には桑畑でもあるらしい高みの原となつてひつそりとしてゐる。その林の根方もこちら側と同じい深さで漕へて、常に松の影雑木の影を映して居る。今までいろいろな所で見た淵のうちでも最も大きな見ごとな淵であつた。しかも何處か上州か信州あたりの深山の中にあるべき種類の淵の姿である。どうしてもこれが斯んな平地の、しかも汐臭い風の吹く山蔭にかくれてゐるやうとは思ひ設けられないものであつた。崖の端の路傍に立つて、疎らに立ち並んでゐる松が枝ごしにこの深碧の水のところに見入つた時は、私はまったく容易には聲も出せなかつた。この狩野川は天城山から流れ出て、伊豆半島の附根にあたるごた／＼した所を流れて沼津の海に注ぐのであるが、その流の短い割には甚しく水量が豊かで、恐らく有名な富士や天龍にもまさつてゐるであらうと思はる。その淵尻で落ち合つた一つの川は富士山の方から出て來た黄瀬川で、箱根の鐵道を東から越して來ると御殿場あたりから車窓の左右に白々と流れてゐるのを見るあの溪の末である。

その朝以來、數日の間私は毎日續けてその淵を見に行つた。そしてその廣い豊かな水の面に折々大きな魚の飛ぶのを見た。小さな舟を浮べて釣つてゐる人をもみた。氣のつかなくつた道の崖下の松の根に竿を出して坐つてゐる人をもみた。そしてたうとう自分にも沼津の町にでかけて釣道具を買つて來て、その崖下の松の根に蹲しゃがむやうになつた。

淵の深さは思つたより更に深く、ツイ岸ばたから三尋ほどの縁が沈んで行つた。私は幼い時から釣が好きで、それも始終立つたり歩いたりして手を動かしてゐるのでなく、竿を地につきさしたまま懷手をして坐つてゐる釣が好きであつた。謂はゞ其處の淵は私にとつて願ひどほりの釣場であつたのだ。人も釣つて居るし、をり／＼魚も飛んでゐるので何か知ら釣れるには相違ないが、サテ何が釣れるのかは解らなかつた。場所がらから考へると先づ鮒は大丈夫とみた。で、専らそれを目的として釣り始めたのだが、二日通ひ三日通ひするうちに唯の一疋をもよう釣らなかつた。そのうち他の人と一緒に行き合はす事がある。みるとそれらの人は多く十四五尋もある長い縁で竿無しの投げ釣をやつてゐるのだ。或る時、その人の側に行つて一體此處では何が釣れるのかと訊いた。その人は私の二間長さの竿を見て笑ひながら、此處は大きな鯉の居る所として有名なのだといふ。そして餌は薩摩薯のゆでたのを丸めて使つてゐるのであつた。

私はまた早速町へ出て投げ釣の一式を買つて來た。薩摩薯をもわざ／＼ゆでさせて、縁の切れるやうな大きな魚の手觸りを夢想しつゝ、勇んで淵に出かけて行つた。馴れない不様な投げかたではその丸めた餌は大部分は水に入る前に針から離れてこぼれ落つるのであつた。其處で次の日は薯に飯粒を混ぜて摺鉢で充分に摺りつぶし、餌に粘りけのあるやうにして針から落つるのを防がうとした。それはどうやら成功したが、魚の寄らないのは前と同じであつた。私は郷里で黒鯉釣の時に用ゐた方法を思

ひ出して、今度は薯と飯粒との上に煎つた糠を混ぜて摺り餌に香氣を含ませて魚を誘はうとした。

斯ういふ事をしながら九月の初めから今日まで約半ヶ年の間私は思ひだしたやうにしてはその淵に通つて糸を沈ませるのだがいまだに一尾の魚を其處から釣り上げ得ないでゐる。その間に私の門前を二尺から二尺五寸にも及ぼう位るの大きな鯉を提げて人の通るのを折々見受くるのだ。訊けばみなその淵で釣つたものである。それこれで此頃では妻や女中の嘲笑があまりに烈しいので私の釣も暫く途断えてゐるが、行き度い心はいつも下ごもりに籠つて燃えてゐる。

私の好んで坐る或る一本の松の蔭の前の水は流るゝともなくとろりとして上の方に逆さに流れてゐる。目立たぬ程の大きな渦の一部に當つてゐるのだ。松の根がたから露はれた苔岩は水際から急に大きくなつて切りそいだように真直ぐに淵の深みに入つて行き、やがて底の方の姿をば水に隠して居る。そのほかには石も見えず、藻も見えず、たゞまつ青な水が湛へてゐるのみである。その水を見ながら二時間三時間半日がほどを過す事は眼前の竿や糸の有無に係らず私にとつては何とも言へぬ静かな物さびしい、解き放たれた楽しみにはかならぬのである。頭の上を——水面から二三間の上を道路が通つてゐなかつたならば或は竿も糸も無しになほ私は楽しんでそれだけの時間を其處で送るだらうと思ふ。

ことに此頃は水に射す日の色がよくなつて來た。あまり強い日はいやであつた。寂びた静かな此頃

の日光はその動くともなく動かぬでもない水の深みに清らかな影を落して四邊を更におちついたものにしてゐる。對岸の雑木の紅葉も水に映つて一層鮮かないろを見せて居る。これが悉く落葉しつくしてその寒林の影をうつす頃になるとなほい、だらうと思つて居る。さうして釣つてゐる時は頭上の道もかなり氣になるが、然し其處をすつと行き過ぎて、二三丁も先から振返つてこの峻しい山の根の道が深碧な淵の上に通じてゐるのを見る眺めも誠になつかしいものである。そのあたりにはこの間まで柿紅葉に圍まれた二三軒の小屋があつて、其處の老爺たちがその淵だけの小さな舟を作つて毎日隠居仕事の釣商賣をやつてゐるらしい。其處からは富士も淵の上に仰がる。

淵に臨み、富士を仰ぐやうな山蔭に私も一つ草庵が結び度い。千圓か二千圓もあつたら出來さうなものだ、その金が無いものかなア、と思ひながら、其處の桑島あたりがい、か、此處の松原を切り拂つて建てたらい、か、など、はかない空想を楽しんでゐるのである。

流るとしあらぬとろみの青淀に一すぢうつる

われの釣糸

やごとなきおもひにもあるか持つ竿に垂りた

る糸は張りてたるまぬ

淵のうへにあらはれて居るひとつ岩冬はいよ

いよ眞白なるかな
向ひ岸おそき紅葉の照りてゐて靜かなるかも
冬の日の淵

松原

千本松原とも沼津公園ともいふ狩野川の川口から西に連り起つた松原も、料理屋があつたり別荘があつたり記念碑が立つたりしてゐるあたりは、いかにも公園くさく人間くさくしていやだが、僅か其處から二三丁も西の方に入り込むと全く自然のまゝの深い松原を見ることが出来る。

何といふ思ひがけない老松の多いことだ。しかもその老松の何といふ海岸らしくない眞直ぐな、伸びやかな幹をもつて聳えてゐることぞ。見上ぐるばかりその眞直ぐな高い幹は伸び／＼と中空に聳えて行つて、やがて其處で自由に枝を張り渡して居る。枝は枝と相まじはり、二本から三本とつらなつて終つひに西田子の浦まで三四里に及ぶ長い松原となつてゐるのである。幅は二三丁を出でないが、木立が深いからその中に入つて立つといかにも深い林の中に居るのを思ふのである。沖から吹く土地名物の西風に幹はいづれも大抵陸の方へ傾いて居る。然し、その木全體がおほらかに傾いてゐるので、中途から曲りくねつてゐるのではない。この強い西風から被むる土地の潮害を防ぐために指一本松一本

といふきびしい法度をこさへて昔この松原をそだてたものであるさうだ。

松の下草には雑木の茂つてゐる所がある。雑木の中にも櫨がちの所があつて此間からの紅葉はまことに美しかつたが、もう散つたであらう。または一切他の樹木がなくて、細かな砂原の打ち開けたあたりにはいちめんの薄の穂がそよいで、沖からさす日の光に輝いてゐるのも見ごとであつた。或る所には厚い芝草原があつて、高い梢を漏れて来る靜かな日光に自づと日向ぼこを思はずやうな所もあつた。

さうした林を横切ると小石の深い濱に出る。ほど／＼の圓い眞白な小石が深く積つてゐるので、其處を歩いてゐると自づと自分の下駄の音に耳を傾けずにはゐられなくなるのが常である。濱からは正面に伊豆半島が伸びて見え、右手寄りにはかすかに三保の松原から遙かに遠州路の岬の端が望まる。風の無い日のこの圓やかな海の靜けさはまた格別で、ともすると物寂びた池に臨んでゐるやうな思ひも起きて来る。

海に疲れた眼を返すと、其處の長い松原の眞上に例の眞白に雪をいたゞいた富士の高嶺が仰がる。松の木の間を歩いてゐても見える事がある。松原のまんなかどころに、その松原の長いなりに一本の徑が通じて居るが、その徑を歩き始めると、私はどうしても踵をかへすのがいやになるくらゐ靜かだ。いゝ徑だ。

どういふわけだかこれを土地の人は甲州街道と呼んで居る。例の伊賀越道中沼津の平作が腹を切つ

たのはツイ前面を通じてゐる東海道でなくて、この甲州街道なのださうだ。

松搔きのをみなが唄の老いたるもこの松原の
冬にふさへや

老松の梢うちつらねあづさ弓張りわたす濱の
松原は見ゆ

横さまに空にそびゆる直幹の老松が枝は片靡
きせり

くもり日は頭重かるわが癖のけふもいで来て
あゆむ松原

うしほぞとおもひもかぬる清らけき澄みぬる
風を今朝濱に見つ

末とほくけぶりわたれる長濱を漕ぎ出づる舟
のひとつありけり

松原の茂みゆ見れば松が枝に木がくり見えて
高き富士が根（十一月二十五日、沼津在にて）

發動機船の音

ずつと以前、十幾年も昔になるかと思ふ、就いてから幾らもたぬ新聞記者の職業もいやになりいろいろの動搖から身體も心もすつかり疲れ果てゝゐた頃、私は東京から逃げて横濱市内の安下宿の友人の一室に暫くごろ／＼してゐた事があつた。秋から冬にかけての頃で、い、日和が毎日續いた。友人は下級な西洋人相手の烈しい職業を持つてゐたので晝間はいつも私一人がその煤煙の頻りに飛び込んで来る古汚い室内に留守をしてゐた。その安下宿は大抵下級な船員や、または主に外國船のそれらの船員を相手に金を取つて暮してゐる若者たちの宿であつたが、私の友人といふのはその仲間でも一種の兄貴株になつてゐた。で、夜になるとその下宿の者、または他から來た者どもが大抵その室に集つて酒を飲んだ。そのあとでは必ず花札が持ち出された。そしてその勝負の結果ではまた南京町だの素人の眼にはつかない様な怪しい飲食店などでの酒となつた。他の細君だらうが淫賣だらうが見さかひのつかぬ連中の事で、よく女の事から喧嘩騒ぎも持ち上つた。さうした中に入つて私も一緒にその友人の尻について飲んだり食つたりしてゐたのである。さういふ氣持と共に彼等の身體は獸の様に強

かつた。夜はさうして寝ないで騒いでゐて、晝は必ずまた烈しい職業に向いて行つた。が、私はさうは行かなかつた。夜は酒の勢ひでどうやら彼等の相手が出来ても、ぽつんと取り残された晝間になるとまるで病人であつた。日當りのいゝ窓際を選んで寝てゐるか、波止場に腰かけてぼんやり波や船を見てゐるか、——或日さうしてゐると思ひがけぬ見知り人等の顔が大勢見えたので周章へて物蔭へかくれた事があつたが、それは與謝野寛氏の洋行を送る一群であつた——または西洋人の仲間だけで拵へた丘の上の小さな公園に入り込んで芝生の上にこつそり寝てゐるか、大抵そんな事であつた。

この頃、東京の友人佐藤緑葉君に書いた手紙の中の一句を今でも私は覚えて居る。『横濱の港には恐ろしく君の好きさうなものがあちこち走つてゐるよ』といふ様な文句であつた。

好きさうなものといふのは港内を走せ廻つてゐる小型な軽快な發動機船の音であつた。あのぽつぽつと圓い輪の煙と共に發する齒切れのいゝ音、あれが私にはひどく珍しかった、また氣にも入つた。その氣風から佐藤もこれが屹度好きに違ひないと思つたものであつた。

今度沼津に越して來るとその發動船の音が朝晩引つきりなしに聞えて來るのに驚いた。伊豆の西海岸一帶からこの狩野川の川口に入つて來るもので、横濱で私の珍しがつた頃は、世間一般にはまだなか／＼現今の様にこの船は用ゐられてゐなかつた様だが、今では小さな漁村にすら二三艘は備へてある。この川口に入出入するのは漁魚用のものより寧ろそれを輸送するもので、各地でとれた鮮魚を沼

津驛から汽車に托するためのものである相だ。とにかくよく出入する。夜なかなど眼を覺してゐると一層鮮かに、ツイ枕許を走るかと思ふほど、例のぽつ／＼を響かせてゆく。

沼津といふ名からも察せられる様に、この地はもと沼澤地であつたらしく、海岸から山の根まで——そのなかに沼津町や私の住む楊原村などがあるのだが——べたりとした平地である。そして私の居る香貫部落は有名な野菜の産地である。季候がよく、地味もいゝので、一年中寸時の休みもなく何か採れるのださうだ。土地の人が畑を大事にする事は全く可笑しい位で、午前中に二畝だけの菜を抜いたならば、午後には直ぐ其處に他の種を蒔くと云つた風である。で、その平面の畑地が斷えず何かの色を帯びて居る。地肌を露はして居る時が少い。青かみどりか、または少し黄ばんで居るか、常に種々の色どりが組み合せられてゐる。

狩野川の末はそれらははづれを流れて海に入つて居る。土地の名物の西風の風いでゐる朝の間など、それらの美しい島の間の徑を歩いてゐると、例の齒切れのいゝ音と共に白いまん圓い煙の輪があとからあとと續いてその葱や大根の葉のうへに浮んでは消えてゆくのを見る。船の姿は大抵は畑にかくれて見えない。たゞ煙だけが輪をつないで斜めに上つてゐるのである。

沼津の町は狩野川の川口から十町ほど上手の所に眞白な家並をならべてゐるのであるが、其處から出てゆく發動船のうちに、この江の浦灣一帶に沿うた部落から部落への乗客のみを運輸してゐるもの

がある。船や會社の名を白鷺と呼んでゐる様に、船體は白く塗つてあり、荷物を運ぶ他の發動船よりは形もずつと小さくて綺麗である。

この船に乗つて川口を離れ様とすると、恰度富士山が沼津の町の上いつぱいになつて仰がる。川を離れて海に出る様になると、靜浦から千本にかけて一帯の深い松原を前景にする事になつて、富士は急に大きく高く眺めらるゝ様になる。先月の事であつた。信州から遊びに来てゐた中村柊花君と一緒にこの船に乗つて江の浦灣を廻つたのであつたが、わざと客室には入らず、船尾の一疊敷もない様な狭い處に坐つて、繪や寫真で見馴れてゐるこの景色を楽しんだ。そして、

『月並といふ奴もこの位になるとなか／＼馬鹿に出来ないものだね。』

と言つたりした。凧いではるてもその小さな船は川口のあたりで少しく搖れた。そしてその狭い場所に擴けた酒やたべ物の上にかまかな飛沫がとんで來た。

山蔭の池に似て靜かに深いその入江の奥には樹木の茂つた——魚を寄せるためだといふ——島があつて、三角形に尖つたかなりの高みの頂上には古びた祠がある。その島のむかうの岸の山蔭に一握りに握れさうに家の建ち込んだ三津といふ古びた賑かな入江町がある。富士は其處からは入江を前に森の深い島を左手にした空あひにみえて居る。

その漁師町の裏から微かな登りの山を越えて、なだらかな傾斜を下らうとすると其處に小さな丘と狭い田圃とがこまかに入り混つた一區域が見下さるゝ。そのあたりの天然そのものが日向ぼつこをして居る様な澁んだ靜かな小さな場所であるが、その丘の蔭田圃の中に長岡温泉と古奈温泉とが並んでゐる。

東京を去つていつの間にか半年たつた。東京に居る時には毎日二人か三人、五人か十人位ゐる、來客があつた。こちらから出す客もあり、向うから提げて來る客もありして多くの場合が酒となつてゐた。よく／＼人の顔をみるの、辛い時は散歩に出た。でなくば布團を被り、雨戸をしめて寢てゐた。そして、せねばならぬ爲事をば自然と夜でなくてはやらぬ様な状態になつてゐた。そんな夜は晩酌を少し早目にし、夕飯を終ると直ぐ客の來ぬ間に床に入り、二三時間を熟睡してから起きるのであつた。

その來客がこちらに來てからは大抵十日に一人位ゐるの割である。相當の距離を置いた離室を書齋としてゐるので、家族との交渉も軽くなつた。斯うして朝から晩まで、先づ全く自分自身の時間となつたわけであるが、さればと云つて豫ねて楽しんで來た自分の爲事といふものをば殆んど何もしてゐない。唯だをり／＼自分で顧みて思ふのは、東京ではあれでよく生きて來たなアといふ事である。

今までどうして此等を片附けて來てゐたらうと自分ながら不思議がらるゝ、忙しい爲事を割合に多く

私は背負つてゐるのであつた。これと云つて眼立たぬ爲事であるが、それが無くなれば早速に家族して困らねばならぬ爲事なのである。東京では現在より数の多いそれらを受持つてゐた。が、一向に自分でもそれが氣にならなかつた。氣の張つてゐたせるもあらうが、一つには全ての仕事をごまかしで片付けてゐたのである。時間が出来、心が多少とも落付いて來るともうそのごまかしが出来なくなつた。くだらぬ仕事でもこつ／＼と丁寧にやつてゆくといふ風になつて來たのである。急に大人になつたものだと苦笑されるが、漸く其處に自分の生長を見出した思ひがするのである。今までは要するに何が何やら解らなかつたのだ、自分の生活も自分の爲事も。然し、なまけ者は終になまけ者である。すべての仕事に對する態度が違つたといふだけで、そのために熱心に費す時間といふものは依然として一日の中の極く僅かな部分に過ぎぬ。他はたゞ何をすることもなくぼんやりと過してゐるのだ。

散歩は矢張り東京に——都會に限る様である。このあたりは景色のい、所があると云つても何しろ場所が狭い。二三度行くうちにはその附近の者に顔を見知らる。顔を見知らる、様になると散歩の味ひはめつさり減殺されるやうに私は思ふ。銀座でも、淺草でも、もと住んでゐた近所の貧民窟のやうな場末町でも郊外でも、一切その心配は無かつたのであつた。

釣に行かうとすればきれいな海岸の砂原でも、ずつと静かな寧ろ氣味の悪いほどの山の根の淵でもどちらにも行ける。私は幼い時からこれが好きなので、をり／＼出かけてゆくが、降つても吹いても

といふだけの元氣はない。それにもう水を見て過すには寒さがきつくなつて來た。

331

自然と自分の部屋に閉ぢ籠るわけだが、無念無想の端座に時を送る修業は出來てゐない。火鉢を抱いて雑誌でも讀むといふのが落ちになる。それに出てるのは先づ小説なるものだ。歌が段々拙くて滅亡するのも近くださうだが、この大流行の小説なるものの正體も我等歌よみからみると随分めんやうなものやうである。十二月號の「新潮」と「文章世界」とによつて世間的代表作と各自々信の作との表目をみる事が出來たが、會て讀んだそれらの題目と内容を想ひ起して來ると『へえ』とばかり、いよ／＼不可思議に思はる事が多い。いや、兎に角何等かの興味で面白く讀ませて貰ふやうな小説なるものには先づ近頃殆んど出會はない。従つてその雑誌も手に取つたり置いたりである。唯うまいのは煙草だ。好きには好きでも量をば過さない方針であるが、こちらに來てからは自づとその埒を破るやうになつた。自分の吹いた煙の立ち昇るのをみてると、香を焚いて經を讀む人たちの静かな心持とも似てゐるのを思ふのである。しみじみ淋しい夕方など、今までの癖で何處かへ出かけて一口飲み度いなアと思ふ事があるが、東京のやうに簡單に氣樂に孤獨を樂しみながら飲むといふ場所が沼津には無い。在るのは所謂お料理屋で、行けばどうしても女の一人か二人は呼ばねば具合が悪い。それには金の都合もあればその場の氣持の適不適もある。それこれで大抵は痛いやうな心を静め我慢しておもむろに火鉢に炭をつぎ足す事になるのである。(十二月九日)

雪のおもひ出

私は日向國の或る峡谷に生れた。山としても峡谷としてもみたくところかなり深かつたが、其處は九州でも南寄りの海岸に近かつたので、ひどく暖かであつた。正月の來るたびに思ひ起すことだが、その村の小學校で新年の式をするごとに、私たちは學校裏の小さな溪間に入り込んで梅の花を伐り出して來ては式場の花瓶に挿したものである。

私の生れた家の前の崖下を直ぐ溪が流れてゐた。岩に圍まれた淵と、眞白な瀬との連続した溪で、細かな砂の溜つてゐるなど、いふ處をばその頃その溪に見ることは出來なかつた。その激しい溪に沿うて四五里に亘る細長い私たちの村は出來てゐたのである。その溪を中にして深い深い峡谷の空、私の家からみればや、南がかつた西の空に、尾鈴山といふ附近第一の高峰が聳えてゐた。その尾鈴から東にかけて七曲峠、冠嶽といふやうな切りそいだ嶮山がそれこそ屏風をたてたやうに連つて南の空を限つてゐたのである。

その尾鈴にだけ、年のうちに一度か二度、ほのかに雪の降ることがあつた。それもほんの頂上から

八合目あたりにかけてほんのりと斑に積むだけであつたが、それでもそれを見るといふことは子供の時分の私たちにとつて少からぬ歡びであつた。

『コラ／＼早く起きてみんか、尾鈴い雪が降つたぞ。』

斯う言つて父から呼び覺された記憶が實に心地よく思ひ起されて來る。

その山に降る雪がどうかすると暮れかけたその峡間の村までも降つて來ることがあつた。すると私たちはみな戸外に出て、餌を待つ池の鯉のやうにてんでに大きく口を開いて天からまつて來るその白い小さなものをわれがちに呑み取らうとしたものであつた。

その私が初めて自分の足で親しく地上に積つた雪を踏んだのは、どうもよく思ひ出せないが七歳か八歳かの時であつた。其頃私たちの村に母の親類に當る鈴木といふ人が來て住んでゐた。もと近くの延岡藩で相當の役を持つてゐた人であつたさうだが、性來の剛腹と頑固とそして絶えず何かをたくらんでゐる山氣とが禍をして終に其城下町を棄て、山の中に引込む事になつたものらしい。村に來ては始終病身で貧乏で、いつも父や母に厄介をかけ通してゐた。その人の息子に信さんといふ人があつた。まことに正直な若者であつたが、その父親と合はずに絶えずその病身な親からいぢめつけられてゐた。私の父や母も常に『信が可哀相だ』と言つてゐた。その頃信さんは廿三四歳でもあつたかその信さんに連れられて私は私の二番目の姉の嫁いでゐる先に行く事になつた。何で行つたのだから覺えてゐない

が、何か信さんが自分の事を頼みに行くのに強ひて私もくつ着いて行つたやうに思ふ。私はその鈴木の小父をもこの信さんをも好いてゐた。姉の嫁いでゐる先といふのが同じやうな山の中の村で、義兄は其處の小學校の校長をしてゐた。普通なら一度海岸に出て、其處からまた他の谷間をその村に入り込むといふのが順路なのだが、信さんはそれをすつと近く、何とかいふ山越をして行つたのである。

その山の根まで行くと雪が降り出した。其處までの里数は今でも推定出来るが三里ほどあつたわけだ。思ひがけぬ事で、信さんも弱つた。そして私を背負つてその山を越さうと思つたらしい。その用意をするために、その山の根の村の——村と云つても戸數四五十あるなしの處だつた様におもふ——小學校に寄つた。小學校の教場と棟續きに先生の住む部屋が出来てゐたが、その先生は私の父や義兄など、知合である事を知つてゐたので信さんは其處に寄つたものらしい。其處で背負ふ紐や、上から羽織るものを借りた。勿論同じくこの不思議な天候に驚いてゐた人たちから泊つてゆけとか何とかすすめられたに相違ないが、血氣な信さんは聞かなかつた。實際何か非常に急ぐ重大な用事で、そのため信さんはひどく昂奮してゐた事が思ひ出されて来る。そして家内中に送り出されて、ちら／＼降つてゐる雪の中に出て行つた。

小學校と云つても極めて小さな粗末な掘立小屋式のものであつたに相違なく、先生の住居の入口と生徒の昇降口とが一緒になつてゐた。その汚い下駄や草履の片の散らばつてゐる様な土間へ先生と奥

さんとその娘さんとの三人がひとしく降り立つて送つて呉れたのであつた。先生はかなりの老人であつた。奥さんの事は少しも記憶がない。それからもう一人の娘さんだ。私はいまこの娘さんの事が書きたくてこの文章を書きかけたのかも知れないほど、この人のことをはつきりと覚えて居る。

初め私は圍爐裡の傍に坐らせられた。信さんは腰かけたまゝ、手を炙つてゐた。そしてどんどど火を焚いて餅を焼いて出された。親たちと信さんとが大人同士の談話を交してゐる間にその娘さんは頻りに私にその餅をすゝめて呉れた。いかにもそうつと、唯だ眼顔でだけ言ふ様にして勧めて呉れたのであつた。それがどれだけ私に嬉しかつたことか、ともすれば泣き出す様にしてその餅を見てゐたに相違ない。そしていよくその雪の中に出てゆく事になつて親子三人が土間に降り立ち、信さんと私は軒下に立つた時、娘さんは親たちのために押されて其處にあつた壊れかけた下駄箱に押しつけられさうになりながら、信さんの背中に負はれた私をいたまじさうに見てお辭儀をした。その惻愍さうな顔に上つた微笑の美しかつたこと、瞳の澄んでゐたこと、今でも私は秀れた小さな畫を見る様に眼のあたりに其顔を思ひ出す事が出来る。

歳は私より三つ四つ上であつた。髪も着物も覚えてゐないが、やゝ面長で、眼も鼻も、口も、すべてくつきりとした顔であつた。明るい、聰明な顔であつた。どうした事だか、私は其後しばらく果物の柿を見てはこの人の顔を思ひ出したものであつた。私の郷里にとうけんじといふやゝ長めな、霜が

おりていなくては甘くならぬ柿がある。綺麗な柿だがこの柿を見てはをりく其娘さんの事を思ひ出したものであつた。或は其時、餅と一緒にこの柿をも御馳走になつたのであつたかも知れない。其後、名を聞く事もせず一度も逢ふ事なしに濟んでしまつた。

山にかゝると雪はもう積んでゐた。初め洋傘をさしてゐたが、路が狭くて木の枝にかゝりがちの所からやがて信さんはそれをばつぽめて私には手拭で頭から頬冠りをさせ、自分は長い髪のまま濡れて行つた。この人は幼い時母親の不注意から圍爐裡に落ちて頭に大きな火傷をしてゐた。それでそれを隠すために襟あたりまで髪を延ばしてゐた。背負つて登るとは云つても、私ももうまるきりの幼児でないので相當に重い所から、暫く登つては信さんの背から降りてその眞白な上をたどくと歩いて行つた。何しろ雪といふものを手に取つて見るのが生れて初めてなので、その積もつた山を歩いて越さうなどは全く思ひもかけぬ事であつた。で、最初は珍しい一心で元氣よく登つてゐたが、次第に四邊あたりが恐くなつて來た。行けば行くほど先を閉ざしてゐる様な降りやう、をりく木立の上からくづれ落つる音、ことに大きな山鳥がまひ立つた時からたうとう私は信さんにとりついてしまつた。

無論さう大きい峠ではなかつたのであらう。やがて向うの麓に出ることが出來た。其處にかなりな溪が流れてゐた。それに懸つた橋が名の通りの一本橋であつた。其處に行くと信さんは暫く立止まつて見てゐるが、やがて私を背からおろしておいて自分一人で先づそれを渡つて行つた。そしてその橋

に積つてゐる雪をすつかり落して置いて再び私を背負つた。その時信さんが私を顧みる様にして言つた言葉はよく覚えて居る。

『繁ちやん、お前ゆうと俺にとつちいぢよらんとあぶねえよ、ちつとでも動いたらあぶねえよ、落つたら兩人とも死なんならんから』といふ様な事であつた。その言葉つきから少からぬ危険を私は感じた。そして兩手を信さんの肩から頸に廻して、顔をばその背に臥せてしまつた。渡りかけると、然し、案外に容易に渡りおほせた。そして向う地につくとどしんといふ風に信さんは私をおろした。そしてにこ／＼しながら言つた。

『こりからちつた歩くどが』

私も唯々として彼に手を引かれながら歩き出した。そして雪で白くなつてゐる一本橋を顧みてぞつとした。その溪に沿うては梅の花が雪をかぶりながら到る所に咲いてゐた。そして程なく人里に出た。『あら、まア』と言つて戸口をあけた姉を見ると私はたうとう泣き出してしまつた。三人の姉の中で私は此姉を最も好いてゐたのであつた。もう夕方で座敷には洋燈がついてゐた。

信さんはその後父親と二人で臺灣に渡つて甘酒屋を始めた。が、幾らもたたぬうちに親子喧嘩をしてあちらで行方不明になつたと聞いてゐた。父親も折角成功しかけたその甘酒屋で我慢せず、濁酒を作りかけると忽ちにまた失敗し、ひどい病身になつて再び私の村に歸つて來た。そして私の東京に出

た初め頃に死んでしまつた。

一昨年あたりではなかつたかと思ふ。或る歌の雑誌の新年號で歌壇番附といふ風なものを掲げ、その大關の所に私の名が出してあつた。するとそれから半年もたつた頃臺灣の或所から、それを見たと言つて、多分私の知つてゐる若山さんだと思ふが、あなたは鈴木信太郎といふ名を覚えてはゐないかと書いた手紙をよこしてくれた。

入江の奥

ただに居りて居りがたき日の夕暮を外に出で
來れば涙はくだる

伊豆の大瀬崎と駿河の狩野川の川口との狭い間に二三里も深く入り込んだ入江の奥はまるで山蔭の池のやうな静けさと、そしてさういふ處に思ひがけぬ深さをもつて、湛へて居る。そのあたり、入江を挟んだ山はみな斷崖で、現にその崖をも切り削いで建築用其他の石材を採取してゐるので樹木なども深くなく、何となく寒げな姿をしてゐる。けれどその崖の根の水はまつたく深く澄んで、これが沖に連つて大きな浪やうねりを上げてゐるのかと思ふと不思議な氣がする位である。

ちつとして居るに居られぬやうな、譯としてはなく心の焦立つ時が私には折々ある。そんな時の或日の夕暮、私はその入江の奥をふところ手をしながらせか／＼と歩いてゐた。三時頃に家を出て三里近い道をそこまで歩いて行つたのである。

漁師町とも舟着場ともつかぬ五六十軒の家のかたまつた宿場がその附近の崖の根に散在してゐる。ことにすつと奥になると、道は屈折の烈しい磯の崎を迂回することをせず、宿場から宿場へ崎の根方に隧道を穿つて通じて居る。がらん洞な一つを通り抜けると恰も其處へ上から切り出した石を落されたり大きな聲で唵鳴られたりしてぼんやりした心を驚かしながら、いつかよく／＼の奥のつまりまで私は歩いてゐたのだ。

何處まで歩いてもその日のいらした心苦しい氣持は直りさうになかつた。亂暴に急いで來たので勞れも出て居た。恰度其處の道下の狭い所で小さな地引網を引いてゐた。この網の上ののを見て、それから歸らうと強ひて自ら諦めながら私は道ばたの石に腰かけて十人ほどの人の引いてゐるそれをぢいつと眺めてゐた。もう上りに近い頃で、程なく私はそれが白子網である事を知つたが、いよくその上らうとする時であつた。なかの一人が、何やら頓狂な聲を出した。すると十人ほどのすべてがそれに合せて手足を振り動かすやうな大きな叫聲をあけた。その聲を聞きつけるとツイ近くの部落から三五人の男女が馳け出して來て其處に集つた。そして道から飛び降りて惶て、地引の仲間に加はる者もゐた。網尻について舟を浮べてゐた二人の男は、その網の上り終るのを待ちかねて網の中から二すくひ三すくひの白子を掬ひ取るや否や自分の舟の中に打ちあけて、あたふたと沖の方に漕ぎ出して行つた。網につかまつてゐた中からも二三人の男が矢庭に其處の砂地に上げてあつた他の小舟を押し

下して同じく地引網の中から白子を掬つて漕ぎ出した。その間に無性矢鱈に急いで地引をば引き上げたが、中にはかなりの白子が入つてゐた。が、彼等はそれをば殆んど眼に入れないさまで、たゞ一刻も早く引上げた網を整理しようとあせるらしかつた。しかし、なかなかそれが思ふやうに行かなかつた。見物人は増し、彼等の叫び罵る聲は一層高まつた。

沖に漕ぎ出た舟はいま掬つて行つた白子を頻りに海に撒いてゐた。見るとその舟のぐるりに大きな渦の面の様に、また夕立雨のふり注ぐやうに、無數の波紋がかすかな音をも立てかねまじきほど一面に巻き起つてゐるのである。私にはそれを見て彼等の叫聲の意味が漸く解つた、白子を追うて來た何やら他の大きな魚の群が彼等の網のあとからいま其處に寄つて來たのである。白子はさて置き先づその大きな魚族を逃すまいと彼等漁師は猛りたくらんでゐるのであつた。白子を撒くのは其處に寄つた魚族を逃すまいための罠であるのだ。

『何です？』

私は側に來て立つてゐる土地の茶屋者らしい若い女に訊いた。

『うづわですよ。』

『あ、うづわですか。』

うづわとは普通いふさうだ、鯨のことである。

船では一人の男が有合せの釣道具に白子をさして釣り始めた。沙魚釣でもあるらしい小さい竿が二重に曲る様に撓んで見る／＼二疋三疋と大きなうづわが釣りあげられた。そのうちに他の一艘は網の用意が出来たと見るやくりと漕ぎ返つて濡れしとつた網を山のやうに積み載せると共にどや／＼と四五人の新しい漕手を飛び乗せて狂ほしげに漕ぎ出して行つた。一艘の方では一人はせつせと白子を撒き、一人は頻りに釣つてゐるのである。それを中心にとり圍んで小さな圓を描きながら、網舟はえつさえつさと漕いで廻つた。

冬の夕暮のうすら明りはいつの間にか青やかな月の夜となつてゐた。其處から見る入江の向地の山陰は墨繪のやうに深い影を作り私等の立つてゐるあたりはまともに満月らしい光を受けてゐた。其處へ程なくその死物狂ひの網は引きあげられた。狂ほしい人影と叫聲との中に打ちあげられた網の中のうづわは素人目にも二百近い数がよまれた。網の者も見物人もみんな全く酔つた者のやうであつた。私もいつかぼうつとした心地になつてゐた。

『これを一疋賣つてくれませんか。』

『さアさ、幾らでもお持ちなさい。』

掌にまだ微動を感じる魚の尾を攔んで一二町も歩いて來ると、漸くその場の酔興から私は醒めかけた。これから自宅まではまだ二里のうへあつた。それかと云つて其處にこの新しい魚を捨てるにも忍

びなかつた。持てあましながら袂の蔭にかくすやうにして提げて歩いて來ると、其處の漁師町の中ほどに小さな飲食店のあるのを見付けた。矢張りまだ多少酔つたやうな氣持でゐたのかもしれない、殆んど何の躊躇なく私はその店に入つて行つた。

『これを片身だけ料理して酒をつけてください、片身は君にあげます。』

その店の亭主もそれを何處から提げて來たかを知つてゐた。そして笑ひながら私の手から受取つた。

『火鉢を出しませんから……』

と言つて誘はれて私は店の奥の圍爐裡に寄つた。煤けた箆筒や鼠入らずや、夕飯の後の散らばつてゐる部屋の圍爐裡の側には生れたての赤ん坊が寝かしてあつた。そのすぐ側に私は坐つた。亭主は大きな薪をさしくべながら、背後を向いて隣家にでも行つてゐるらしい女房を呼んでゐた。見るともななく見ると其處の勝手口のあけすて、ある戸口からはツイ鼻先に海の波が見えた。ひろく滑らかにうねつて來てはザアツと眞白に砕け散つてゆく。月の光はいよ／＼深く其處に射してゐるのである。

忘れてゐたやうな夕方からの自分の心持をふとまた思ひ出した。それと共に何とも知れぬ惡感が身内を通つて行つた。そしてともすれば零れさうな涙を覺えて私はちつと酒を待つた。(十二月二十日)

春の二三日

くもり日は頭重かるわが癖のけふも出で来て

歩む松原

三月××日

千本松原を詠んだなかの一首に斯んな歌があつたが、けふもまたその頭の重い曇り日であつた。朝からどんよりと曇つてゐた。

非常に急ぎの歌の選をやつてゐるが一向に氣が乗らない。五首見では一ぶく、十首見では一服と煙草ばかり吸つていつの間にか書近くなつてゐるところへ、近所の服部さんの宅から使が来た。庭の紅梅が過ぎかけたから見にいらつしやい、一緒にお晝をたべませうといふ事である。赤インキのペンをさし置いて早速立ち上つた。そして使の人の歸つて行くうしろからてくくと歩いて行つた。

紅梅はまだ真盛りであつた。かなりの老木で、根もとから直ぐこまぐと八方に枝を張り渡した、丈の餘り高くない木にいちめん咲いてゐる。花もまた枝と同じくこまぐと小さく繁く咲いてゐる

のである。花の向うには低い杉の生垣、生垣を越しては直ぐ香貫山の麓が見える。至山ことごとく小松原であるこの山も麓の方には稀に櫟林や萱の原がある。紅梅を見越しての麓の原はちやうどその櫟の林となつてゐた。まだ落ちやらぬその木の枯葉の背景が、その紅の花をひどく静かなものに見せてゐる様であつた。紅梅のめぐりには尙ほ四五本の白梅が半ば散りかけて立ち竝んでゐる。

お晝は目下伊豫の松山から來訪中で、近く此家の主人と結婚さるべき櫻井八重子嬢の手料理であつた。障子をあげ放つには少々寒さのきびし過ぎる今日の日和であるだけに、温い酒の味は一層であつた。少し健康を害して暫く東京より歸郷中である主人公にはお構ひなく、私は殆んど手酌で手早く杯を重ねて行つた。

その書齋には犬養木堂翁の額がかつてゐた。國民黨宣傳部理事である人の書齋に翁の筆のあるのは當然として、またその筆致のよしあしは別として、私にはその文句が目についた。たゞ大きく『不惑不懼不憂』と書いてある。その静かな境地を思ひ浮べながらその事を言ふと、イヤそれはこれを書いた當人と思ひ合せるとなほ一層この言葉が生きて來るといふことであつた。さう答へながら服部さんは『さうだ、古奈の犬養さんの別荘に或る軸物の箱書が頼んであるんだが、食事が濟んだらそれを受取りかたぐ古奈まで遊びに行つて見ませんか、そして其處の温泉に一つ入つて來ませう、犬養さんは來てゐませんが兎に角もう出來てる筈です、行つて見ませう、八重さんも行きませんか。』

と言ひ出した。

一先づ沼津の町へ出て、其處から自動車で古奈に向つた。里程三四里、程なく二升庵の門前に着いた。小さな岡の根に、高田早苗、鈴木梅四郎兩氏の別荘と相並んで名前は前から知つてゐたこの二升庵は在るのであつた。まだ附近の開けなかつた昔、米二升さへ持つて來れば誰でも泊めるといふのでこの珍しい庵の名はつけられたものださうだ。

箱書は出來てゐた。蓋には漢文で、由來箱書などは卑俗な茶人共の爲す業である、それを自他ともに新人を以つて許す服部純雄君が求めてくるとは以つての外の話である、大隈侯病篤しと稱へられ余もまた病褥にある日、といふ風な事が細字で認められてあつた。

甚だ失禮だとは思ひながら、その留守宅の湯殿に滾々と湧いてゐる温泉に身を浸した。彼の老政治家が何か事を案ずる際には常に人目を避けてこの別荘に籠ると云ふ。必ずこの湯槽の縁の石に頭を凭せて靜かに思ひを纏めらるゝに相違ないなどと思ふと、同じ温泉でもこの清らかな湯がよそならぬもの、様に思ひなされて、たゞ靜かにたゞつ、ましく浸つてゐた。

やがて待たせてあつた車に乗つて、夕闇の降りて來た下田街道を徐ろに走らせた。道は田圃の中にあつて、直く且つ平かである。湯上りのつかれごころで三人とも多く無言のまゝ、の車の窓に、近く右手に赤々とうち廣がつた野火のほが見渡された。箱根山の枯草を焼くものである。

四月×日

東海道五十三次のうち丸子の宿しゆくはとろゝの名物と云ふことをば古い本でも見、現在でも作つてゐることを人から聞いてゐた。そのと、ろ汁が私は大の好物である。あまり暖くならぬうち一度是非行つて見たく、ついでに其處の宇津うづの谷峠やをも越えて見たいと思ふうちにいつか桃の花が咲いて來た。ぐづぐづしてはゐられないと急に思ひ立つて、其の頃私の宅に來て勉強してゐた村松道彌君を連れ朝まだ月のある頃に沼津の町を過ぎて千本松原に入り込んだ。松原の中に通じてゐる甲州街道をすつと富士川まで歩いて行かうといふのである。どうしてこの松原の中の道を甲州街道と云ふか、或はまだ東海道の出來ぬ以前に此處にこの道があり、末は駿州から富士川にでも沿うて甲州の方へ入つてゐるものかも知れぬ。兎に角現在の汽車道は昔の東海道に沿ひ、その東海道は沼津から富士川の岸に到るまで三四里の間この千本松原に沿うてゐる。そしてその松原の中に細々として甲州街道と稱へらるゝこの小徑がついてゐるのだ。街道とは名ばかりで、ほんの漁師共の通ふにすぎぬものではあるが、五町十町と私はこの松原の蔭を歩くのが好きであつた。そしていつかこの小徑のはづれまで、言ひかへれば富士川の川口で盡きてゐる松原のはづれまでぼつ／＼と歩いて見度いものと思つてゐた。名物の名残を喰ひに今は亡んだ宿場まで出かけるならいつそ汽車をよして歩くがよく、歩くならば月並な東海

道を歩くよりこの人知れぬ廢道を行つた方がよからうと云ふ兩人の間の相談からではあつたが、要は靜かな海岸沿ひの長い／＼松原を歩き盡したいといふにあつた。

松原に入つた頃はまだ薄暗かつた。松はたゞしつとりと先から先に立ち竝んで、ツイ左手近く響いてゐる浪の音もあるかなしかの風ぎである。やがて空の明るむにつれて、高々と枝を張つてゐる松の梢を透して眞白な富士が見えて來た。そして同じくその右手の松の根がたに低く續いた紅るの色が見え出した。今を盛りに咲き揃つた桃の畑である。松原の幅は百間から二百間、その間にほゞ中央にはあるが、時には右寄り左寄りに我等の歩く徑が通じてゐる。その徑の都合で深い木立を透して花を望むことにもなり、時には松原から出て眞向ひにこの美しい畑と相向ふことにもなる。畑の幅もおほよそ二三町のもので、それが續きも續いたり、松原の見ゆる限りは同じ様にこの燃え立つた花の畑が東西にかけてうち續いてゐるのである。一體に靜浦沼津から原にかけ、桃の名所と聞いてゐるが、斯うまであらうとは思はなかつた。花がなければ桑の畑も同じに見ゆるので、今まで氣がつかなかつたものであらう。何しろ、この松をとほしての桃の花見は今日の旅に思ひがけぬ附録なので、兩人とも早や何とならぬ旅めいた浮かれ心地になつて松原の中の徑を急いだ。

が、何しろ濱の松原である。歩いてゐる小徑はすべて濱から續いた石ころ道で、しかも砂氣のない拳大の小石ばかりが揃つてゐる。初めは快く歩き出したもの、もの、一里も歩いて來ると早や草鞋

の裏が痛くなつた。『濱へ出て見ようか』と言ひながら松原を左に抜けて、白々とした荒濱に出て見ると駿河灣の輝きが眼の前にあつた。麗かな日ざしに照らされた海面からは靄とも霞ともつかぬものがいちめんに片靡きに湧き立つて、左手向うに突き出てゐる伊豆半島の根にかけうつすらと棚引いてゐる。それと向ひ合ふ筈の御前崎のあたりは全く霞み果て、影も見えず、僅かに手近の三保の松原が波の光の上に薄墨色に浮んで見える。ちら／＼と寄する小波も全くこんな大海の岸であるとは思はれぬ風である。見てゐる瞳は自づと瞑ざ、れ吐く呼吸は自づと長く、いつか長々と身體をも横たへたい氣持となる。

また松原の中の小徑に歸つて歩き出したが、桃の花は相變らず其處に美しく見えてゐるが、兎に角に痛い足の裏である。なまなかにいま投げ出して休んだだけ、一層に痛みを感じ出して來た。終ついにに我を折つて桃畑の向うに町の家並の見え出したを幸ひにそちらへ向けて松原から出てしまつた。そしてその町の取つ着きから平坦を極めた廣やかな大道を伸び／＼として歩き出した。即ち其處は五十三次のうち沼津の次に當る原の宿であつたのだ。

一筋町の細長い其處を離れると、いよ／＼廣重模様の松並木が道の兩側に起つて來た。並木を通し、て右手眞上には富士、左には今までと反對に桃畑を前にした松原が見えてゐる。道のよきに歩みも早く、いつか鈴川近くなつたが、おほかた田子の浦はこの邊に當ると聞いてゐたので道を左に折れ、こ

の邊よほど木立の疎くなつた松原を抜けて濱へ出て見た。濱の砂は先程休んだあたりの小石原と違つてこまかい眞砂であつた。そして濱はずつと廣くなつてつぎつぎに低い砂丘が起伏して居る。松原つづきの小松が極めてとび／＼にそれらの砂丘に散らばり、所によつてはそれとも見えぬ瘦麥が矢張り畝をなして植ゑられてゐた。一帯の感じが何となく荒涼としてゐて、田子の浦といふ物優しい名の聯想とは全く異つてゐるのを感じた。振向くと見馴れた富士の姿も沼津あたりとは違つて距離も近く高さも高く仰がる、のであつた。傍へに富士川があり、前にこの山を仰ぎ背後に駿河灣を置いた眺めは太古にあつては一層雄大なものであつたに相違ないと思はれた。

思はず長い時間を其處で費し、また街道に出て暫く行くと道はや、に海岸を離れて愛鷹山の根に向ふ形になる。そしてその向うに吉原宿の町が見えてゐる。なるほど此處では廣重の繪の左富士を想はず角度にその山を仰ぐのであつた。然し、我等は吉原には行かず、鈴川驛から汽車で富士川を渡り、蒲原の宿で降りて、またて／＼と歩き出した。

蒲原から由比にかけては道は直ちに海に沿うた山の根をゆくのであつた。海岸には土地名物の櫻海老がうす赤く乾し並べられ、山には一帯に植ゑ込まれた蜜柑畑の間に、とび／＼に山櫻が咲いてゐた。由比を出抜くる時、惜しい事に薩陀峠の舊道を越すのを忘れて、汽車沿ひの磯端を歩いてしまつた。そして汽車の隧道のあるあたりでは、浪打際に降りて手を洗つたり貝を探したりして戯れた。

今日は興津泊りの豫定であつたが、先づ其處の園藝試験場に知人を訪ねてみると伊豆の方へ旅行して留守だといふので、まだ日は高いつそ静岡まで伸して置かうと急ぎ足に宿はづれの清見寺に詣で、早速汽車に乗つてしまつた。日は高くとも、もう脚の自由はきかなくなつてゐたのだ。

静岡驛を出ると細かい雨が降つてゐた。思ひがけぬ事であつたが、悪い氣持はしなかつた。驛前通りの宿屋によつて、湯上りの勞れた脚を投げ出しながらちび／＼酒を呑んでゐると、雨はいよいよ本降りになつて來た。丁度宿屋の前に何やらの神社があつて四五本の櫻がその庭に咲き綻び、しよぼしよぼと雨に濡れ、まだうす明るい夕方の灯に映つてゐる眺めなど、何だか久しぶりに旅に出てゐる様な氣持を誘つて自づと銚子の數を増して行つた。

遅い夕飯を終つた頃、幸ひ雨間となつてゐたので出て七間町あたりを彷徨ひ、カフェーパウリスタといふ名を見附けて其處へ寄つた。ひどく酔つた末、明朝訪ねるつもりであつた法月俊郎君方に電話をかけると、彼は驚いて弟浩二君と共に其處へやつて來た。そして更に一杯飲み直し、十二時すぎで宿に歸つた。

朝眼が覺めるとばしや／＼といふ雨の音である。どうしやうかと、枕のまゝで永い間村松君と今日の事やら無駄話をしてゐるが、幾らかづ、明るんで來る空を頼みに、豫定通りに出懸けることにきめた。法月君方に立寄つたが、濡草鞋を解くがめんだうさに店先に立話をして別れて行かうとすると、

それでは私も丸子まで出かけませう、幸ひその側に吐月峯がありますから其處へも寄つて見ませうといふ。吐月峯とは可笑しな名だと思ひながら問ひかへすとさういふ名のお寺で、もとその寺から例の灰吹を作り始めたとかいふことだといふ。

びしや／＼と三人雨の中を歩き出したが、明るむどころかますますひどい降りである。我等はどうせ濡れる覺悟の尻端折だが、足駄ばき長裾の法月君にはいかにも氣の毒であつた。名物の安倍川餅屋が安倍川橋の袂にあつて、大きな老木の柳のみどりがその門におほらかにそよいでゐた。法月君にすすめられたが、先づ／＼先きの芋汁を楽しみに餅だけは割愛する事にして橋にかゝつた。随分長い橋である。横飛沫の傘の蔭から見ると川上の方に、これもこの邊の名所の木枯の森といふのが川原の中に見えた。

歩くこと二里ばかり、丸子の宿は低い藁屋の散在してゐる様な古驛であつた。宿はづれの小川の橋際に今は唯だ一軒だけで作つてゐるといふところ、汁屋にとろ、を註文しておいて其處から右折、四五町して吐月峯に着いた。先づ小さな門を掩うてゐる深々しい篁が眼についた。そしてその篁の蔭には一二本づゝの椿と梅とが散り残つて、それに幾羽とない繡眼めじろ兒が啼き群れてゐた。門を入ると、泉水から續いた裏の山に山櫻の大きいのが二本ばかり、二分三分咲きかけてゐるのが見えた。花も蒼もいゝが、ことに雨に濡れていよ／＼柔らかな薄紅色にそよいでゐる若葉が何ともいへず美しかつた。法

月君と知合らしい住職は留守であつたが、通された部屋で暫く休んだ。寺とは云つても謂はゞ庵で、造りも小さく、年代も餘程古寂びてゐた。土地の有志たちは目下この由緒ある建物のすたれるのを惜んでとり／＼に修繕費募集中であるさうだ。

庭も同じく小さなものであるが如何にも靜かに整つた寂びたものであつた。一帶の造りが京都の銀閣寺の庭に似てゐるのでその事を法月君に話すと、この庵を結んだ人は足利義政に愛せられた人で、現に庭先を圍んでゐる篁の竹などもわざ／＼嵯峨から持つて來て植ゑたものなのださうだ。かすかに池に音を立て、降り頻つてゐる雨を、またその雨の中に折々忍び音に啼いてゐる小鳥を聽いてゐると、もうとても宇津の谷峠を越して行く氣分がなくなつてしまつた。

先のところ、汁屋に歸つてその名物を味つた。とろ、屋と云へばよく聞えるが實際は一膳飯屋が好みに應じて作る／＼汁なのである。それにもう季も過ぎてゐるし、確かに名物に何とやらの折紙ではあつたが、ツイ窓際近く迫つてゐる山に白雲の去來するのを眺めて一杯二杯と重ねてゆく地酒の味と共に矢張り拙いと言ひ切ることの出來ぬものではあつた。

或る日の晝餐

或る日の午前十一時頃、書き悩んでゐる急ぎの原稿とその催促の電報と小さな時計とを机の上に並べながら、私は甚だ重苦しい心持になつてゐた。

机に兩肘をつけて窓のそとを見てゐると頻りに櫻が散つてゐる。小さな窓から見える間に一ひらか二ひらか、若しくははらくとうち連れて散り亂れてゐるか、その花片の見えない一瞬間だに無い様に、ひらく、ひらく、はらくと散つてゐる。曇り日の濕つた空氣の中に何となく冷たい感觸を起しながら、あとからくと散つてゐる。割合に古木の並んだ庭さきのその木の梢にはまだみつちりと咲きかたまつてゐるのだが、今日はもう昨日の色の深みはない。見るからにほの白く褪せてゐる。その褪せた花のかたまりの中から限りもなげに小さな花びらが散り出して來るのである。

『今年の櫻もけふあたりが終りかな』

さう思ひながら私はたうとペンを原稿紙の上に置いて立ち上つた。そして窓際の椅子に行つて腰掛けた。見れば窓下の庭も、庭つゞきの畑も、いちめん眞白になつてゐる。たまくとあたりの木等

に冷たい音を立てながら風が吹いて來ると、ほんとに眼の前に渦を卷いて花の吹雪が亂れたつのである。

少し身體を前屈みにすると眞白な櫻木立の間に香貫山が見える。その圓みのある山を包んだ小松の木立もこの數日急に春めいて來た、といふより夏めいて來た。山いちめんの小松原の色がありありとその心を語つてゐる。黒みがかつたうへにうす白い綠青を吹いてゐるのである。

何といふことなく私の心は靜かに沈んで行つた。そして頻りに山の青いのが親しくなつた。時計を見るとかれこれ十二時である。あれこれと考へたすゑ、私は椅子を立つた。

茶の間に來て見ると妻は裁縫道具を片づけてゐた。晝飯を待つて兩人の小さな娘はもうちやんと其處に來て坐つてゐる。

『濟まないが、お握りを三つほど拵へて呉れないか、海苔に包んで……』

不思議さうにこちらを見上げた妻は、やがて笑ひながら、

『何處にいらつしやるの。』
と訊いた。

『山に行つてお晝をたべて來やうと思ふ。ウキスキーがまだ残つてゐたね。』

その長い壘を取り出して見ると、底の方に少し残つてゐた。それを懷中用の小型の空壘に移して、

坐りもせず待つてゐると眞黒な握り飯が出来て来た。

『おさいが何もありませんが……』

『澤庵をどつさり、大切にに入れて入れて呉れ。』

それらを新聞紙に包んで抱へながら裏木戸から畑の中へ出た。

畑つゞきにその山の麓まで私の家から五丁と離れてゐないのだ。畑には大抵百姓たちが出てゐた。

麥は穂を孕み、豌豆には濃い紫の花が咲いてゐる。附近の百姓家からでも來るのか、そんな畑の中にも櫻の花片の散つてゐるのが見られる。古い寺の裏を通りすぎて登りかゝる道はこの海拔六百六十尺の小山に登る四つ五つの道のうち、最も峻しい道である。然し、それが私の家からは一番近い。

小山ながら海寄りの平野に孤立して起つた様な山なので、この頂上からは四方の遠望が利く。北東には眞上に富士が仰がれる。が、その山の形よりその裾野の廣いのを眺めるのに趣きがある。次第高になつてゆく愛鷹と足柄との山あひの富士の裾野がすつと遠く、もの、五六里が間は望まれるのである。然し、その日は私は頂上まで行き度くなかつた。其處ではどうしても氣が散りがちであるからだ。そして中腹の、や、窪みになつた所に行つて新聞包を置いた。

其處には矢張り他の場所と同じく一面の小松が生えて、松の下には枯草が程よく地を覆うてゐる。よく私の行く所なので多分私が吸ひすてたに相違ない煙草の吸殻などが枯草のかけに落ちてゐる。蜜

柑の皮の乾びたのも見えた。其處からは海を見るに都合がい、。ことに廣い駿河灣一帯よりも直ぐ眼の下に見える江の浦の細長い入江を見るに恰好な所に當つてゐる。

『やれ〜』

何といふ事なく獨り言を言ひながら、私は其處につき坐つた。そして煙草に火を點けた。

入江を越した向うの伊豆の連山には重い白雲が懸つてゐた。上は濃く、下は淡く、そしてその淡いところだけがかすかに動いてゐる様に見えた。山かけの入江の海はいかにも冷たく錆び果て、何處をたづねても小波ひとつ立つて居やうとも思はれなかつた。不思議とまた、いつもは必ず二つか三つ眼につく發動船も小舟も一向に影を見せなかつた。入江に沿うたこちら側の長い松原の蔭には蓐ばかりが散り残つてゐる様な桃の畑が濕り深い空氣の中に氣味悪い赤味を帯びて連り渡つてゐた。

ふところから小さな壘を取り出すと一二杯續けてウキスキーを飲んだ。重い曇りの底を吹くともなく吹いてゐる風は、ことに山の上だけに相當に寒かつた。一杯二杯と續けてゐるうちに、ぼつりと冷たいものが額に當つた。氣をつけると袖にも足袋にも小さな雨が降つてゐる。然し眞上の空は青みこそ無ければいかにも明るく晴れてゐるので、私はそのまゝ、ぼんやりと海を見ながら盃をなめてゐた。幾らかづ、廻つてゆく酒の酔は次第に心を靜かにし、眼さきを明らかにしてゆくのであつた。

が、終にあたりの葉の深い松の木を探してその蔭に引込まねばならなかつた。急に雨の粒が大きく

荒くなつて来たのである。然し、一度落ち着いた心持を撥き立てるほどの降りかたでもなかつた。松の蔭に入ると、惜しいことには海は見えなくなつた。そして、小松のことで、眞直ぐにしやんと坐つてゐることも出来なかつた。前くぐみになりながら片手に持った小壘の酒は不思議な位減りかたが遅かつた。壘を持つたまゝ、片手で新聞包を開いて澤庵をつまみ握飯にも手をつけるのだが、それもなか／＼盡きなかつた。

次第にあたりの松の葉が濡れて行つた。それ／＼の小松のそれ／＼の枝のさきにはいづれにも今年の新しいしんがほの白く伸びてゐる。淡い緑のうへに白い粉を吹いた様なその柔かなしんのさきにはまた、必ず桃色か紅色の小さな玉が三つか四つづゝ着いてゐた。露ほどの大きさを紅色の美しいものあり、既に松かさの形をして紅るの褪せてゐるのもあつた。それに微かに雨がそゝいでゐるのである。また、枯草の中には眞紅なしどみの花が咲いてゐた。濡れた地べたにくつ着いたまゝ、勿體ない清らかな色に咲いてゐる。

帽子のさきに垂れてゐる松の葉のさきからぼつり／＼と雫が垂りだした。まだ然し羽織の袖は充分には濡れて来ない。幾度かすかして見る壘の底にはまだ少量の酒が残り、寧ろ海苔の握飯の方が先に盡きかけた。心はいよ／＼靜かに明るく、あたりの木も草も、眞直ぐに降る山窪の雨の白さも、みな極めて美しい眺めとなつて来た。

『燕！』

私は思はず聲に出して、自分の前の山合にまひ降りてはまた高くまひ上つてゆく小さな鳥に眼をとめた。まつたくそれは今年初めて見る燕の鳥であつた。

『来たなア』

さう思ひながら私は松の蔭に這ひ出して行つた。

一羽、二羽、三羽と續いてその身軽な鳥は眞青な小松の原を渡つてゐるのだ。

幸ひと雨は晴れて来た。急に輝いて見える伊豆の山の白雲の蔭の海の色は山の根だけ日本刀の峰などに見る青みを宿し、片側の廣い部分にはさら／＼として細かな波を立て始めてゐた。

旅と繪葉書

行くさきぐで買つて来ておいた各地の繪葉書がいつ溜るともなく三寸高さに重ねられて括つてある。をり／＼それを引出して来ては、舊い旅日記などを讀み返す氣になつて楽しむのだ。

いま最初にとりあげた一枚は「大和長谷寺方丈」の繪葉書であつた。おほまかな大きな建築とその兩側に何やらの老木がひつそりと紙面いつばいに寫つてゐるのみで、人影ひとつ見えない。

見て居ると何やら佻しい記憶が湧いて来る。私がこの寺に詣でたのは三四年前の五月か六月、京都に滞在し、比叡山に滞在し、大阪に滞在し、奈良に立ち寄り、それら至る所で多くの人と會つて酒びたりになりながら一ヶ月あまりの後、漸く自分だけになつてよろぼひ／＼この長谷へやつて來たのであつた。よろぼひ／＼の言葉は可笑しいが、心中全くその心持のしたのをよく覺えて居る。ほんたうは高野山に登つて、人に疲れ酒に腐れた身體を休め淨めたいと思つてゐたのだが、何しろ旅費が殆んど盡きかけてゐた。日數もずつと豫定を超してゐた。そして上下何里とかある山路にかゝる元氣も全く消耗してゐた。それかと云つて一度心に企てた事を他愛なくオミットしてしまふのも氣が濟まなかつた。奈良の宿屋で腹這ひになりながらその邊の地圖を開いて、登らうか止さうかと心を腐らせてゐるうちに、ふと見つけたのがこの長谷の所在だつた。咄嗟のうちに私はこの長谷にお参りして高野も參の氣を慰め、兼ねては其處で綿の様になつてゐる身體に精一杯靜かな睡眠を一夜なり二夜なり取り度いものと思ひついたのであつた。奈良の宿には大阪から送つて來てゐる人もあり、土地の歌人も三四寄つてゐた。

耳梨山、畝傍山などがとろんけんになつた酔眼にいかにも寂しく映つて過ぎた。そして降り立つた初瀬驛の前に開けた地勢は何となく低い山垣の相迫つた峽間の景色を思はせた。初瀬驛から長谷寺まで一寸の距離があつた。その道の側をばかなりな溪が流れてゐた。同じ汽車から降りた可愛らしい中學生と前後して私は歩いてゐるが、一種の物佻しさからその美少年に問ひかけた。

『長谷寺の見える様な近くに宿屋がありますか。』
『あります。』

『この溪に沿うて居ればなほい、し、沿うてゐなくとも極く靜かな宿屋は何といふのです。』
ほんたうに美しいその少年は頬を染めて初め答へなかつたが、一二度も訊くうちに、多分××屋といふのがい、のでせうと女の子の様にはにかんで教へて呉れた。

私は喜んでその宿屋に寄つた。そして夕方近かつたので手提や洋傘を預けておき、兎に角長谷寺へ詣でて來ることにした。狭い、や、坂になつてゐるたかに記憶する參詣道の兩側には幾軒となく宿屋が竝んでゐた。そして殆んど軒別に留女が出て呼び立てた。それがみな目立つてあだめいてゐる。現に店さきの大鏡臺を持ち出して化粧してゐるものもある。家の古びやうからさうした女の風俗に私は何となく時代離れのしたなつかしさを感じながら、と見かう見しつ、お寺の下に着いた。長く屈折した石段を登つてゆくと評判の牡丹は既に時過ぎてたゞ青々とその兩側に茂つてゐたのであつた。

宿屋に歸つて部屋に通つて見ると、これはまた、恰も溪の流れにさし出た様な位置に當つてゐる。心から嬉しく、二人ほど代つて出た給仕の女をもわざと斷つて手酌でちびくくと幾日にもないおちついた酒を重ね、願ひどほりにぐつすと眠つたのであつた。もう一晩と未練が出たのであつたが、何しろ懐中の寂しさが心をいらだて、翌朝は二本の酒にわれとなだめて紀伊路の方へ出立したのであつた。

あとで聞くと、長谷の宿屋といふのは昔の飯盛制度に同じく、宿屋と娼樓と殆んど相兼ねたもので評判なのださうだ。さう聞くと明るい店さきに持ち出された鏡臺もその蔭の大肌脱も、漸く意味が解つて來る。そして氣の毒だつたのは頬を染めて答へて呉れた彼の美少年の心のうちであつた。

「雨中の那瀑」といふのがその次に重なつてゐた。同じ旅のうちに見た紀州の那智瀑である。

寫眞が悪いのか、印刷が悪いのか、それともわざとさうしたか、上部に雲らしいぼかしを置いたばかりは全體眞黒い森らしいなかに、たゞ一條の白い瀑布が懸つてゐるのである。實は廣大な岩壁の眞中に瀑布が懸り、岩壁の上と、瀑から少し距たつた左右とに深い森があつた様に私は記憶する。私の登つたのもまた雨の中であつたが、いつとなく森に湧いた雲が徐ろに瀑の上に渡つてゆく、その眺めが一層この瀑を大きくしたものであつた。が、流れ落つる下に立つて仰ぐよりも私は紀州の沖を通りながら汽船から望んだこの山腹の瀑布を面白いと見たのであつたが、その繪葉書にいゝのがなかつた。

その日、私は瀑を正面に眺めらるゝ山中の宿屋に泊つた。そして詠んだ數首の歌がある。

末うすく落ち來る奈智の大瀧のすゑつかたか

けて湧ける霧雲

白雲のかかればひびきこもりあひて瀧ぞとど

ろくその雲の蔭に

岩裂けるひびきと聞え澄みゆけばうらかなし

くぞおほ瀧聞ゆ

とどろとどろ落ち來る瀧を仰ぎつつ心さむけ

くなりにけるかも

雲のゆきすみやかなれば驚きて雲を見て居つ
瀧のうへの雲を

「宇都宮二荒山神社。」

大きな平野の中に在る市街の端に起つた小高い丘陵の地勢を占めてこの神社は嚴かに立つてゐた。何しろ四方が打ち開けた平野だけに、單にこの丘の下に平たくかたまつた市街と云はず、遠く平野全帯に臨み給ふ神威を思はせられた。古びて、案外に固く且つ廣々としたこの市街には何處といふことなしに水が多く、そこらに櫻の花が咲いてゐた。

行つたのは昨年四月であつた。

ひとしきり散りての後をしづもりてうららけ

きかも遠き櫻は

町なかの小橋のほとりひややけき風ながれる

て櫻散るなり

「リウマチス藥湯屋之湯藥師全景」といふのがある。信州松本だひらから桔梗が原に續いた平野の東に起つた鉢伏山の麓にある鑛泉である。麓と云つてもかなり登つた山麓に當つてをり、大きな山津波

のあとに湧き出た湯だといふので普通は「欠けの湯」と呼んで居る。湯宿は大小合せて三四軒、湯槽は多分一個所にあるのみで、薪で沸かすのである。沸し湯の常としてきたない事いふまでもなく、宿屋その他の設備の悪いのと土地の不便なため、入湯者は主として附近の爺さん婆さんと、リウマチ患者に限られてゐる様だ。その病氣には實によく效くといふ。杖にすがつて來た者が大手を振つて歸れる様になつたといふのでその杖を奉納するために出來た様な藥師堂が湯宿の上手に建て、あつて、繪葉書にも寫つて居る。四邊はたゞ一面の落葉松からまつの林である。十棟ほどごたくとかたまつて寫つてゐる湯宿の屋根にはそれ／＼石が置いてある。

この湯の麓の村にこれ緣故があるので、私は前後二三度もこの原始的な湯に行つた。最後に行つたのはその村の小學校の教師をして居る友人と一緒にあつた。友人の時間の都合から私だけ一人さきに行つてゐることになつた。そして通された十疊ほどの部屋には既に三組五人の先客があつて炬燵に入つてゐた。學生らしいのが二人、他の二組はいづれも百姓らしく、一人の客は手持の辨當をむしや／＼とたべてゐた。斯う多勢と合宿をせねばならぬとなると私の豫期は少なからず狂つて來る。久しぶりに會つた友人とゆつくり飲み且つ語りたいの希望は當然諦めねばならぬからである。變な奴が來たといふ風に白眼視されながら、私は部屋の隅に立つたり坐つたりしてゐたが、そのうちに友人がやつて來た。友人も驚いた。そして永い間帳場と談判した末、新築したばかりらしい離室の二階に移

ることが出来た。

二階からは松本だひらを越して例のアルプス連峰を望むことが出来た。それは實に素晴しく大きな美しい眺望であつた。よく晴れた眞晝で、あれは何嶽、こちらは何と明らかに指示された。

辨當を作つて貰つて私たちは裏山に蕨摘みに出かけた。若い落葉松林の下には時すぎた蕨の大きいのが無数にあつた。杜鵑が向うの峰で絶えず啼いてゐた。摘みつかれた兩人は、落葉松の柔かな落葉の上に寝ころんだ。そして友人はこの頃行き詰つてゐる自分の生活問題、結婚問題について、おどおどと私の目顔を窺ふ様にしながら語り出した。あまりに善き性質と弱い意志とを持つたこの年若い友人は、することなすことに、すべて蹴つまづきがちで、断えず我々知人仲間から罵り續けられてゐた。そして今日も亦わざ／＼私を呼ぶ様にして、種々の出来事の判断を請うたのであつた。

宿屋に歸ると離室の二階に二室ある他の一室には年若い二人の女が入つてゐた。

『製絲工場の女工ですよ。』

と友人は私に教へながら、

『この邊で一寸した女工となると大變な勢ひですからねエ。』
と言ひそへた。

襖ごしの二人の女工の騒ぎは、私たちの楽しんだ夜の酒をして折々不純なものにしたのであつた。

桃の實

武藏から上野へかけて平原を横切つて汽車が碓氷にかゝらうとする、その左手の車窓に沿うて仰がる、妙義山の太岩壁は確かに信越線中での一異景である。丁度そのあたり、横川驛で機關車は電氣に代る。そして十分か十五分の停車時間がある。辨當賣の喧しい聲々の間に窓を開いて仰ぐだけに、空を限つて聳え立つたこの異様な山の姿が一層旅心地を新たにする様だ。

驛から發車して間もなく、同じ左手にかなり強い角度を以て碓氷川へ傾斜してゐる桑畑か何ぞの中に坂本といふ舊い宿場が見下さるゝ。今は横川驛の影響で、もあるか、幾らか賑つて居る様に見えるが、まだ汽車が蒸氣機關車の煤煙と共に碓氷の隧道に走り入つてゐた頃は、まるで白晒しほりれた一本の脊髄骨の捨て、ある様な、荒れ果てた古驛であつた。明治四十一年の眞夏、私は輕井澤を午後立つて碓氷の舊道を歩いて越え、日没頃にその坂本に入った。碓氷峠を挟んで西と東、輕井澤と共に昔の中山道では時めいた宿場だつたに相違ない其處なので一軒位はあるであらうとあてにして來た宿屋がまるで無かつた。たゞ一軒、蔦屋といつたと思ふ、木賃宿があつた。爺さんと婆さんとに一度断られ

たのを無理に頼んで泊めて貰ふことになつた。

酒を取つて来て貰つたが酸くて飲めない。麥酒を頼んだが、そんな物はないといつて取合はない。せめて葡萄酒でもと今度は自分で探しに出たが、全く何も無かつた。そして代りに焼酎を買つて来た。酸くないだけでも遙かにましであつた。夏も火を断たぬ大圍爐裡で爺さんを相手に飲んで床に入つた。宿は爺婆だけで、他に誰もゐなかつた。息子も娘もあるのだが、土地には何もする用がないので皆出稼ぎに行つてゐるのださうだ。

ほんのとり／＼としたと思ふと眼が覺めた。湧く様な蚤の襲撃である。一度眼が覺めたと共に、もうどうしても眠れない。時計を見るとまだ宵の口だ。私は戸をあけて、月の出た石ころ道を少し歩き下つてまた焼酎を買つて来た。もう少し酔つて眠らうとしたのである。

翌朝、まだ月のあるうちにその宿を立つた。そして近道をとつて妙義山へ登らうとした。一度碓氷川を渡つて少しゆくと、また一つの谷を渡らねばならなかつた。其處には橋が流れ落ちてゐた。二三日前の豪雨のため、まだ其時の水量が相當に残つてゐた。残りは爺さんの置土産にしようと思つて買つて来た焼酎をあらかじめ私は飲んでしまつてゐたので、其頃もまだ充分に酔つてゐた。普通ならばあと戻りをしたであらうが、その酔が躊躇なく私を裸體にした。そして頭に着物と荷物とを押し頂いて、しかも下駄を履いたまゝ、その谷川の瀬の中へ入つて行つた。

山谷の事で、流の中に隠れてゐる石は二抱へ三抱への荒石ばかり、少年の頃の経験からその岩の頭を拾つて足を運ぼうとしてゐたのであつたが、洪水の名残は思ひのほか激しく、僅か七八歩も踏み出したと思ふと、忽ち私は途方に暮れた。そして自信力の失せると共に、何の事もなく私は横倒しに倒れてしまつた。倒れたまゝ、三四間が間くる／＼と押し流された。辛うじて瀬の中に表れた大きな岩と岩との間に踏み止つた時には、私の手には帯でくるんだ着物だけが僅かに残つてゐた。書籍手帳其他を入れた手馴の旅行袋も、帽子も下駄も、面白い勢ひで二三間さきをくる／＼と流れて行きつ、あつたが、もう手を出す勇氣は無かつた。見れば其處から七八間下を碓氷川の本流が中高に白渦を巻きながら流れ下つてゐた。其處まで落ちてゆけば、荷物はおろか、自分自身の運命も大抵想像出来るのであつた。

這ひ上つた岩は自分の渡らうとした向う岸に近かつた。必死の覺悟で、再び流の中に入つてゆくと、速く下駄をぬけばよかつたと悔まれたほど、意外に樂に渡り上ることが出来た。渡り上ると共に濡れた着物を乾かす智慧も出ず、長い間私は石の上につき坐つて息を入れた。そして束ねたまゝ、で雫の垂れるそれを着て——財布と時計とが袂の中から出て来たのが無闇に嬉しく勇氣をつけて呉れた——とぼとぼと歩き出した。

其處は妙義の麓の、かなり深い雜木林に當つてゐた。雨のあとの、それでなくとも濕つばい林の中

の道を濡れそぼられた白地の浴衣で、下駄も履かず、びしやくびしやく歩いてゆく姿は、われながら年若いあはれな乞食を想はせられた。幸ひに人に逢はなかつたが、半道も歩いた頃、向うから大きな策を提げて来る年寄の百姓を見た。初め彼は氣がつかかなかつたが、行き違はうとする頃になつて私の姿を見て喫驚した。お互ひに黙禮して行き違ひさまに見るとその策には桃がいつぱい入れてあつた。何の氣なく行きすぎたが、私は急にその爺さんに聲がかけて見度くなつた。そして、其儘振返つて見ると、爺さんも丁度こちらを見やうとした所であつた。

『ア、ちよつと、お爺さん！』

爺さんは明らかにびっくりとした。が、流石に私の聲を聞いて走り出すまでにはならなかつた。返事はしなかつたが、立止つて不安さうに振返つた。

『その桃を二つ三つ賣つて呉れませんか。』

さう言ひながら、二三步私は歩き戻つた。

『桃かね。』

爺さんもさう言つて、無理に笑はうとした。

『今朝、宿屋で御飯を待たずに出て來たのでおなががついて困るのです。それに、其處の谷で斯んなになつて……』

袂をあけて見ると、まだしとくと濡れてゐた。

『ハ、ア、さうかね、其處の谷でかね……』

爺さんの聲も漸く落ちついて來た。そして私が財布をとり出すと、

『二つ三つなら錢はいらねエ、たい上げますべえよ。』

と齒の無い、皺深い顔で、ニコ／＼と笑ひながら片手で桃を掴んで呉れた。

『い、え、それぢア困る……、ではこれだけ取つといて下さいな。』

つまみ出した十錢銀貨もまだ露つぽかつた。

『う、ん、そんなにやいらねエ、おつりもねエ。』

爺さんは惶て、手を振つた。

『ではもう二つこれを下さい。』

と手づから私は桃を取つた。そして、何といふことなく爺さんを其處に呼びとめておく事が氣の毒になつたので、

『どうも難有う、お蔭で元氣が出ましたよ、左様なら！』

と帽子のない頭を下けながら、急ぎ足に歩み出した。爺さんはなほ暫く立つてゐたが、やがてこれも、あちら向きにしよぼ／＼と歩き出した。

私は惶て、一つの桃に齒をあてた。大口に噛み缺かれた桃の頭は、實に滴る様な鮮かな紅るの色をしてゐた。全く打ち續けてその汁を啜り取る様に私は口をつけた。

一つ二つと夢中に噛んで、ひよつと上を見るといつか疎らになつた林の真上いつばいに例の妙義の岩山が真黒い様に聳え立つてゐるのが見えた。

虻と蟻と蟬と

光を含んだ綿雲が、軒端に見える空いつばいに輝いて、庭木といふ庭木は葉先ひとつ動かさず、それぞれに雲の光を宿して濡れた様に静まつてゐる。蟬の聲はその中のあらゆる幹から枝から起つてゐる様に群り湧いて、永い間私の耳を刺して居た。

數日續いた暴風雨のあとで、今朝届いた雑誌を一冊載せたばかりの机の上には冷たい濕氣が浸みてゐた。讀むともなく開いた表紙の折目の蔭になつた隙間に口に含んだ煙草の煙を吹き込むと雑誌の向側から直ぐ眞白な濃い煙がさつと机のおもて一面に擴がつて出た。そして机のしめりに浸み込む様にベツトリと木地にくつつ着いたまゝ、這ひ擴がつてゆくのみで少しも上へは昇らない。もう一度私は同じ様に折目の下から煙を吹いた。前の煙のあとを追うて浸み擴がつたそれは、やがてよれよれに小さな渦卷を作りながら僅かに上に昇らうとする。二つ、三つと小さな渦は出來たが、矢張り上には立たなかつた。一二寸の高さに昇つたかと思ふと、くづる、様に下に靡いて擴がつた。渦卷は山の形に、下に這ふ煙は信濃あたりの高い山から山の間に見る雲の海の形にも似て眺められて、私は幼い靜かな

興味を覚えながら幾度となくその戯れを繰返した。

不圖落付かぬ何やらの音が聞えた。紙とガラスの二重になつてゐる窓の障子の間にまひ込んだ何やらの羽蟲が立つる音である。疲れ果てたそして極めて静かなその場の氣持を壊さない様に、私はわざわざ座を立つてその蟲を逃さうとした。見ると、それは大きな虻であつた。一度も二度も今朝がたから私を螫して逃げて行つたそれである。

波立つ胸で私はその少し前に用意して來てゐた蠅叩きを取つた。そして一打ちにその大きな虻を打ち落した。あり／＼と強過ぎる力で打たれた蟲は、片羽をもがれ、腸を出して死んでしまつた。

そのきたない死骸を見て一時當惑した私はすぐそれを可愛がつてゐる蟻に與へようと思つた。離室はなれになつてゐる私の書齋の石段には、常に三四種類の蟻が來て餌をあさつてゐた。眼にも入らぬ埃の様な追ふにも追はれぬ小さな薄赤い蟻はよく机から本箱の隅までも這ひよつて來た。ぶつ／＼胴體が三つに區切れて長さ七八分から一寸にも及ぶ大きな黒蟻もよく机のめぐりにやつて來て私を驚かした。常に鋭く尻を押つ立てて歩くや、小さな黒蟻は好んで人を螫し、またこれに螫されると必ず二三日は脹れて痛かつた。これ等のほかに、長さ一分ほどのほつそりした赤黒い蟻がゐた。この蟻は部屋にも上らず、どうかして着物に附いても容易に螫すことをしなかつた。で、私は餌さへあればこの見たところも他よりは可愛い蟻に與へるのを楽しみとしてゐた。

降りこめられてゐたあとの日和で、三段になつた石段にはありとあらゆる蟻が出揃つて駆け廻つてゐた。辛うじてその中に私の目指す蟻の一疋を見出した私は、その忙しげに歩いてゆく鼻先に虻の死骸を置いた。考へ深さうにその大きな餌のめぐりを一周した彼女は、くるりと向を變へると恐しい速力で或る方角へ駆けだした。思ひがけぬこの大收穫を報告し、少しも速く巢へ運搬するためにその仲間を呼びに走つたのである。

報告に行つた留守の間に他の蟻の族が幾度となくその周圍にやつて來た。私は力めてそれらを餌に近付けさせぬ様に用心した。この日の私の疲れた心はさうした場合に當然起る兩方の蟻の間の争闘を見るのがいやであつた。やがて、一つの石段の角の所からいまの一疋と思はれるのが姿を出した。と見ると、そのあとに引續いてぞろ／＼と長い列を作つてうねる様にその仲間がやつて來た。やれ／＼と私も微笑しながら其處を離れた。そしてそのまゝ茶の間に行つて夙くに時間の過ぎて居る藥を一服飲んで來た。再び離室に歸つて机に向はうとしながら一寸その石段を覗いて見て驚いた。ほんの僅かの間に、其處には既う私の見るを厭つた大争闘が石段の半ば以上に互つて開かれてゐた。埃の様な赤い小蟻、尻を立てた黒蟻、それに最初から餌を運んでゐた蟻、この三種族が眞黒になつて虻の死骸を中に噛み争つてゐるのである。むらむらと湧いた肝癢から私はまだ其儘其處に在つた蠅叩きを取るや否や、びしやりとその黒い蟲のかたまりに一撃を喰はした。そして續けさまにびしや／＼

と叩きつけて一切を其處から遠くはたき落してしまつた。

僅かの事にも波立ち易くなつてゐる自分の心持を鎮めるために、私は心を入れて机の上の雑誌を讀まうとした。耳に入るは蟬の聲である。さながら軒端から射す雲の光の中に電氣でも通つて居る様に、ひり／＼ひり／＼と耳から頭に響いて聞えて來た。

なまけ者と雨

降るか照るか、私は曇日を最も嫌ふ。どんよりと曇つて居られると、頭は重く、手足はだるく眼すらはつきりとあけてゐられない様な鬱陶しさを感じがちだ。無論爲事は手につかず、さればと云つてなまけてゐるにも息苦しい。

それが靜かに四邊あたりを濡らして降り出して來た雨を見ると、漸く手足もそれ／＼の場所に歸つた様に身がしまつて來る。

机に向ふもいゝし、寝ころんで新聞を繰りひろげるもよい。何にせよ、安心して事に當られる。

雨を好むころは確に無爲を愛するころである。爲事の上に心の上に、何か企てのある時は多く雨を忌んで晴を喜ぶ。

すべての企てに疲れたやうな心にはまつたく雨がなつかしい。ひとつ／＼降つて來るのを仰いでると、いつか心はおだやかに風いでゆく。なまけてゐるにも安心してなまけてゐられるのをおもふ。